



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | アイヌ・先住民研究センターの10年：2007～2017                                                       |
| Author(s)        | 常本，照樹；中村，睦男；丹菊，逸治 他                                                               |
| Citation         | 北海道大学アイヌ・先住民研究センターブックレット 第10号, 10, 1-190                                          |
| Issue Date       | 2018-09-20                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/79119">https://hdl.handle.net/2115/79119</a> |
| Type             | book                                                                              |
| File Information | CAIS_Booklet_10.pdf                                                               |



# アイヌ・先住民研究センターの10年

— 2007～2017 —

北海道大学アイヌ・先住民研究センター 編

北海道大学アイヌ・先住民研究センター  
ブックレット 第10号

10years of Center for Ainu and Indigenous Studies  
— 2007 ~ 2017 —

Edited by Hokkaido University  
Center for Ainu and Indigenous Studies

Hokkaido University Center for Ainu and Indigenous Studies  
Aynu Teetawanoankur Kanpinuye Cise  
Address : Kita 8 Nishi 6, Kita-ku Sapporo, 060-0808 Japan  
Phone and Fax : +81 11 706 2859

ISBN 978-4-907256-09-8



# 北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 開設記念式典

カムイノミ

「アイヌ民族伝統儀式」於クラーク会館南側ロイン

挨拶

中村睦男 北海道大学総長

加藤 忠 北海道ウタリ協会理事長

谷本一之 アイヌ文化振興・研究推進機構理事長

常本照樹 北海道大学アイヌ・先住民研究センター長

アイヌ古式舞踊

アイヌ民族博物館

講演

横田洋三

中央大学教授 国際連合人権促進保護小委員会委員  
人権教育啓発推進センター理事長

日時

2007年

4月14日 日 14:00～17:00  
(開場 13:30)

会場

北海道大学 クラーク会館 講堂

(札幌市北区北8条西8丁目)



●駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

入場無料

口絵：アイヌ・先住民研究センター開設記念式典ポスター（2007年4月14日）

# 目 次

|                                   |                      |     |
|-----------------------------------|----------------------|-----|
| ・序文                               | 常本 照樹                | 5   |
| ・センターの設立を振り返る                     | 中村 睦男                | 9   |
| ・言語学（言語アーカイヴ・プロジェクト報告）            | 北原 次郎太・モコットウナシ，丹菊 逸治 | 17  |
| ・歴史学（古文書プロジェクト報告）                 | 谷本 晃久，佐々木 利和         | 39  |
| ・博物館学（博物館プロジェクト／先住民族アート・プロジェクト報告） | 山崎 幸治                | 55  |
| ・社会学（社会調査プロジェクト報告）                | 小内 透                 | 73  |
| ・文化遺産学（先住民ヘリテージプロジェクト報告）          | 加藤 博文                | 85  |
| ・考古学（研究拠点形成事業【先端拠点型】報告）           | 加藤 博文                | 97  |
| ・おわりに：アイヌ民族と北海道大学                 | 長谷川 晃                | 111 |
| ○資料編                              |                      |     |
| ・アイヌ・先住民研究センターの活動【平成19～29年度】      |                      | 115 |

## 序 文

2005年12月に当時の中村睦男・北海道大学総長は、これまでのアイヌ民族と北海道大学との歴史的経緯を踏まえ、民族の尊厳を尊重しつつ、アイヌをはじめとする先住少数民族に関する全国的・国際的な研究教育を実施することを本学の「責務」とであると宣言した。アイヌ・先住民研究センターは、この責務を担う拠点として、2007年4月に北海道大学の共同教育研究施設として設置されたものである。当センターは、多文化が共存する社会において、とくにアイヌ民族をはじめとする先住民族に関する総合的・学際的研究に基づき、諸民族の互惠的共生に向けた提言を行うとともに、多様な文化の発展と地域社会の振興に寄与することを目的に、この10年間、活動が続けてきた。

当センターは、専任教員1名と兼務教員であるセンター長からなる小さな組織として発足したが、アイヌ民族に対する関心の高まりに唯一の国立の専門研究機関として応えるために徐々に拡充され、現在では、歴史学、考古学、文化人類学、博物館学、言語学、憲法学を専門とする8名の専任教員がアイヌ民族をはじめとする世界の先住民族に関する調査や研究を学際的に展開している。その他に、北海道大学の様々な部局に所属する兼務教員がおり、専任教員が専門としている分野の他に、政治学、社会学、観光学をはじめとする様々な分野でも調査研究に取り組んでいる。また、国内の諸大学や研究機関等はもちろん、先住民族が暮らす各国の諸大学や先住民族の諸団体等とも連携しながら共同研究を推進しているところである。センター発足以来、台湾、北米、英国、北欧などの8海外研究機関と学術交流協定（大学間交流協定の責任部局を含む）を締結しており、これはセンターの規模を考えると異例のことと言える。

本書は、当センターのこの10年間の研究の成果と今後の展開について、センター教員が組織する主要な研究プロジェクトごとにとりまと

め、いわばアイヌ研究・先住民族研究の最前線の状況を報告することを目的としている。もちろん、本書に収められているのはそのごく一部のエッセンスに過ぎないが、多くの読者が気軽に手に取り、研究の全体像を俯瞰するには便宜であろう。本書をブックレットという形式で公刊した狙いもそこにある。個々の分野の研究成果を深く知るには、関係教員の業績を参照されたい。また、当センターは、もう一つ、国及び自治体において進められているアイヌ政策に対してセンター教員の研究成果に基づく専門的助言をするとともに、アイヌ民族の声並びに諸外国の経験を伝える役割をも担ってきたが、これにかかる評価は、政策そのものの評価としてなされるべきであろうから、本書ではそのような実践的側面と言うより、その基盤をなしている専門的研究の成果に焦点を当てていることを申し添えたい。そのほかに、本書はこの10年間のセンターの各種事業の概要を示す資料を収めている。

当センターは、その名が示すとおり、自前の学生を持たない「研究センター」として設置された。それでも、この10年間、全学教育や文学研究科・文学部、法学研究科・法学部に授業を提供するほか、学内外で市民を対象とする講演会等を頻回に実施することなどによってアイヌ民族をはじめとする先住民族に関する教育に取り組んできたが、大学院文学研究科の組織改編によって2019年4月に開設される大学院文學院のなかに「アイヌ・先住民学講座」を設けることにより、いよいよ本格的に教育にも参画することとした。2019年度からは、教員が所属し研究活動を行う組織としての「アイヌ・先住民研究センター」と、大学院生が所属し、当センターの教員から専門教育を受ける「文學院アイヌ・先住民学講座」の二重構造になる。文學院の一講座ではあるが、高度の自律性を有し、人文学に限られないセンターの学際的特色を活かした教育が行われることは言うまでもない。

アイヌ・先住民研究センターが次の10年に向けて踏み出すにあたり、本書が、アイヌ・先住民研究、ひいてはアイヌ民族とその文化に対する

多くの国民の関心を呼び起こし、アイヌ民族が先住民族というユニークな存在として、民族共生社会の中で正当な地位を占めることの一助となれば、これに過ぎる喜びはない。

2018年 8 月

北海道大学アイヌ・先住民研究センター長 常本照樹



# センターの設立を振り返る

中村 睦男

## はじめに

筆者が北大総長を務めたのは、2001年5月から2007年4月までの6年間である。この間の最大の問題は、2004年4月から実施された国立大学の法人化であった。国立大学の法人化は、大学の基盤的経費である運営費交付金の削減を伴っていたため、この10年間で人件費は1割減になり、若手研究者の育成が難しくなるなど大学の運営に大きな支障をもたらしているという批判が、今日なお絶えないところである。他方、法人化は大学の自主性を高め、学長の主導によって全学的な見地から新たな組織を作り、学際的な教育研究を推進するとともに、大学の特色を出すという積極的な面もあることは確かである。北海道大学において、アイヌ・先住民研究センターを設置したことは法人化のメリットを活かしたものであるという評価が可能である。大学の歴史的な観点からは、アイヌ・先住民研究センターの設立は、第2次大戦前に設置された北方文化研究室の「再興」によるアイヌ文化の学際的研究の推進と位置づけられる。

## I 北方文化研究室の果たした役割

### 1 北方文化研究室の新設と特徴

農学、医学、工学、理学の四つの学部を有する理系の大学であった北海道大学は、1937年10月に学内措置で北方文化研究室を設置した<sup>1</sup>。この研究室の特徴は、専任の研究員を置かず、学内の研究者の共同利用施設として、北方文化の総合的研究を図ろうとすることにあった。また、札幌農学校以来図書館に集積されてきた図書、写本、地図などの研究資料の収集も設置目的の一つであった。司書業務は、農学部助手兼務の高倉新一郎が担当する。研究紀要である『北方文化研究報告』は、戦

前（1939～1941）に6輯，戦後（1952～1962）に14輯発行され、アイヌに関する調査，研究論文が中心であった。

北方文化研究室が残した最大の功績は，知里真志保に対して研究および研究発表の場を提供したことと云える。知里は，1943年6月に樺太庁立豊原女学校を健康上の理由で退職し，登別に帰郷した。同月に北方文化研究室嘱託に発令され，文学部教授現職中の1961年に病没するまで，北方文化研究室を研究の場とし，『北方文化研究報告』を研究発表の場としたのである<sup>2</sup>。国際的な地質学者である理学部の湊正雄教授との交流は，アイヌ語地名の研究に役立ったと云われている<sup>3</sup>。

知里真志保の活躍について，同世代の高倉新一郎は，「驚くべき精力を集中してアイヌ研究に取り組み，先人未踏の分野を開拓し，独自の境地を開いた。殊にアイヌ語，アイヌ文学の研究を通じて掘り進んだアイヌの研究には，語学のみ，若しくは観察一方の研究家の及びもつかぬ境地があった」という評価を与えている<sup>4</sup>。現役の佐藤知己は，「没後40年以上が経過した現在，アイヌ語学の進展とともに，いかに優れたものであっても知里の説が現在そのまま受け入れられているわけではない。知里の諸説を再検討し，修正，発展させる様々な試みがなされてきており，今後もその流れは強まるだろう。しかし，自らアイヌとして自己の言語を学問的に研究し，アイヌ語学を一般に認知させた知里の貢献は不滅のものである」と評している<sup>5</sup>。なお，北方文化研究室の研究員兼司書官だった高倉新一郎は，大著『アイヌ政策史』を1942年に出版している<sup>6</sup>。本書は，社会科学的立場から，前近代から1899年の北海道旧土人保護法制定に至るまでの各時代のアイヌ「政策」とアイヌ社会とのかかわりについて分析を加えた「アイヌ史研究の古典」<sup>7</sup>というべき業績であるが，同化主義的な立場に対する批判が今日強くなっている。

## 2 北方文化研究室の文学部への編入

1964年の国立学校設置法施行規則の一部改正により，研究部門，研

究施設が規定され、研究施設は大学の研究教育機関に所属し、文部省の承認を得なければならなくなった。そこで、北方文化研究室は、いずれかの学部の施設になる必要があったため、研究施設としては文学部に属するほかはなかったと云われている<sup>8</sup>。1950年に開設された文学部は、1966年に北方文化研究室とユーラシア文化研究室を併合して、北方文化研究施設（考古学部門）を設置した。その後、1995年の文学部の改組により、北方文化研究施設は廃止され、新たに大講座として設けられた北方文化論講座に吸収された。アイヌ研究は、基本的には文学部関係講座の個別的研究に委ねられることになった。

文学部の説明によると、北方文化研究施設は、『北方文化研究』21巻を刊行し、「研究も一応の成果を得て当初の役割も果たした」ので、その幕を閉じた<sup>9</sup>とされている。しかし、北方文化施設の当初の役割がどのようなもので、研究も一応の成果を得た、というのはどのような研究成果なのか、具体的に説明されているわけではない。

## II 北海道大学アイヌ・先住民研究センターの設立

### 1 国立大学法人化に伴う全学的・学際的研究教育の推進

国立大学法人法により、国立大学は、中期計画を作成することになった。北海道大学の最初の中期計画（2004～2009年度）は、アイヌ民族に関する研究教育に関し、次のように明記した。まず、教育に関し、「北海道に立地する国立総合大学として、アイヌ民族をはじめとする北方諸民族に関する教育を充実させる」とし、次に、研究実施体制に関し、ジェンダーに関する研究教育と並べて、「アイヌ民族をはじめとする北方諸民族に関する研究教育を総合的に推進する体制の構築を図る」という項目を入れた。常本センター長は、当時総長補佐として、中期計画の策定について中心的な役割を果たしていた。

研究センターを設立する前に、教育に関し実績をつくるという観点から、2004年度から学部の全学教育科目として「アイヌ文化をもっとよ

く知ろう」，2005年度から，大学院の共通授業科目として「先住民族研究特殊講義」を，各部局にわたる学内教員とアイヌ民族を含む学外講師によって展開することになった<sup>10</sup>。

中期計画の推進を目的として，2004年12月に総長室の一つである企画・経営室のもとに，「北方諸民族研究教育体制整備に関するワーキンググループ」（林忠行，井上勝生，池田透，佐々木亨，加藤博文，常本照樹，長谷川晃，渡邊雅彦）が設置され，センターの設置を具体化する作業を始めた。座長は，林忠行スラブ研究センター教授（後に理事・副学長），常本センター長，加藤博文センター教授，長谷川晃現理事・副学長も委員として参加した。

## 2 アイヌ・先住民研究センターの設置

北海道大学は，2007年4月にアイヌ・先住民研究センターを学内共同研究施設として設置した。設置の目的は，アイヌ・先住民研究教育を学際的に，研究科等の部局を横断する専門家の共同で行うためである。学内措置で専任教員1名（山崎幸治助教）が配置され，12名の兼務教員とともに研究センターが発足した。

研究センターの設置に当たり，大学は過去においてアイヌ研究の過程で生じた事件についての態度を表明することが不可欠であった。北海道大学は，研究センター設置に先立つ2005年12月に「先住民族と大学」と題するシンポジウムを開き，総長ステートメントを公表した。そこで，医学部の人骨問題と文学部が管理する研究室から頭骨が発見されたという，二つの事件について，「北海道大学は，民族の尊厳に対する適切な配慮を欠いていたことを真摯に反省するとともに，これらの経験を深く記憶に刻みその上で今後の進むべき方向を検討し，自らの責務を果たしてまいりたい」という態度を表明している。なお，本シンポジウムでは，加藤忠北海道ウタリ協会理事長に講演を行ってもらっている。

### 3 アイヌ・先住民研究センターの拡充とその役割の強化

2010年度に、国から特段の配慮により研究センターの拡充が実現した。学内からの配置換えも含め専任教員が合計6名になり、専門領域も歴史学（佐々木利和教授）、文化人類学（北原次郎太准教授）、言語学（丹菊逸治准教授）、考古学（加藤博文教授）、博物館学（山崎幸治准教授）、法律学（落合研一助教）にわたり、総合的なアイヌ・先住民研究が可能になる体制が整えられた。

このような研究センターの拡充がなされた理由として、北海道大学が第2次大戦前より北方文化研究室を設置して行ってきたアイヌ研究の実績があることを前提に、その上に研究センターの受け皿を用意していたことが推測される。直接には、2009年7月に内閣官房長官に提出されたアイヌ政策有識者懇談会報告書の影響である。報告書では、研究の促進について、総合的かつ実践的な研究を推進するための研究体制を構築することが必要であり、「先駆的にアイヌに関する研究等に取り組んでいる機関の機能、体制等を拡充強化し、当該研究機関が中核・司令塔になってアイヌに関する研究のネットワーク化や研究者の育成を担うこと」を記述している。アイヌを先住民族として明確に認めたこの有識者懇談会は、憲法学界の重鎮で、行政改革や司法改革で実績を有する佐藤幸治京都大学名誉教授を座長にし、それを最も強力にサポートしたのが、法制面を中心に常本照樹センター長およびアイヌ史・アイヌ文化の面を中心にして佐々木利和教授であった。

アイヌ・先住民研究センターは、その役割として、①社会への発信と教育、②学際的研究、③実践的な文化伝承等への貢献、④アイヌ政策推進への助言、という4つの項目を挙げている<sup>11</sup>。ここで注目されることは、研究センターの役割の一つに、「アイヌ政策推進への助言」を掲げていることである。当センターは、「アイヌ民族や各国の先住民族に関する研究に特化した国内唯一の研究拠点であることから」、「国において進められているアイヌ政策の総合的推進に対してセンター自身の研究

成果に基づく専門的助言をするとともに、アイヌ民族の声並びに諸外国の経験を伝える役割を担っています」と云うことを明言していることである。北海道に位置する唯一の国立総合大学としての北海道大学の役割を明確に示すものであるとともに、大学としての個性と特色が求められる国立大学の存在意義にも関わるものと云える。2009年の有識者懇談会報告書を具体化するために設けられたアイヌ政策推進会議（座長内閣官房長官）に常本センター長と佐々木教授が委員として参加しており、研究センターの多くの教員が、政府や地方自治体のアイヌ政策に関連する各種の検討会議に関与している。

## おわりに

アイヌ・先住民研究センターの今後に対する期待として、二つのことを述べたい。第1に、北海道大学に残された大きな課題である大学院教育によるアイヌ民族を含む人材の育成である。大学は、2019年に大学院文学研究科の組織を改編し、アイヌ民族の歴史や文化などを総合的に学べるコースを新設することになっている。そこでは、研究センターの教員が指導に当たることになっている。特に、アイヌ民族からアイヌ語・アイヌ文化に通暁した有為な人材が育っていくことを願っている。

第2に、2020年に開設予定の「民族共生象徴空間」では、国立アイヌ民族博物館中心に研究職員が相当数加わることになっており、現に、2017年には、博物館開業準備室に8名の研究職員が採用されている。北海道の各大学や博物館に勤務するアイヌ語・アイヌ文化研究者は、かつてない数になることが予測される。そこで、研究センターが、アイヌ政策有識者懇談会報告書において述べられているように、アイヌ語・アイヌ文化研究者のネットワークの文字通り中心になることを確信している。

- 
- <sup>1</sup> 秋月俊幸「北方文化研究室」『北海道大学百年史一部局史』（ぎょうせい・1982年）1380～1384頁，高倉新一郎「北方文化研究室顛末」『北海道大学百年史—通説』（ぎょうせい・1980年）962～975頁参照。
- <sup>2</sup> 小坂博宣「北海道大学時代の知里真志保」北海道大学北方研究教育センター編『知里真志保 人と学問』（北海道大学出版会・2010年）133頁。
- <sup>3</sup> 藤本英夫『知里真志保の生涯』（新潮社・1982年）214頁。また，湊は，湊正雄『アイヌ民族誌と知里真志保さんの思い出』（築地書館・1982年）を出版している。
- <sup>4</sup> 高倉・前掲論文（注1）974頁。
- <sup>5</sup> 佐藤知己「北海道大学におけるアイヌ語研究の過去・現在・未来」『2005年北海道大学シンポジウム 先住民族と大学報告集』（2006年）24頁。
- <sup>6</sup> 高倉新一郎『アイヌ政策史』（日本評論社・1942年）。
- <sup>7</sup> 榎森進『アイヌの歴史』（三省堂・1987年）238頁。
- <sup>8</sup> 高倉・前掲論文（注1）966頁。
- <sup>9</sup> 『北海道大学百二十五史 通説編』（北海道大学・2003年）362頁。
- <sup>10</sup> なお，アイヌ民族に関する全学的な授業を行うに当たって，幹事役について，文学部長から佐々木亨現文学研究科教授を推薦してもらい助力を受け，筆者も一講担当した。
- <sup>11</sup> <http://cais.hokudai.ac.jp/aboutcenter>



# 言語学（言語アーカイヴ・プロジェクト報告）

北原 次郎太・モコットウナシ

丹菊 逸治

当センターの言語に関わるプロジェクトとしては、これまでに文学部の佐藤知己教授による『アイヌ語データベースプロジェクト』（2007年～2011年度）が実施され、2012年度からは『言語アーカイヴプロジェクト』と名称を変えて取り組みを進めている。

アイヌ語のように話者が減少している言語の復興においては、当該言語に関する情報の需要が高まり、過去に作成された記録を整理し、利用環境を整えることが大きな意味を持つ。当センターでも、言語に関する研究・教育の基盤となるこうした資料の整備、他の先住民が言語を教える際に取り入れている手法などを学びながら効率的な発信の方法、データベースや教授法の開発などを含め、関連の取り組みを進めている。

当プロジェクトは実質的に複数の小さな研究プロジェクトの集合体であるため、本稿は、北原次郎太・モコットウナシ、丹菊逸治それぞれの担当したワーキングについて報告する。

## 北原次郎太・モコットウナシ担当ワーキング

### 1. アイヌ語資料の整理・和訳

#### 1. 1. 知里真志保遺稿ノート

アイヌ語の資料の整理・公開に取り組み、大きく二つに分けて文字資料と音声資料の整理・公開を行ってきた。一つは、北海道大学文学部でアイヌ語を研究した知里真志保（1909～1961）が残した遺稿やノート類である。これらは現在北海道文学館が所蔵しており、234冊の調査

ノート類が残されている。

これについては、北海道立図書館が作成した目録がある。ただ、ノートの内容は語彙調査から民族誌的な物まで多岐にわたるのに対し、道立図書館リストでは各ノートの内容についてあまり詳細に書かれていない。また、道立図書館リストには260冊が記載されているが、文学館に収蔵されたノートはこれより26冊少ない。これらの所在は不明であるが、文学館に収蔵される前の段階で選別がされたものと思われる。

そもそも「知里ノート」は知里が没した時点で研究室にあったものの総称で、自ら書いたもののほか、伯母にあたる金成マツによって書かれたもの、知里と研究上の協力関係にあった和田文治郎や佐々木弘太郎といった、他の研究者から提供を受けていたものなど様々な資料が含まれている。例えば佐々木弘太郎著『樺太アイヌ語地名辞典』に掲載された佐々木の短文には、戦前に樺太で行った調査内容を記したノートを知里に送ったことが書かれている。

道立図書館リストは、知里が没した時点で、研究室に置かれていた状態のまま、順に整理番号を付して作成したもので、このため内容的には連続性・関連性を持つノートが番号の上では大きく隔たっていることがしばしばである。

ということで、これらノートの利用には、まず執筆者・作成者ごとに資料群を分け、さらにそれぞれを内容や関連の有無によって整理する必要がある。これまでにも何度か整理の試みはあったが、改めて全体の細目録を作る作業を二年かけて行った。この作業は4名の短期支援員とともにいき、北海道立アイヌ民族文化研究センターの研究紀要第18号に「北海道文学館所蔵「知里真志保遺稿ノート」の細目次」として発表した。

## 1. 2. 和田文治郎・和田完資料

もう1つは、和田文治郎と和田完親子が収集したアイヌ語資料であ

る。先述のとおり和田文治郎は知里とも親交のあった医師で、戦前に樺太で、戦後には北海道で調査をしていた。和田の研究は、樺太アイヌ語による説話や、アイヌ文化における病因論とアイヌ語での病名の関係などである。戦前に得られた記録の多くは敗戦時の混乱により樺太に置いてくることとなった。このため、現在アクセス可能なのは、主として戦後に筆録されたものである。清書したノート類は上記知里ノートに含まれており、ほかに清書まえのメモや草稿類が和田家に保管されてきた。こうした文学資料の多くはアイヌ語の原文のみが書かれた状態で残されていたので、これを活字化・和訳した。これまでに『和田文治郎筆録樺太アイヌ説話集』1～3、医療関係の語彙や表現、出産・育児にまつわる慣行、通過儀礼などについての聞き取りが豊富にまとめられたノートをもとに『和田文治郎 樺太アイヌ言語・文化誌 出産・育児・通過儀礼』をまとめ、報告書として公開している。

和田完は、北海道大学の大学院在籍中から樺太アイヌ、ウイльта、ニヅフの宗教文化に関心を持ち、聞き書き調査も行いながら、シャマニズムに関連する論考を発表してきた。その過程で収集した偶像類や録音資料（オープンリールにして10本）が残され、アイヌ語樺太方言、北海道方言、ウイльта語が収録されている。これら和田家に保管されていた草稿、民具、音声資料はご遺族の厚意によって現在は当センターの所蔵となり、活字化、デジタル化、和訳などを今進めている。

### 1. 3. 平取町アイヌ語音声アーカイブ作成への協力

このほか、外部機関との協力による音声資料の整理・公開作業をいくつか行っている。1つは2014年度から平取町が、文化庁の委託を受けて行っているアイヌ語音声資料の整理・公開である。

これは、昭和30年代以降、平取町教育委員会が萱野茂ほかに委託して録音した口承文芸などの記録で、複数の語り手による実演および解説が収録されている。これらを平取町、白老町のアイヌ語教育関係者、千

葉大学、札幌大学の共同によって活字化、和訳、註記し、原音声とともにオンラインで公開する作業が進められている。この事業は2018年度も継続しており、これまでの成果が報告書および平取町アイヌ文化資料館のホームページで公開されている。

#### 1. 4. NHK札幌放送局録音資料の整理・公開

2016年には、NHK札幌放送局が1947年から51年にかけて北海道各地で録音したアイヌ語の物語・歌謡の録音資料を和訳する作業に参加した。この録音事業は知里真志保の同行・慣習のもとに行われたもので、収録内容は知里の研究においてもしばしば言及・引用されている貴重な物である。

太田満氏、大野徹人氏、関根健司氏、高橋靖以氏らとともに活字化、和訳を分担した。また同放送局がこの録音事業の経緯を主題にして作成したドキュメンタリー番組「よみがえるアイヌの言霊 100枚のレコード」についても監修・解説を行った。同番組では収録の経緯を中心としてアイヌ民族の近現代史を手短に紹介しつつ、upopo（座り歌）、ihunke（子守歌）、tapkar sinotca（踏舞歌）、yukar（英雄詞曲）、yaykurekarpa（会見の辞）、caranke（談判の辞）などの音声为全国に放映された。特に、carankeの音声を収録した資料は管見の限り類例がなく、貴重な資料である。また、単なる言語文化の資料としてではなく、収録に協力した語り手たちの境遇や、語りから読み取れる心情、遺族の証言とともに紹介されたことは意義深かった。同番組は月間ギャラクシー賞を受賞するなど高い評価を受けたものの、放映によって紹介できたのは膨大な録音のごく一部である。幸い、NHKからは他の資料の公開についても同意が得られているので、今後順次公開していく予定である。

## 2. 教材・教授法開発

### 2. 1. アイヌ語方言別教科書

2010年度から2013年度にかけて、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（以下、アイヌ文化財団とする。なお2018年にアイヌ民族文化財団に改称）による方言別・難易度別の教科書作成に協力した。これは、九つの方言（2010年度：千歳，幌別，美幌，2011～2012年度：静内，十勝，釧路・白糠，2013年度：樺太，沙流，石狩）についてそれぞれ三つ（入門，初級，中級）の段階の難易度に分けて教科書を作成したもので，その企画・編集・執筆という形で協力した。本事業にはそれぞれの方言を研究するアイヌおよび和人の研究者（太田満氏，大野徹人氏，楠本克子氏，志賀雪湖氏，高橋靖以氏，田村雅史氏，八谷麻衣氏）が参加し，本文執筆のほか方言の区分や選定，名称設定，表記，編集方針などを協議した。また，音声資料（例文の朗読・歌唱等）担当として多くのアーティスト・アイヌ語学習者（太田奈々氏，小笠原小夜氏，加納ルミ子氏，川上さやか氏，川村このみ氏，川村久恵氏，木村君由美氏，杉村フサ氏，竹内隼人氏，豊川容子氏，中井貴規氏，八谷麻衣氏，村上恵氏，山道ヒビキ氏，山道陽輪氏，山本りえ氏）の協力を得た。イラストは小笠原小夜氏，椎名庵氏が担当した。

初年度は事務局（当時）の高橋規氏，高橋靖以氏と太田満氏，私で協議し，掲載項目の決定と例文執筆を行なった。入門は文法解説を最少にし，フレーズを覚えることを中心に構成した。挿し絵をはさむこと，クイズやコラムなどを入れ，文化的な解説もそえることとした。また，札幌大学の本田優子氏の実践を参考にし副教材を添えることになった。初年度は名詞・自動詞カルタ，すごろく，数カードを作成し，カルタは，翌年度以降もすべて静内方言で製作した。カルタは，各地の教室で一定の利用度があるが，テーブルの上で使うには札が大きい，あるいは部屋の床全体に広げて遊ぶには小さいなど，使い方に応じて異なるニーズがある。

2012年度以降は、例文を原則として話者による発話例から引用することとし、作例を使用する場合は記号を付して明示することとした。樺太方言版を執筆する際には上述の和田家資料に含まれる例文などを活用できた。

この教材は、アイヌ語教室等、関係者の要望を受けて作成された物だった。関係者からの要望は、各方言で共通の内容（文法項目）と進度の教材を作成し、他方言を学んでいる学習者とのコミュニケーション、情報共有を円滑にしたい、またDVD、電子辞書など音声・視聴覚教材を充実させてほしいというものだった。ところが事業開始当初、アイヌ文化財団では、音声資料の作成やオンラインでの配信を見込んでいなかった。このため、CD添付や・オンライン配信のための予算はその後ろ措置されず、配信が完了していない。教科書が作られているという事実もあまり周知されておらず、こうした情報発信や利用者のニーズに合わせた改善が課題である。

## 2. 2. 口承文芸視聴覚資料『アイヌのおはなしアニメ オルシペ スウォフ』作成

2013年度から2017年度まで、上記事業に企画編集委員として協力した。アイヌ語による口承文芸は、アイヌ語そのもの、かつての生活文化や世界観を学ぶ上で重要な素材である。これを活字化・和訳することと、視覚的な情報を補うことによって口承文芸の世界をより理解しやすくすることを目的として制作された。6か年で計22作品が作られ、DVDとして図書館等に配布され、またオンラインでも配信されている。字幕や主・副音声の切替ができるDVDの利点を生かし、アイヌ語・日本語それぞれの字幕と音声、またカナ表記とローマ字表記が自在に組み合わせられる形にした。

題材の選定にあたっては、地域を特定せず、様々な文学ジャンルからバランスよく紹介することに留意した。6か年のうちに、地域としては

樺太西海岸・東海岸、旭川、美幌、白糠、芽室、帯広、静内、新冠、平取、門別、白老、登別、虻田の伝承を、ジャンルとしては英雄詞曲、神謡、散文説話、子守歌、叙情歌、踏舞歌をとりあげた。語りの実演は、学習者を中心に依頼した。これは学習者が学習の成果を生かす機会を創出することと、実演が新たな演目を習得する機会ともなると考えたためである。

アイヌ文化財団では毎年1回アイヌ語弁論大会を開催している。同大会には口承文芸を演じる部門があり、出場者は自由に演目を選択することができる。過年度の発表演目を見ると、新たな資料が公開されて1～2年ほど経過すると、その資料中から演目を選ばれる傾向がある。つまり、発表演目が資料の利用度をはかる1つの目安になると考えられる。『オルシペ スウォプ』収録の演目は、特に子供の部など、若年層での取り入れが顕著である。1例をあげれば、2017年度大会の子供の部では、出場者13名中、5名が『オルシペ スウォプ』収録の演目を演じていた。若年層の利用が多い要因としては、DVDやネット配信といった、配布の形態とも関わりがあるかもしれない。

なお、この事業は2017年度で終了し、2018年度以降は多言語化を予定している。アイヌ語から日本語への翻訳により、ニュアンスが変わる所もあり、日本語を更に多言語に翻訳することでより意義が変わらないよう留意する必要がある。また、文化的なギャップが大きい視聴者にも誤解を生まないように、解説なども補筆することが望ましい。

### 3. 教育・普及

#### 3. 1. 担い手育成事業

その他教育関連の取り組みとしては、一般財団法人アイヌ民族博物館で行われている担い手（伝承者）育成事業の講師として出講し、アイヌ語と口承文芸、儀礼と祈り詞について研修を行っている。アイヌ語については当センター博士研究員（2017年度9月まで）の中井貴規氏とも

連携し、上述のカルタをはじめゲーム形式で基礎的な単語や表現を学ぶ手法を開発している。

担い手育成事業は、札幌大学のウレシパクラブと並び、熱意のある若いアイヌが集う機会となっており、今後の言語復興や普及を中心的に担っていく人材を育成する場である。

### 3. 2. 危機言語・方言サミット

2015年度から、文化庁国語課が主催する「危機的な状況にある言語・方言サミット」に出席し、アイヌ語教育についての現状を報告し、他の地域で取り組みを進める当事者と情報共有をしている。また、同サミットで行われる8言語の聞き比べ（同じ文を8つの言語に翻訳して話者・研究者が発表するもの）における発表内容の検討、「サミットにおける宣言のアイヌ語訳」などでも協力している。

### 3. 3. アイヌ語ラジオ講座

アイヌ文化財団が開講するSTVアイヌ語ラジオ講座のうち、2015年度に支援研究者として協力した。講師である関根健司氏（平取町）と連携し、例文検討やアイヌ語ラジオ体操作成などで協力した。

### 3. 4. 北海道新聞の取り組み

#### 3. 4. 1. 紙面でのアイヌ語・文化紹介

2011年4月から2018年3月、北海道新聞釧路版のアイヌ文化紹介ページ「ピヤラ」上に、口承文芸の紹介記事を連載した。また、2016年3月から同社が発行する子供向けの新聞『まなぶん』紙上にもアイヌ民族についての連載をし、アイヌ語の表現や地名を紹介する記事を執筆、音声や動画配信を行なっている。

### 3. 4. 2. アイヌ語表記導入

2016年秋から、北海道新聞がアイヌ語の小文字表記（近年のアイヌ語教育で採用している表記法の1つ）を紙面に導入した。これは、報道機関がアイヌ語を尊重する姿勢を示すものであり、アイヌ語教育・学習の間接的な支援ともなる取り組みとして画期的なものである。アイヌ語表記の導入・使用に当たり、社内向けの資料、読者に向けた解説執筆と普及のための解説動画作成、読者向けアイヌ語講座などに協力した。

### 3. 5. 公共空間へのアイヌ語導入

危機言語の復興に共通する重要な課題の1つは、当該言語を使用する場が乏しい事である。特にアイヌ民族の様に、マジョリティと混住している場合は、日常のあらゆる場面でマジョリティ言語を使用して生活することになる。こうした状況を改善するため、公共空間においてマジョリティ言語とマイノリティ言語を併用し、マイノリティ言語の認知度と威信を高めることが有効である。

琉球語などの先行的な実践を参考に、アイヌ語を公共空間で使用するための取り組みを進めている。その1例が、アイヌ民族文化財団が例年実施する工芸品展におけるアイヌ語の導入である。アイヌ語の資料名を整備することはもとより、来場者へのあいさつ文などをアイヌ語で作成し、掲出している。2020年開館の国立アイヌ民族博物館では、解説文もアイヌ語化することが決定しており、2017年からその準備を進めている。

また、公共交通機関でのアイヌ語アナウンス導入に向けても取り組んでいる。2017年からアナウンスの作成と実施について検討を開始し、先行して道南バス株式会社が導入する運びとなった（2018年4月から、平取町内区間で実施）。実施に当たっては、実施企業と内閣官房アイヌ総合施策室、平取町や関根真紀氏らと連携し、アナウンス本文の翻訳や、利用者の理解・習得を助けるリーフレット作成、アナウンス音声

の収録に同席し発音指導などを行なった。

### 3. 6. 音楽を導入したアイヌ語学習

当センターを会場に「楽しく優しいトンコリ練習会」を開催し、札幌近郊在住の樺太アイヌを中心とした少人数の参加者で練習会を行っている。トンコリという弦楽器と、付随する歌謡の習得について強い要望があり、これに応じる形で開始した。

危機言語の習得において、地域の伝統歌謡が重要であることは、国立国語研究所の木部暢子氏（奄美語研究）も指摘するところであり、音楽を通じてアイヌ語に親しむ場として開催している。また、童謡、ポップス、ロック、演歌など、多くの人が親しんでいる曲目をアイヌ語に翻訳する取り組みも広く行われており、この一環として琉球民謡・奄美民謡のアイヌ語訳と教材化を試みている。

2017年12月に、釧路アイヌ協会の依頼を受け、児童向けの教材と授業案を紹介するワークショップを開催した。上述のカルタと、これを応用した遊び、アイヌ語訳した童謡その他を紹介した。

その他、札幌市内の小中学校を中心に訪問授業を行っている。北九条小学校という北大のすぐ近くにある小学校、東苗穂小学校、北海道教育大学札幌校附属中学校などで訪問授業をし、音楽を取り入れた言葉の学習を試行している。

北海道、特に札幌市ではアイヌ文化学習が比較的盛んだが、言葉以外の文化的な事項、たとえば衣装を見る・試着する、楽器を触るといった文化体験が中心になりがちである。これは、学校教員がそのようなスキルを身に付ける機会が用意されていないことが大きな要因となっている。しかし、札幌市に多様な言語があることの理解は、多文化的な状況、そしてその多文化を生きている人々が共生する必要性を理解することにつながり、非アイヌ子弟にとっても重要な学習項目である。今後は、教育委員会、学校現場の教員とも連携を深め、使いやすい教材の開発を行っ

ていく。

(北原 次郎太・モコットウナシ)

## 丹菊逸治担当ワーキング

「アイヌ語データベース・プロジェクト」(2007～2011年)および「アイヌ・先住民族言語アーカイヴ・プロジェクト」(2012年～)は言語に関係するさまざまな学術的研究を目的としたプロジェクトであるが、丹菊担当ワーキングの研究成果の社会還元にあたっては、日本におけるネット利用普及率の低さを鑑み、講演・紙媒体の資料刊行を中心としている。

### 1. 言語復興に関する研究

アイヌ民族と社会構造がよく似たサーミ民族、北西海岸先住民族における言語復興の事例調査、また社会構造の違いが大きい言語復興で大きな成果を上げているマオリ民族の事例に関する調査・研究を行ってきた。

#### 1. 1. サーミ語復興の事例に学ぶ

2012年度、ヘルシンキ大学からサーミ文化・サーミ語復興にかんする専門家Maria-Liisa Olthuis氏、Annika Pasanen氏、Seurujärvi-Kari氏を招いての研究会、白老アイヌ民族博物館においてアイヌ民族関係者を対象としたワークショップを行った。「近代化の過程で個人、民族、社会が傷つき、それに対する癒しという概念なしに言語復興はできない」というサーミ言語復興からの教訓は重要である。また、言語復興において極めて有効な手段である「言語のゆりかご」(Language Nest)に関する具体的な情報が得られた。それによりアイヌ語に応用するまで

には、それなりの準備期間が必要であることが判明した。なお、2014年度にはヘルシンキ大学地域言語研究プロジェクト（HALS）ワークショップ「島嶼地域：サハリン・北海道の先住民とその言語」にて丹菊がゲスト回「サハリンアイヌの言語・文化的アイデンティティ」を担当した。

## 1. 2. マオリ語復興の事例に学ぶ

マオリ語復興の強力な手段の1つである、テアタアランギ（Te ata arangi）式学習法に関する調査を行った。2013年度、二風谷の「アイヌイタッ復興の会」がテアタアランギ協会から講師を招いて開催したワークショップおよび交流活動に参加し、同学習法のアイヌ語への導入について協力した。同学習法は数人規模での学習会に適している。アイヌをはじめとする北方諸民族社会においては、そのための条件をそろえることが困難であり、二風谷以外の地域への導入には準備が必要だろうと考えられる。

## 1. 3. カナダ先住諸民族の言語復興事例に学ぶ

2016年度よりブリティッシュ・コロンビア大学先住民族言語学コースとの研究交流を中心として、北西海岸先住民族の言語復興事例について情報収集を行った。2016年度はコロンビア大学の講義を見学する一方、丹菊がアイヌ語の現状に関するゲスト講義を行った。北西海岸先住民族の言語復興、特に「1対1法」（On to one, Master & Apprentice）やイマージョンに関する情報収集を行った。それにより、現状ではさまざまな方式が混在しており、個人ごとに多様なやり方を組み合わせていること、先住民族と研究者の協力関係は、基本的にコミュニティ（日本の市町村よりさらに小規模）との関係を軸とした小規模な関係を束ねた構造になっていることなどが分かった。具体的な言語復興の方法論として「1対1法」および「言語のゆりかご」（Language nest）が効果を

あげており、イマージョン学校も試みられはじめている。ただし、イマージョン学校についてはまだ試験的な例が多いようである。

#### 1. 4. アイヌ語の言語復興に関する再検討

以上のような先進諸外国の例に照らし合わせ、アイヌ語の継承・復興運動について再検討を行っている。アイヌ文化財団（現・アイヌ民族文化財団）による「語学コース」方式のアイヌ語講座が効果をあげられずにいる一方で、実際には旭川・二風谷などではアイヌ民族自身によって1対1法に類似した方法が実践され効果をあげてきたことなどが判明している。これらは海外の例とも符合する。

ICLDC（言語の記述と継承のための国際カンファレンス。隔年開催）などの諸報告をみる限り、研究者が主導する言語復興には失敗例が多く、現在では基本的にコミュニティ主導型が主流となっている。コミュニティ主導型の事業で重要となるのは、真の需要を把握することである。コミュニティからの需要がない場合には「言語復興をしない」という可能性もある。真の需要をつかまえ損ね、研究者側の利害や思い込みによって机上の空論による計画を立てても決してうまくいかない。例えばアイヌ語の「標準語」構想は研究者が需要を無視して夢想した典型的な失敗である。北方諸言語である程度成功した言語復興においては、特定の方言を標準語として採用する、あるいは人工的な標準語を作成する、などのやり方はほとんど行われておらず、原則として自分に関係する（自分が属するコミュニティの）方言を習得している。アイヌ社会において現在まで継続してきたアイヌ語の継承の仕組みも同様であり、アイヌ語継承の支援を行う際にもその原則を崩してしまうと、結局はうまくいかない。アイヌ語も他の文化要素と共通する「個人的なつながりによって教わり、教わったことを守る」というルール（プリ）にしたがっている（だからこそ1対1法が有効なのだと考えられる）。

先住民族支援は、いわゆる開発支援と同様の構造を有している。開発

学者チェンバースが唱えた「最後の列を最優先に」という原則は先住民族支援においても有効である。例えば「言語学者が添削する」という主客が転倒した異常事態も世界各地の現場で批判されている。「偉い人たち」はアイヌ語を勉強させようとする。だが一人一人の先住民族は必ずしも辛い勉強をしたいわけではない。どのように言語と付き合うかは本人が決めることである。言語の所有権はそもそも先住民族一人一人にある。言語学者にできるのは本人の希望に沿った支援にすぎない。世界各地の言語復興の現場では、先住民族コミュニティや個人が中心となって運動自体が再構築されつつある。アイヌ語も例外ではない。

## 1. 5. アイヌ語アイヌ文化振興事業への協力

さまざまな地域でのアイヌ語・アイヌ文化継承・復興運動に協力するとともに、アイヌ文化財団（現・アイヌ民族文化財団）のアイヌ語・アイヌ文化振興関連事業への協力を行ってきた。アイヌ語教材開発事業の一環として、丹菊逸治がアイヌ語アニメーション『オルシペスウォプ 1・2』に監修として協力、それによりアイヌ叙事詩『ユカラ』を題材とした世界初のアイヌ語による本格アニメーション「ポイヤウンペとルロアイカムイの戦い」（2013）および「ニタイパカイエ」（2014）が実現された。また、アイヌ語を理解しない子供たちを対象とした、作家の寮美千子氏によるアイヌ口承文芸の再話『アイヌ民話撰：イソイタッ』シリーズ（第2～5巻）の編集委員として協力している（2014～2017年度）。

## 2. アイヌ語・先住民族言語研究

アイヌ語および先住民族諸言語（特にサハリン先住民族諸言語）および先住民族文学に関する研究を行ってきた。

## 2. 1. アイヌ語樺太方言研究

1960年代に村崎恭子氏によって採録されたアイヌ語樺太方言資料の整理・刊行を継続している。報告書として村崎恭子『アイヌ語樺太方言例文集1・2』が刊行されている。また、研究成果の一部は国立国語研究所の研究会などでの報告となっている。

## 2. 2. アイヌ語十勝方言研究

アイヌ語十勝方言の文法記述・例文集の刊行を継続している。高橋靖以（2014～2016年度博士研究員、現客員研究員）が整理・執筆を担当。高橋靖以『アイヌ語十勝方言例文集1』（2014）、『アイヌ語十勝方言文法概説』（2018）が刊行されている。

## 2. 3. アイヌ語調査

2014年度以降、高橋靖以研究員が浦河・平取でアイヌ語の調査を継続している。調査にあたっては、語彙・文法など狭義の言語調査だけでなく、民族学的な調査や伝統的価値観や個人史に関する聞き取りもできるだけ行っている。

## 2. 4. アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究

2007年から継続中の長期的研究。アイヌ語資料のデータベースにどのような情報を盛り込むべきか、また、アイヌ語の実際のデータを処理する場合、現実的にどのような問題が存在するのかを明らかにして、今後の研究の方向性を示そうという研究である。報告書として2011年度以降、佐藤知己『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』（1～7）が刊行されている。

## 2. 5. アイヌ語研究の新しい流れ

アイヌ語の記述言語学においては、従来でもアイヌ民族の現地コミュ

ニティとの協力関係が不可欠だった。現在の先住民族言語調査においては、先住民族コミュニティ出身者に調査・研究法を身につけてもらい、それによって言語記述と言語継承の接続が試みられるようになっている。だがその結果、専門的な言語学者が現場を離れがちとなり、先住民族コミュニティとの乖離が問題となってきている。理論研究においても、コミュニティとの協同が重要なのである。

## 2. 6. ニヴフ語研究

ニヴフ民族はロシア連邦アムール河口地域（ハバロフスク州）およびサハリン北部（サハリン州）の先住民族だが、旧日本領樺太の先住民族でもある。旧日本領南樺太のニヴフ民族コミュニティは第二次世界大戦後北海道以南に移住しているので、日本国内に在住する先住民族ということになる。現在、日本国内では目立った活動はみられないが、ニヴフ民族全体では言語・文化の継承の動きが続いている。報告書「ニヴフ言語文化資料集」シリーズとして丹菊・パクリナ編『タチヤナ・ウリタ伝承集』（日本語版2014、ロシア語版2017）、および丹菊編『ナジェジダ・タンジナ伝承集』（2017）、丹菊編『ニヴフ語サハリン方言語彙集』（2014）が刊行されている。また、その他外部の研究者との共同研究を行っている。

## 2. 7. アイヌ文学研究

アイヌ文学について、言語学の枠にとどまらない文学的な研究を行っている。2016年度には丹菊研究室が日本口承文芸学会第40回研究大会を当番大学として開催し、特集としてアイヌの叙事詩に関するシンポジウムを企画・開催。叙事詩の内容に関する研究成果の一部は『ひろがる北方研究の地平線 中川裕還暦記念論文集』（サッポロ堂 2017）に丹菊逸治「成長物語・恋愛物語としての『クトゥネシリカ』」として掲載された。また、叙事詩の形式に関する研究成果の一部は2018年にラ

グーザ（イタリア）で開催された国際口承文芸学会（ISFNR）第17回大会で丹菊が"When did they cross the Tatar channel"として報告した。アイヌ文化財団による前記事業（アニメーション、再話本の監修）においても研究成果が反映されている。アニメーション事業の監修については2015年度にハワイ大学で開催された「言語の保存と記述に関する第4回国際カンファレンス」（ICLDC4）において丹菊が" FRPAC Project of making animation short flms in Ainu language"としてパネル報告し、2014年度には事業のあらましをユジノサハリンスクで開催された国際カンファレンス「極東先住少数民族の言語による第1回国際シンポジウム」において丹菊がニヴフ語・アイヌ語・ロシア語で報告した。

### 3. 音楽・歌謡研究

当プロジェクトでは、アイヌ・先住民族の伝統音楽（器楽）および伝統歌謡の研究も行っている。

#### 3. 1. トンコリ研究

2012年度より樺太アイヌの楽器トンコリに関する総合的な研究を行ってきた。伝承者から直接教授を受けた富田友子氏による報告書『トンコリ楽曲集』を刊行している。また、当センター・ブックレット『トンコリの世界』も富田氏の執筆によるものである。楽器としてのトンコリの研究（丹菊逸治・篠原智花による共同研究）も行っており、それによりトンコリがユーラシア古楽器の系統であることがほぼ確実となった。研究成果の一部は2016年にロシア連邦アディゲ共和国アディゲ国立大学で開催された研究会で発表し、アディゲ国内では新聞やテレビに取り上げられるなど大いに話題になった。また2017年にサラエヴォで開催された国際伝統音楽協会（ICTM）民族楽器研究会（Study Group on Folk Musical Instruments）第21回研究大会で丹菊逸治・篠原智花が報告し、その内容は同研究会紀要『Studia instrumentorum musicae

popularis V』にTangiku& Shinohara "Tonkori and Shichepshin"として掲載されている。なおトンコリ研究に限らず、樺太関連の研究は必要に応じて樺太アイヌ協会や樺太アイヌ語の会などとも連絡を取って進めている。

### 3. 2. アイヌ伝統歌謡研究

2017年度よりアイヌ伝統歌謡に関する総合的な研究を行っている。伝承の場、伝統歌謡の形式に関する基礎的な研究であり、数年の基礎研究の後に応用として教育メソッド開発に取りかかることを目指している。研究成果の一部を含む報告書として丹菊逸治『アイヌ叙事詩鑑賞』（2018年刊行予定）が刊行される予定。

### 3. 3. ニヴフ伝統音楽研究

2011年よりニヴフ伝統音楽に関する総合的な研究を継続している。ニヴフ民族の伝統音楽グループの活動、個々人が伝承する歌謡などについての基礎的な研究を行っている。

## 4. デジタル・アーカイブ研究

インターネット経由で利用する電子アーカイブに関する研究。北方諸民族社会に適した電子アーカイブの仕組みを提案することを目的としている。現在文化庁国語課が推進しているアイヌ語アーカイブ事業では、当研究の成果が採用されている。当センターでも同じ方式による電子アーカイブの試験運用中（ただし現在は一般対象には非公開）。

## 5. 「民族の記憶と現在」研究

2012年のプロジェクト名称変更にともない、研究内容も拡充している。狭義の言語資料にとどまらず、アイヌ・先住民族のさまざまな口頭伝承、書記文学、音楽・映像資料、あるいはさまざまな伝統文化の技術

などを「民族の記憶」としてとらえ、それらが現在の先住民族のあり方とどう関わるかを考える研究をしている。

#### 5. 1. 文化伝承と支援事業に関する研究

現在のアイヌ民族、および世界各地の先住民族の文化伝承とその支援事業や近代化の可能性に関する研究。研究成果の一部は2013年にビリニウス（リトアニア）で開催された国際口承文芸学会（ISFNR）第16回大会において丹菊が" Transformation from Individual Art to National Art in Ainu and Nivkh"として報告した。また当センターの月例公開講座「アイヌを学ぶ」のうち丹菊が担当した第8回「アイヌ民族の伝統的知財管理」においても研究成果の一部を報告した。

#### 5. 2. 脱植民地化に関する研究

アイヌ民族および世界各地の先住民族の脱植民地化研究。北海道を入植植民地として、アイヌ民族を入植植民地における先住民族としてとらえなおし、そこから従来のさまざまな研究領域を見直す研究である。

「脱植民地化」の対象は歴史研究のみならず、言語研究や文化研究などあらゆる研究分野におよぶ。研究成果の一部は2017年度言語アーカイヴ・シンポジウム『先住民族アイヌと入植植民地北海道①』において丹菊が「アイヌ民族の伝統的歴史観と入植植民地北海道」として報告した。

#### 5. 3. アイヌ民族自身の言葉による歴史研究の可能性

アイヌ民族は自らの家系、自らの地域、そして民族全体に関する歴史を把握している。近世・近代の北海道／ヤウンモシリで何が起こったのか、ということについては、先住民族であるアイヌ民族自身の認識・語りと、入植者（移民）である和人主体による行政の間に大きな隔たりがある。近代化・和人移民の大量入植開始から150年たつ節目の年を迎え

ても、歴史を巡る和解にはいたっていない。この隔たりを埋めるための第一歩はアイヌ民族自身の語りが歴史として復権することである。近代になってからのアイヌ民族自身の語りの資料は膨大であり、アイヌ民族自身の筆録資料にもかなりの蓄積がある。それらにもとづき、シンポジウム『先住民族アイヌと入植植民地北海道①』において、アイヌ民族自身の歴史観による歴史が語られてきたこと、そこから現在の語りへとつながっている連続性の一端が示せた。和人研究者による歴史学にも隔たりを埋める研究が行われている。瀧澤正氏の研究は初期の土地分配において、法に定められた土地分配が実際には行われなかったことを示した。加藤好男氏の研究は札幌市がまさにアイヌコタンとそのイウォルの真上に建設されたことを改めて示した。今後、これらの歴史研究の成果やアイヌ民族自身の語りなどを軸として、日本史学とは別の、先住民族研究の一分野としてのアイヌ史研究が構築されることになるだろう。

#### 5. 4. アイヌ伝統法の研究

これまで蓄積されてきた膨大な口承資料、聞き取り調査資料、現在のアイヌ民族社会で得られた証言、観察結果により、アイヌ民族の伝統的な社会制度や伝統法についても研究の端緒がつかめた。アイヌ民族の伝統的な法制度（イレнка／プリ）は現在まで変容しつつ継承されており、それは日本の法体系とは異なる。例えば、個人と集団の所有権の尊重はirankaイレнка（従来は「掟」などと訳されてきた）という概念に含まれるが、その解決方法はpuriプリ（従来は「風習」などと訳されてきた）という概念による。両者は適用される範囲や対象が異なる。これらは伝統的な世界観とも関連しており、靈魂の不滅はイレнкаであるが、それをどのように子孫が保証するかはプリによる。知的財産の管理もプリによる。靈魂の不滅を巡る世界観についても、おりにふれある程度は紹介できたが、知的財産（文様や口承文芸など）の伝統的管理方法については簡単な報告もできた。

この十年の結果を見る限り、アイヌ民族の伝統法にアクセスできる学問分野は法学や歴史学ではなく、むしろ文化人類学であろう。アイヌ民族と和人の間では2つの法体系の衝突が起きているが、その解決のために必要なのは「国内のマイノリティ問題」という捉え方よりもむしろ「異民族間の外交」という捉え方だからである。今後、アイヌ民族の伝統的法制度の研究は先住民族研究の一分野として構築されることになるだろう。

## 5. 5. アイヌ民族自身の考古遺跡の認識の研究

1970年代以降の遺跡調査への反応などから、アイヌ民族自身が縄文遺跡を遠い先祖の遺跡として認識していることは明らかであった。そしてその認識は、黒曜石・土器に関する語彙が現代まで残されていることなど、いくつかの根拠にもとづいている。そしてその認識にもとづいて、アイヌ民族の伝統的な歴史観においても縄文時代の位置づけがなされている。その基本的な枠組みについては『先住民族アイヌと入植植民地北海道①』において示した。今後は先住民族研究において、遺跡についてのアイヌ民族自身の考え方がさらに明確になっていくと思われる。

(丹菊 逸治)

## 文献および関連サイト

- 瀧澤正 (2011) 「明治初期開拓使の土地改革とアイヌの土地：おもに北海道地所規則第七条をめぐる」『北大史学』 (51), 1-28, 2011-12-20 北大史学会
- 加藤好男 (2017) 『19 世紀後半のサッポロ・イシカリのアイヌ民族』サッポロ堂書店
- 谷本晃久 (2018) 「近代初頭における札幌本府膝下のアイヌ集落をめぐる：「琴似又市所有地」の地理的布置再考」北方人文研究11: 95-109
- アイヌ民族文化財団 <https://www.frpac.or.jp/>
- International Conference on Language Documentation & Conservation (ICLDC, 言語の記述と継承のための国際カンファレンス) <http://www.icldc-hawaii.org/>



# 歴史学（古文書プロジェクト報告）

谷本 晃久  
佐々木 利和

## はじめに

北海道大学アイヌ・先住民研究センターには「古文書プロジェクト」という研究プロジェクトがあって、現在、佐々木・谷本ならびに蓑島栄紀・北原次郎太が構成員となって研究を進めている。また、ワシーリー・シェプキン（ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所上席研究員）が当センター客員研究員としてこのプロジェクトに参加し、国際共同研究の一翼を担っている。

古文書プロジェクトの実質的なスタートは2010年度であるから、2017年度で8年度目ということになる。この間、複数の共同研究を実施し、4冊の報告書を刊行してきた。報告書はいずれも、和文の古文書の影印（写真版）・翻刻（活字化）・解題という体裁をとっている。ここでは以下、その経緯を振り返るとともに、アイヌ・先住民研究についての歴史学、とりわけ古文書研究の意味についても若干触れてみたいと考える。

## 1. 歴史学とアイヌ・先住民研究

### 「アイヌ史」の捉えかた

一般的に歴史の叙述がなされる場合、重要なのはその主語である。国家を主語とした場合、それは国家史や国制史になる。地域や民族も、当然その主語たり得るわけである。

翻って北海道を例にとってみると、はなしは複雑になる。日本の行政単位としての北海道を主語とした北海道史、地域としての北海道地方を主語とした北海道地域史、また北海道に先住したアイヌ民族を主語とし

たアイヌ史（アイヌ民族史）・・・と、主語の置き方によってその叙述やフレームは揺らぐのである。また、「北海道」の範囲も可變的であるし、またアイヌ民族の歴史的な生活域も北海道の範囲に収まるものではないため、これらのフレームは同一の規格であると必ずしもいえないのはいうまでもないだろう。

また、これまで重ねられてきた「北海道史」の叙述が「日本史」の北漸史観、すなわち開拓史観であることに対しては既に多くの批判がある。アイヌ史との関連でいえば、「北海道史」においてアイヌの歴史が、社会進化論に照らした一種の衰亡史として叙述されたり、あるいは「先史」のいわば残滓として「歴史」とは別個に位置づけられたりしてきたことに対しても、当然ながら批判が寄せられてきたのである。これとは別に、いわゆる「歴史学」（＝文献史学）のフレームそのものが、アイヌ史もしくは先住民族史の叙述に相応しいツールなのか、という理論的な批判も交わされてきている<sup>1</sup>。

アイヌ史の叙述<sup>2</sup>を考えることは、このように、多くの課題を複眼的に乗り越えた先に結ばれるものとも思われるのである。

#### アイヌ史の素材としての古文書

そうではあっても、アイヌ史の叙述について、文献史料が用いられないということは考えられない。もちろん、ここでいう文献史料には、アイヌ史の舞台を圍繞する文字言語が重層的に含まれるとあってよい。北西に接する漢文・満文、北東に接する露文、そして南に接する和文、そして英文などアイヌ社会と接し叙述した諸言語が、これに相当するといえるだろう<sup>3</sup>。

当センターで「古文書プロジェクト」が立ち上げられ、研究を進めてきたのは、アイヌ史的な観点から「古文書」（とりわけ和文史料）を素材化し、共有するための試みである。プロジェクトにおいて、上述した影印・翻刻・解題という作業を重ねてきたのは、こうした問題意識に基づいてのことである。

こうした観点に基づいてこれまでプロジェクトで取り上げてきた古文書は、①江戸時代の和文アイヌ語辞書、ならびに②海外のアイヌ関連和文古文書、のふたつのジャンルからなっている。具体的には、①は上原熊次郎「蝦夷方言藻汐草」（象潟本）ならびに同「蝦夷語集」（内閣文庫原本・滝川本ならびにペテルブルク本）。②は「蝦夷生計図説」の善写本である「東蝦夷彙考」（田藩文庫旧蔵ペテルブルク本）である。これらは、いずれも当センターとの国内共同研究（秋田県にかほ市象潟郷土資料館・北海道立アイヌ民族文化研究センター：2010年度～2012年度）・国際共同研究（ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所：2011年度～現在）により進められた仕事であった。

## 2. プロジェクトの端緒：「象潟藻汐草」の“発見”

### プロジェクト発足の端緒

古文書プロジェクト発足の端緒は、北海道立アイヌ民族文化研究センター本田優子研究員（当時、現：札幌大学教授）が秋田県にかほ市象潟郷土資料館において「蝦夷方言藻汐草」の写本（以下、「象潟藻汐草」）を“発見”なさった2003年9月に遡る<sup>4</sup>。「蝦夷方言藻汐草」は、江戸時代最高水準のアイヌ語通詞として名高い上原熊次郎有次（？～1827）<sup>5</sup>が著した日本語アイヌ語辞書で、板行（1804年序）され流布したことで知られる。「象潟藻汐草」は板本ではなく写本（手沢本）であり、板本とは異なる記載が認められ、それが伝存の経緯（旧蔵者）との関連で注目されたのである。

こうした折、近世のアイヌ語辞書に関して造詣の深い佐々木利和が、2010年に当センターへ教授（当時、現：客員教授）として赴任した。これを機に共同研究の機運が生じ、北海道立アイヌ民族文化研究センター（当時、現：北海道博物館アイヌ民族文化研究センター）ならびに象潟郷土資料館との共同研究というかたちで、「象潟藻汐草」の影印・翻刻・解題に向けての検討が進められたのである【写真1】。



【写真1】「象潟藻汐草」の共同研究風景。中央が本田教授。於；当センターセンター長室，2010年。

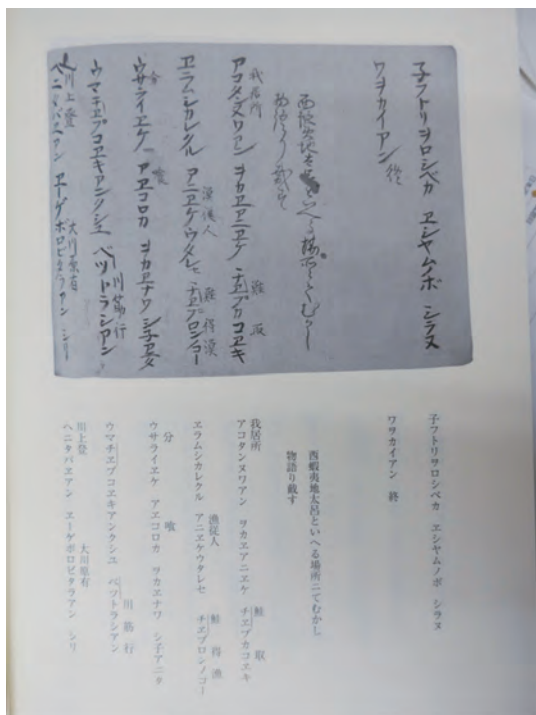
### 「象潟藻汐草」

「象潟藻汐草」は象潟郷土資料館の所蔵にかかるが，象潟の旧家・森市右衛門家に伝存されてきた経緯を持つ。森家は近世後期に旧西蝦夷地フトロ（太櫓）場所の支配人・通詞を務めた当主を輩出した歴史を持つ。フトロ場所は現在の北海道南西部檜山地方・久遠郡せたな町北檜山地区にあたる。「象潟藻汐草」は先述したように森市右衛門家に伝存されてきた写本であり，刊本にはない語彙や文例が数多く収録されていることが，本田教授により見出された。本田教授は解題に，次のように「象潟藻汐草」の価値を述べている。

（「象潟藻汐草」には）渡島半島の日本海側にある「フトロ」という地名

が記されたアイヌ語と日本語の対訳文が、膨大に記載されていた（中略）  
従来、太平洋側のアイヌ語については比較的資料が残っており一定の研究蓄積もあるが、日本海側のアイヌ語についてはほとんど手つかずの状態といえる。貴重な資料に遭遇して全身に鳥肌が立つということを、私は生まれて初めて体感し、この資料が、これからのアイヌ語研究にどれほど大きく貢献するかと考えると、心底ゾクゾクした。

プロジェクトでは、こうした研究上の意義を踏まえ、北海道立アイヌ民族文化研究センターならびに象潟郷土資料館との共同研究体制を構築し、翻刻作業をおこなった。翻刻には、北海道大学大学院文学研究科日本史学講座大学院生の助力を得つつ、佐々木・谷本が校訂・編集にあたった。解題は、本田氏ならびに象潟郷土資料館の斎藤一樹氏に御寄稿をお願いした。写真版は、北海道立アイヌ民族文化研究センターから提供を受け、掲載には象潟郷土資料館の承諾を得た。こうして、「古文書プロジェクト報告書」第1弾として写真版で影印を翻刻に対照させた『にかほ市象潟郷土資料館所蔵森家旧蔵「蝦夷方言藻汐草全」翻刻・解題』が当センターから2012年度末（2013年3月）に刊行された【写真2】。こうした協業のかたちは、のちに続



【写真2】 古文書プロジェクト報告書の体裁（「象潟藻汐草」）。上段が影印（写真版），下段が翻刻（活字化）。

く古文書プロジェクトの成果刊行のモデルの端緒となった。

### 3. プロジェクトの展開：ロシアとの共同研究

#### 国際共同研究の組織

古文書プロジェクトの特色の一つに、ロシアとの国際共同研究が挙げられる。これは、当センターが掲げる学際的・国際的な研究の推進に連動した側面を示していると考えられる。

ロシアとの共同研究は、当センターとロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所（在サンクトペテルブルク市）とのあいだに交わされた研究覚書によって進められている【写真3】。具体的には、2011年度から2014年度における「『東蝦夷彙考』写本と『蝦夷生計図説』写本に關



【写真3】ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所における共同研究。左から佐々木，シェブキン，谷本。

する国際共同研究（覚書）」ならびに2015年度から2018年度における「サンクトペテルブルク市所在アイヌ関連古文書に関する国際共同研究覚書」（現在進行中）に即しての共同研究がそれである。覚書はいずれも、当センター常本照樹センター長ならびに先方のイリナ・ポポワ所長との間で交わされたメモランダムとしての体裁を備えている。

この共同研究のキーマンとして、ワシーリー・シェプキン氏（ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所上席研究員）の存在がある。近世日露関係史を専攻するシェプキン氏と当センターとの共同研究は、谷本を介した2012年1月～2月の当センターへの招聘からはじまり、2013年7月～2014年6月には佐々木受入の国際交流基金フェローとして当センターに赴任されたことで深まり、現に当センター客員研究員としてこれが継続されている。なお、こうした協業については当センター博士研究員の鈴木建治氏（当時、現：国立アイヌ民族博物館開設準備室研究員・北海道大学大学院文学研究科共同研究員）の尽力に与ることの多大であったことを、ここに明記しておきたいと思う。

共同研究の成果は、報告書ならびに国際共同研究集会として発表されている。このうち、シェプキン氏が当センターに赴任中に進めた共同研究に、「東蝦夷彙考」（ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所所蔵）の翻刻・露文翻訳・解題があり、これに影印（写真版）を付しての報告書出版がある。

#### 「東蝦夷彙考」

「東蝦夷彙考」はアイヌ民族誌研究の分野でよく知られた図像資料である「蝦夷生計図説」（1823年）<sup>6</sup>の写本である。このテキストの注目点は、①写本の経緯と②これがロシアに伝存した経緯にある。このうち①については、蔵書印の分析から、徳川御三卿のひとつ田安德川家当主の徳川斉匡（1779～1848）の旧蔵にかかる写本（田藩文庫旧蔵本）であることが明らかとなった。斉匡は将軍家斉の実弟であったから、当時の北方関連情報の管理という側面からも注目されたのである。また、写本

の系統や記載の特色からは、「蝦夷生計図説」正本（東京大学総合博物館所蔵）と共通の祖本からの写本である可能性も示唆された。アイヌ民族誌研究の工具書ともいえる「蝦夷生計図説」の成立や流布を考えるうえでも、重要な手掛かりを示している一本であると考えられるのである。

②については、植物学や博物学を専攻したロシア人A.V.グリゴリーエフ（1848～1908）が1880年に東京で購入しロシア帝国地理学協会附属図書館へ寄贈され、1906年にアジア博物館へ移管（1930年にソヴィエト科学アカデミー東洋学研究所と改称）、その後1950年に同研究所がモスクワに移転する際に同レニングラード支部（2007年に東洋古籍文献研究所として独立）に存置され、現在に至っていることが明らかにされている<sup>7</sup>。アジア博物館には近世以来の和書がコレクションされてきており、それが東洋古籍文献研究所に引き継がれた経緯と同様の性格を、「東蝦夷彙考」は帯びているのである。この点は、のちにこの共同研究がコレクション形成史という視座を獲得共有していくうえでの契機ともなった、重要なポイントとなっていくことになる。

プロジェクトでは、こうした研究上の意義を踏まえ、翻刻・翻訳作業をおこなった。翻刻には、北海道大学大学院文学研究科日本史学講座大学院生の助力を得つつ、シェプキン・佐々木・谷本が校訂・編集にあたった。翻訳は、シェプキンが担当した。解題は、シェプキンならびに谷本が執筆した。写真版は、共同研究覚書に基づいてロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所から提供を受け、掲載の承諾を得た。こうして、「古文書プロジェクト報告書」2として写真版で影印を翻刻に対照させ、翻刻の露文翻訳を収録した『ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所所蔵 田藩文庫旧蔵「東蝦夷彙考」翻刻・解題』が当センターから2013年度末（2014年3月）に刊行された。

#### 「蝦夷語集」

東洋古籍文献研究所には、上原熊次郎の著した近世最大の語彙数を誇るアイヌ語日本語辞書である「蝦夷語集」（1827年）の写本が収蔵さ

れている。「蝦夷語集」の原本（自筆稿本）は昌平坂学問所旧蔵本が国立公文書館内閣文庫に所蔵されているから、写本はそれを底本にしたものである。注目されるのは、写本をなした人物と写本の動機、そしてそれがサンクトペテルブルクにもたらせられた経緯である。

写本をなしたのは、金田一静江氏。アイヌ語学・アイヌ文化研究で知られた京助氏の令夫人である。写本の年代は1912年（明治45）。同時に作成された写本が金田一家に蔵され、その後國學院に寄贈され、現在では國學院大學北海道短期大学部金田一文庫（滝川市）に所蔵されている。金田一家が写本を作成し得た背景には、当時内閣法制局参事官兼書記官記録課長として内閣文庫の管理にあたっていた柳田國男の存在を念頭におけば無理はないだろう。当時柳田と金田一は、新渡戸稲造を世話人とした郷土会や、折口信夫の主宰した國學院大學郷土研究会で浅からぬ学問的交流を有していたからである。

では、なぜ金田一写本「蝦夷語集」の一本が東洋古籍文献研究所の所蔵となったか。これには、郷土会や國學院大學郷土研究会で金田一や柳田と学問的交流をもったニコライ・ネフスキー（1892～1937）の存在を考えると辻褄が合う【写真4】。ネフスキーは西夏語や日本語琉球方言（とりわけ宮古島方言）の研究者として知られる言語学者であるが<sup>8</sup>、アイヌ語にも深い関心を持ち、いくつかの研究業績を残している<sup>9</sup>。1914年に日本へ留学するが、ロシア革命の混乱を受けながく日本にとどまり、大阪外国語学校や小樽高等商業学校で教鞭を執り、積丹出身の萬谷イソと結婚した。その後、ソヴィエト政府の招きを受け1929年に帰国、レニングラード大学（現：サンクトペテルブルク国立大学）東洋学部教授となるが、1937年に妻とともにスパイ容疑で銃殺された（1957年に名誉回復）。

共同研究の過程で、東洋古籍文献研究所にはネフスキーの遺した数多くの資料が所蔵されていることが確認された。なかには、金田一京助がネフスキーに宛てた自らの研究論文の抜刷が含まれており、両者の交流



【写真4】前列左から金田一京助、ニコライ・ネフスキー、柳田國男。後列左端が折口信夫。  
大正10年（1921）3月31日、柳田國男渡欧壮行会、於：折口宅。出典：岡野弘彦  
編『新潮日本文学アルバム26 折口信夫』（新潮社、1985年）

が窺える。また、柳田國男を介在してなされた内閣文庫所蔵本の写本も複数所蔵されている。金田一写本「蝦夷語集」もこうした日露学術交流の果実としてネフスキーに齎され、帰国後にソヴィエト科学アカデミー東洋学研究所へ寄贈された、と捉えるのが自然のようにも考えられるのである。

ただし、こうした推測は、目下のところ東洋古籍文献研究所のアルヒーフから直接裏付けられるに至っていない。プロジェクトの今後の課題として、引き続き伝存の経緯につき国際共同研究を進めていきたいと考えているところである。

さて、プロジェクトでは、こうした研究上の意義や研究史上の意義を踏まえ、上原熊次郎による「蝦夷語集」自筆稿本の翻刻をおこなった。翻刻には、北海道大学大学院文学研究科日本史学講座大学院生の助力を

得つつ、佐々木・谷本が校訂・編集にあたった。写真版は、岡田恵介氏（公益財団法人アイヌ文化振興・推進研究機構〔当時、現：公益財団法人アイヌ民族文化財団〕）から提供を受け、国立公文書館から掲載の承諾を得た。こうして、写真版で影印を翻刻に对照させた『国立公文書館内閣文庫所蔵 昌平坂学問所旧蔵「蝦夷語集」元・亨 影印・翻刻』が2016年度末（2017年3月）に「古文書プロジェクト報告書3」として、『国立公文書館内閣文庫所蔵 昌平坂学問所旧蔵「蝦夷語集」利・貞 影印・翻刻』が2017年度末（2018年3月）に「古文書プロジェクト報告書4」として、それぞれ当センターから刊行された。

現在は、引き続き「蝦夷語集」の索引（アイヌ語日本語ならびに日本語アイヌ語）につき、北海道大学大学院文学研究科日本史学講座大学院生ならびに中村一枝氏の助力を得つつ、鋭意編集作業を進めている。また、佐々木・谷本・北原ならびに中村一枝氏らによる解題の作成も準備しているところである。

### コレクション形成史

古文書プロジェクトの推進と並行して、東洋古籍文献研究所との間での共同研究は、東京大学史料編纂所によるJSPS科学研究費基盤研究（S）「マルチアーカイヴァル的手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究」（2014年度～2018年度：研究代表者：同所保谷徹教授）を構成するユニットのひとつ「ロシアⅢ」（研究分担者：谷本，連携研究者：佐々木・鈴木建治・東俊佑〔北海道博物館〕，研究協力者：シェプキン・田村将人〔国立アイヌ民族博物館開設準備室〕・兎内勇津流〔北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター〕・鈴木仁〔北海道大学大学院生〕）によっても進められた。その過程で、「東蝦夷彙考」や金田一本「蝦夷語集」の伝存の経緯とともに、近世以来のペテルブルクにおける和書のコレクション形成過程が、日露関係史を直接体現した歴史性を帯びていることに気付かされた。

この間、東洋古籍文献研究所においてもシェプキンにより同所の和書

を対象としたコレクション形成過程の研究が進められたこともあり、このテーマに関する共同研究は深められた。詳細は今後の成果刊行に譲りたいが、共同研究の中間報告として2016年7月に当センター主催の日露国際研究集会「コレクション形成史からみる日露関係史」を、2018年6月には当センター共催の日露国際研究集会「コレクション形成史からみる日露関係史Ⅱ」を、それぞれ北海道大学を会場として開催することができた【写真5】。アイヌ史の舞台をまたぐ日露両国に所在するアイヌ・北方関係史料の形成過程を構造的に検討するこうした研究の視座を獲得できたことは、プロジェクトの大きな成果のひとつとして数えることができるだろう。

### おわりに：プロジェクトの展望

以上、この8年間進めてきた「古文書プロジェクト」の仕事を、雑駁



【写真5】日露国際研究集会「コレクション形成史からみる日露関係史」（2016年7月10日、当センター主催、於：北海道大学）

ながら振り返ってみた。一連の仕事を要約するならば、アイヌ史に資すべき「古文書」を、国内・国際共同研究を推進しつつ、その研究素材化をはかってきた、といえるだろうか。これらの仕事は現時点で、あるいは将来どのような評価を受けるのか、江湖の御判断をいただけるならば幸いである。ここでは、こうした共同研究の今後の展望につき、若干触れておきたい。

日露国際共同研究の過程で、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所を中心とした近世以来の和書コレクション形成史の全体像を把握する研究の方向性を獲得し得たことは、先に触れた。そのうえで、アイヌ史に関連したいくつかの研究課題も得られている。たとえば、「東蝦夷彙考」の伝存経緯に関連して、グリゴリーエフが山越郡遊楽部（現：二海郡八雲町）で蒐集したアイヌ語彙集が、ロシア地理学協会に収蔵されていることが確認された。「象潟藻汐草」の評価でも触れたように、近代初頭における渡島半島のアイヌ語語彙や文例は、極めて貴重である。この資料の素材化を、現在プロジェクトでは進めているところである。

また、これも先に触れた2018年度の日露国際研究集会でも報告したように、サンクトペテルブルクやモスクワの図書館や古文書館には、従来知られてこなかった安永年間（18世紀後半）のロシアによる蝦夷地交渉の記録が和文を含め少なからず残されていることが確認された<sup>10</sup>。18世紀のアイヌ史にかかわる一次史料は、それだけで大変貴重な価値を持つ。アイヌ史に資する「古文書」の研究素材化を、今後とも推進していきたいと考えている次第である。

なお、プロジェクトの報告書の刊行に際しては、北海道大学大学院文学研究科日本史学講座の大学院生諸君が翻刻に協力してきたことは既に述べた。彼らはその後学窓を巣立ち、JSPS特別研究員や道内外の博物館学芸員ならびに高等学校教諭の職を得て活躍中である。翻刻は古文書解読能力をもって史料と一文字ずつ真摯に向き合う地道な作業であるが、アイヌ語彙集の翻刻にはこれに加え、アイヌ民族誌やアイヌ語に関

する素養が求められる。そこには、アイヌ史・アイヌ民族誌に関する大きな教育的効果が認められ、それは今後当センターが果たしていくことになる大学院教育の機能にも密接に関連していく経験だったであろうことを付言し、稿の結びとしたい。

- 
- <sup>1</sup> たとえば、坂田美奈子『アイヌ口承文学の認識論—歴史の方法としてのアイヌ散文説話』（御茶の水書房、2011年）。
- <sup>2</sup> アイヌ史の叙述に関する問題点については、佐々木利和「アイヌ史は成立するのだろうか」（同『アイヌ史の時代へ：余瀝抄』北海道大学出版会、2013年／初出1988年）以来の模索がある。当センターでは「アイヌ史プロジェクト」においてこうした問題に取り組んできた。加藤博文「まとめ—新しいアイヌ史の構築：マルチヴォイスの歴史に向けて—」（加藤博文・鈴木建治編『「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書 新しいアイヌ史の構築：先史編・古代編・中世編』（当センター、2012年）の整理をも参照。
- <sup>3</sup> このことに関しては、佐々木史郎「より広い視野から見たアイヌ文化研究」（小谷凱宣編『海外のアイヌ文化財：現状と歴史』南山大学人類学研究所、2004年）、谷本晃久「“近世アイヌ史”をとりまく国際的環境」（『新しい歴史学のために』277、2010年）などに提言がある。
- <sup>4</sup> これについては、本田優子「森市右衛門『象潟藻汐草』との出会い」（象潟町郷土史研究会『象潟の文化』30、2006年）ならびに同「象潟に伝存する『蝦夷方言藻汐草』について」（にかほ市教育委員会『雄波郷』6、2013年）をも参照。
- <sup>5</sup> 上原熊次郎については、佐々木利和『アイヌ史の時代へ：余瀝抄』（北海道大学出版会、2013年）、谷本晃久「蝦夷通詞・上原熊次郎の江戸：御書物同心への異動と天文方出役をめぐる」（『北海道大学文学研究科紀要』151、2017年）を参照。
- <sup>6</sup> 東京大学本を底本とした刊本として、河野本道・谷澤尚一編『蝦夷生計図説』（北海道出版企画センター、1990年）がある。
- <sup>7</sup> 鈴木建治「ロシアに渡ったアイヌ資料の歴史的経緯について：A.V.グリゴリエフのアイヌコレクションを追跡する」（『北方人文研究』5、2012年）。
- <sup>8</sup> ネフスキーの履歴については、加藤九祚『完本 天の蛇：ニコライ・ネフスキーの生涯』（河出書房新社、2011年）、生田美智子編『資料が語るネフスキー』（大阪外国語大学、2003年）など参照。

<sup>9</sup> たとえば邦訳書に、ニコライ・ネフスキー／エリ・グロムコフスカヤ編，魚井一由訳『アイヌ・フォークロア』（北海道出版企画センター，1991年）がある。

<sup>10</sup> これに関しては，Щепкин：シェプキン В.В.『Северный ветер：Россия и айны в Японии XVIII века（北からの風：18世紀日本におけるロシアとアイヌ）』（モスクワ：Кругъ社，2017年），東俊佑「安永7年の蝦夷地奉行定書について」（『北海道博物館研究紀要』2，2017年），谷本晃久「北の『異国境』——幕府外交の転換とアイヌ史上の画期」（高埜利彦編『日本近世史研究と歴史教育』山川出版社，2018年）といった近年の成果を参照。



# 博物館学

## (博物館プロジェクト／先住民族アート・プロジェクト報告)

山崎 幸治

### 1. はじめに

本章では、筆者が担当する『博物館プロジェクト』と『先住民族アート・プロジェクト』について報告する。『博物館プロジェクト』は、当センターが発足して間もない平成20年度より現在まで継続している。

『先住民族アート・プロジェクト』は、平成21年度から平成27年度まで研究会を主体とした活動をおこなった。『先住民族アート・プロジェクト』は、平成27年度をもって独自予算を持つプロジェクトとしては終了したが、これは研究の中止を意味するものではなく、プロジェクトのなかで芽生えた実践的な関心が、博物館や美術館などいわゆるミュージアムという場に集まってきたために『博物館プロジェクト』のなかに組み込むことになった結果であり、その研究関心は継続していることを強調しておきたい。

なお、本章のもととなったシンポジウムでの発表は、「博物館学から」という題目で、上記2つのプロジェクトを合わせて報告をおこなったことから、『博物館プロジェクト』についての記述が多くなっていることをご了承ください。

### 2. 『博物館プロジェクト』—Reconnectという視点から

『博物館プロジェクト』は、アイヌ・先住民と博物館をめぐる課題について考えることを目的とし、とりわけ博物館に所蔵されているアイヌ民族に関する資料を、未来に活かす方法について模索してきた。実際の展示にも取り組んできた。そこでの活動は、博物館資料の調査・研究・展示をメインとし、研究というスタンスを重視してきた。当センターは

物質文化資料を収集・保存するという機能を持たないことから、プロジェクトのスタート時点から道内外の博物館や関係機関より協力をいただきながら活動をおこなってきた。

今回、本プロジェクトの10年を振り返るなかで、その全体を貫くキーワードとして、Reconnect、日本語でいえば「再接続（再びつながる）」という言葉が浮かび上がってきた。ここでのReconnectという言葉には、つぎの四つの意味が込められている。

一つめは、現在に生きるアイヌ民族と博物館や大学といった研究機関との間の関係を再びつなぎ合わせるという意味。二つめは、現在のアイヌ民族が、博物館に収蔵されている古いもの、すなわち先人の作品と再会し、再びつながりを取り戻すという意味。三つめは、博物館での展示や研究を通じて、アイヌのものの作りの歴史における過去と現在をつなぎ、そこから未来へとつないでいくという意味。四つめは、「再接続」に限定されないが、博物館や展示という場を通じて、人と人とをつなげるという意味である。本プロジェクトの活動の概要については巻末の資料を参照いただきたいが、ここでは当プロジェクトが主体となり実施した主な展示について、Reconnectというキーワードを意識しつつ、ふり返ってみたい。

## 2. 1. 最初の企画展

2009年、『テエタシンリッ テクルコチ 先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料―受けつぐ技―』（以下、『先人の手あと』展）という企画展を、北海道大学総合博物館において開催した。本展示は、当センターにとって初めての博物館展示であり、北大総合博物館の企画展としても位置づけられた。展示にあたっては、加藤克助教をはじめとする北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園（以下、北大植物園）のスタッフより準備段階から全面的な協力をいただいた。本展示については図録および関連した論考を发表している〔山崎 2009; 2015b;

山崎・加藤・天野 2009; Miller and Yamasaki 2017; Yamasaki and Miller 2017]。本展示は、北大植物園に所蔵されているアイヌ民具の「複製」という行為に着目したものであった。具体的には、北大植物園に所蔵されている古いアイヌ民具を、現在活躍中の工芸家の人々に「複製」してもらい、その「複製」という行為をおこなう過程のなかで、現代の工芸家の人々が何を感じ、学び、考えたのかということを表示する試みであった。なお、このような展示が実現可能となった背景として、その前年まで日本学術振興会科学研究費補助金によって北大植物園に所蔵されるアイヌ民具の悉皆調査が終了し、目録が整備・刊行されたことを明記しておく必要がある（佐々木・古原・小谷 2008; 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園 2008）。

本展示の準備は、2008年より約1年間をかけておこなわれた。ここでは、上記の目録をもとに工芸家の人々に、「複製」を希望するアイヌ民具を選定してもらい北大植物園において「複製」のための資料調査をおこなった。この調査の場について、工芸家の一人が「これは自らの学びの場であり、自らの文化を取り戻す場である」と語ってくれたことが強く印象に残っている。

実際の展示では、モデルとなった博物館所蔵のアイヌ民具とその「複製」された作品とを並べて展示し、観覧者が、その両者の間に受け継がれる文化を感じとれるように工夫した。また、展示関連イベントでは、「複製」をおこなった工芸家の人々が、自らの作品を前に観覧者に解説をおこない、対面による双方向的なコミュニケーションが生まれた。本展示の実践のなかで、Reconnectとも呼べる、多くの再会や出会いが生まれたのである。そして、それを媒介したのが博物館という場であり、そこに長年収蔵されてきたアイヌ民具だったのである。

## 2. 2. 「複製」の現代的意義

『先人の手あと』展で着目した「複製」という行為について、展示終

了後も多くの工芸家や研究者からコメントをいただいた。そして、その後も「複製」について考察するなかで、「複製」がもたらす現代的意義について一定の賛同を得られた成果を整理したものが図1である。



図1：博物館資料「複製」の現代的意義

ここでは、博物館が抱えている課題として、博物館に所蔵されているアイヌ民具の経年劣化が進み、修復を要する資料が増加しつつあることが指摘できる。博物館資料の修復には、保存科学的な専門知識が必要だが、同時に、それぞれの資料や伝統技術についての知識が不可欠である。しかし、その修復に対応できる技術者は、現在、非常に少ないという課題がある。一方、アイヌ民族の課題として、アイヌ文化の文化復興のあり方を模索している状況がある。ものは博物館に残っているが、それを制作する技術の伝承が途切れてしまっているケースも珍しくない。また、自らの文化を学ぶ場が不足している現状がある。この両者の現状のあいだに本展示で実践した「複製」を位置づけることができるのではないだろうか。そこでは、これまでの研究では見過ごしがちであった、博物館資料の「新たな仕事」を見出すことができる。ある工芸家は、「複製」のなかで、先人の作品に残された手あとをトレースするように

自らも手を動かすことで、かつての作り手が制作時に感じたであろう心情を追体験したと語った。また、「複製」を何度も経験することで、アイヌのものの作りのルールが、自らの手のなかに入ってくると語ってくれた工芸家もいた。ここでのルールは「伝統」と言い換えることができるかもしれない。さらに「複製」をおこなうなかで、先祖の知恵や技術の素晴らしさに感動することで、先祖へ尊敬の念を抱き、自らが内面化していたアイヌ差別を克服することができたと言ってくれた工芸家もいた〔山崎 2015b〕。

「複製」は、工芸技術の向上や失われた技術の復活に止まらない、ものを媒介とした先人との精神的な部分も含めた再接続のツールになりうる。現実的な課題として挙げた博物館資料の修復技術者などの人材育成のツールにもなりうる。さらに、工芸品制作を生業とする人々にとっては、新たな作品や商品を生み出すためのインスピレーションを得る機会にもなりうる。「複製」の現代的意義を整理し提言できたことは、本プロジェクトにおける最大の成果であったと考えている。

## 2. 3. 世界とつながる

本プロジェクトは、海外においても調査および展示を実施した。なかでも2013年に米国ハワイ州ホノルルにあるイースト・ウエスト・センターにおいて、イースト・ウエスト・センター・アーツ・プログラムと共に開催した特別展『Ainu Treasures: A Living Tradition in Northern Japan (アイヌの宝ー日本北部にいきづく伝統)』は当プロジェクトの海外での活動として特筆される。本展示は、前述の『先人の手あと』展および後述する『先住民と国境ーアイヌと境界』展のコンテンツを再構成し、ハワイ州ホノルルのビショップ・ミュージアムに収蔵されているアイヌ民具を加えて構成された。講演会やOKI&Marewrewによるライブなど充実した関連イベントも多く企画された。ハワイには、多くのネイティヴ・ハワイアンの人々が暮らしていることもあり、先住民文化へ

の関心が高く、多くの方々にご来場いただいた。また、会期中にハワイにおいて日本文化を紹介するイベント「ホノルル・フェスティバル」が開催されたこともあり、そこに参加していた阿寒湖や二風谷のアイヌの工芸家にも来場いただいた。

ハワイでの想定外の成果としては、会期中にハワイ州ホノルルのホノルル美術館にアイヌの衣服が2点収蔵されているという情報が入り、ホノルル・フェスティバルへ参加するためにハワイを訪問していた二風谷の人たちと共に資料調査を実施できたことである。ホノルル美術館にアイヌの衣服が収蔵されていたことは、それまで日本国内では知られておらず、本調査により、その存在が確認された。これもReconnectと言えるだろう。

本プロジェクトでは、アイヌ文化だけでなく海外の先住民文化に関する展示もおこなった。2010年には、北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」との共催で『先住民と国境—北米先住民ヤキの世界』展を実施した。2012年には、本展示の東京巡回展も実施した。本展示については、展示の中心をになった水谷裕佳（当時、当センター博士研究員）による論考がある〔岩下・木山・水谷・山崎 2014; 水谷 2015〕。

また、2016年には、台湾の国立政治大学烏来楽酷計画（ウライ・ロカ・プロジェクト）に協力するかたちで、阿寒湖と二風谷において『台湾・烏来タイヤル工芸展、烏來泰雅工藝展』を開催した。展示に際し、新北市烏来区原住民編織協会の工芸家をはじめ多くの人々が北海道を訪問し、各地のアイヌ工芸に携わる人々と交流を深めた。

当センターは、設立時より台湾との交流を積極的におこなっているが、そこには研究者に限定されない人々との交流も含まれる。そのような交流のなかで、台湾の原住民族が、前述した「複製」と同様の実践を「重製」と呼び、文化復興の手段としていることを知ったことは大きな収穫であった。かつて博物館にものを提供した人々の子孫たちが、博物

館を訪れて自らの先祖のものにアクセスし、そこから新たな活動を展開する。まさにReconnectと呼べる実践が、世界各地の先住民族においてパラレルな現象として認められるのである。

## 2. 4. サテライト企画展

当センターでは、二風谷と阿寒湖の二つの地域をサテライトと位置づけ、共同研究をはじめ様々な活動に協力いただいている。本プロジェクトにおいても、この二つの地域において企画展を開催させていただいた。

2016年には、阿寒湖アイヌコタンにあるアイヌ文化創造伝承館（オンネチセ）においてサテライト企画展『昭和レトロアイヌのお土産大集合』を開催した。2017年には、平取町二風谷の二風谷工芸館においてサテライト企画展『二風谷，昭和おみやげ物語』を開催した。いずれも地元の文化保存会，工芸組合，博物館，アイヌ協会などから全面的な協力をいただいて実現したものである。この二つの展示では，ツーリスト・アートとも呼ばれる，いわゆる「お土産品」に着目し，アイヌ文化と観光との関わりについて考えることを狙った展示であった。展示は，筆者の実家にあった「アイヌ」や「北海道」をモチーフとするお土産品や木彫り熊などをメインとし，そこに各地域ならではのコンテンツを加えて構成した。阿寒湖では，阿寒観光の歴史を知ることができる観光ポスターのコレクションを展示した。二風谷では，地元で長年にわたり民芸品店を営んでいる個人が保管されていた，昭和期の北海道観光に沸く二風谷において撮影された写真コレクションの一部を借用させていただき展示した。これらの写真コレクションは，アイヌ民族の現代史を考えるうえでも重要な意味を持つとの判断から，並行してデジタル化をおこなった。

これらサテライト企画展において取り上げた「観光」というトピックは，本プロジェクトのキーワードであるReconnectとも連関している。

これまでアイヌ文化に関する展示では、いわゆる伝統文化の紹介を目的として、古い民具類が中心に展示されることが多かった。この傾向は今日まで続いているが、近年、現代のアイヌ文化を紹介する必要性が唱えられはじめ、現代の作り手による工芸品やアート作品なども展示されるようになってきた。これは伝統文化に偏りがちであったアイヌ文化展示への批評や、現代に生きるアイヌ文化を展示する重要性などについて議論が深まった結果ともいえる。ただ、筆者は、現代を展示することに賛同する一方で、いわゆる伝統文化の展示と、現代の展示との間に、歴史的な空白があるように感じていた。伝統から現代、その変化の過程を説明せずにジャンプしているような感覚とも言えようか。筆者が、このように感じるようになったのは、アイヌの工芸家たちとの会話のなかで、しばしば次のような声を耳にしたことによる。

「自分たちの先輩たちは、観光地などでお土産品を作り、売って生活で営んできた。自分たちはその先輩達から、現在の創作につながる技術や多くのことを教えてもらい今日に至っている。しかし、そういう先輩たちの仕事が十分に評価されてないように思う。それが非常にもどかしい。」

もちろん、観光とは無関係に、伝統のもの作りが継承されてきた歴史も存在し、それを否定するつもりはない。とはいえ、上記の声について考えを巡らせるならば、「お土産品」は、アイヌのもの作りの歴史を考えるうえで、無視できない存在なのではないだろうか。筆者は、「お土産品」には、アイヌ文化の伝統と現代との間の空白を歴史的にReconnectする可能性があると考えている。

ここ数年、かつて北海道土産の代名詞であった木彫り熊が再評価されつつある。また、観光という産業は、近年益々その存在感を増している。本展示のなかで生まれた疑問や課題を、今後も継続して考えていき

たい。

## 2. 5. パイロット・ミュージアム

パイロットとは「試験的におこなうもの」という意味である。筆者は、センター設立当初より、大学の研究センターという強みを生かした実験的な展示を試みることを構想していた〔山崎 2008〕。よって、本プロジェクトでは、展示規模は小さくとも、全ての展示において何らかのチャレンジを試みるように心がけてきた。

たとえば、2011年に、北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」との共催で開催した『先住民と国境—アイヌと境界』展では、アイヌの伝統儀礼に参加する4人の参加者の一日をドキュメンタリ的に追う映像作品を展示の中心にすえた。さらに、いわゆる「展示する側」である研究者を等身大パネルで会場内に展示するといった実験もおこなった〔岩下・木山・水谷・山崎 2014; 山崎 2014; 2015a; 山崎・木山・宇佐見 2011〕。

2011年には、『保莉実写真展 カントリーに呼ばれて—オーストラリア・アボリジニとラディカル・オーラル・ヒストリー』を開催した。本展示は、当センターにとって初めての写真展であったが、保莉氏の研究に魅せられた学外の多くの関係者から協力とアイディアをいただき成功をおさめた。

本プロジェクトでは、この10年間に様々な展示を実施してきたが、いずれも企画展や特別展という形態であった。そのなかで幸運だったのは、2016年の北海道大学総合博物館リニューアルにともない、当センター独自の展示スペースをいただけたことである。そこでは、センターの概要を紹介するとともに、特定のテーマについて企画展形式で紹介するスペースを設け、当センターがおこなっている研究プロジェクトなどアイヌ・先住民研究に関わるコンテンツを展示することにした。2016年から2017年にかけては、アイヌ・先住民言語アーカイヴ・プロジェクトとともに『新冠のアイヌ語地名—狩野義美氏の伝承』を開催した。

2017年から2018年にかけては、サテライト展示でも触れた「お土産品」に着目した『「アイヌ」のモノとイメージ』を開催している。北海道大学総合博物館内の当センターの展示スペースは、まさに「パイロット・ミュージアム」としてのチャレンジを实践できるスペースであり、本プロジェクトの今後の活動の大きな柱のひとつとなると考えている。

## 2. 6. 課題

以上、博物館プロジェクトが実施した主な展示について、Reconnectというキーワードを意識しながらふり返ってみた。本プロジェクトを今日まで続けてこられたのは、アイヌ民族の皆様はもちろん、博物館などの関係機関のスタッフの皆様、多分野にわたる業者の皆様など、多くの人々に支えていただいたおかげである。改めて、ご協力いただいたすべての人々に感謝の意を表したい。

同時に、新たな試みをおこなうということは、新たな課題を生み出すことでもある。それら全てを列挙することは困難であるが、ここではキーワードReconnectに関わる三点のみ指摘しておきたい。

一点目は、アイヌ民族と博物館との関係性と歴史性を考えた場合、その間に存在する壁は、いまだに厚いという点である。『先人の手あと』展は、そのような壁を乗り越えようとする試みであったが、その壁は、企画展を一度や二度おこなうことで崩すことができるものではなく、『先人の手あと』展の効果は限定的であったと考えている。アイヌ民族側と博物館側との間の壁を壊し、両者の良好な関係性が当たり前の状況となるためには、一過性のイベントでは不十分であり、継続性をもった活動が必要不可欠なのである。

二点目は、現在のアイヌ民族が、博物館に収蔵されている古いもの、すなわち先人の作品と再会し、再びつながりを取り戻すために必要な作業と働きかけが、いまだ不十分だという点である。ここには、二つの課題が含まれている。ひとつは、それぞれの博物館に所蔵されている資料

を調査・整理し、目録の公刊などアクセス可能な状態に整える作業である。これは博物館の基本的な業務のひとつであるが、これには多くの時間と労力を要する。とりわけスタッフが少ない博物館では、これらの作業に時間を割けないことも多いのが現状である。よって、課題として改めて強調しておく必要がある。もうひとつは、これらの作業をおこなうと同時に、博物館やそれに関わる研究者が、博物館資料が広く活用されるように能動的に働きかける必要性である。筆者は、当初、この働きかけを軽視してきたように思う。資料の閲覧や調査の希望があった場合、それに対応することは基本的な業務として想定していたが、それをするがすような能動的な働きかけは補足的なサービスのよう認識していたのである。しかし、本プロジェクトをつうじて、前述のアイヌ民族と博物館との間にある壁、その壁を前にして躊躇しているアイヌ民族の姿や声に接するなかで、その壁を壊したいと考えるのであれば、能動的に声かけをおこなうことが、いかに重要であるかということに気づかされた。博物館や研究機関が無自覚にまってしまう壁、その壁の厚みを自覚し、それを壊すための能動的な働きかけが必要であろう。当センターは博物館ではないが、だからこそ、考察すべき課題として指摘しておきたい。

三点目は、博物館での活動や展示などの実践のなかで交わされる対話やコミュニケーションを意識化し、考察の対象とする必要があるという点である。近年、アイヌ民族に限らず先住民に関する展示では、その当事者と共同で準備を進めることが一般化しつつある。そこでは様々な場で、様々な対話が交わされる。それらの対話を、単なる面前の仕事のやりとりという認識を超えて、その対話にどのような意味があるのか、たとえば、権力の非対称性といった視点から考えてみる。このような研究アプローチが、本プロジェクトにおいても今後の課題となってくると考えている。

この10年間、多くの展示を実践してきたなかで、かつて一緒に展示

をおこなった人々と再会すると、しばしば当時のことが話題となる。そこで筆者が気づいたのは、展示とそこでの実践の総体が、展示名を共通のインデックスとして共通の記憶となっていたことである。それら共通の記憶ひとつひとつは小さなものであるが、その共通の記憶を積み上げていくこと。その集積が未来への歴史へとつながっていくのではないだろうか。

以前、あるアイヌの古老の方から、「長い年月のなかで生み出された問題を解決するためには、同じだけの年月をかけた努力が必要だ」という言葉をいただいたことがある。遅々とした歩みではあるが、今後も大学の研究センターだからこそできるチャレンジを、博物館という場から継続性をもって模索していきたいと考えている。

### 3. 『先住民族アート・プロジェクト』

平成21年度から平成27年度にかけて実施した『先住民族アート・プロジェクト』について、ごく簡単にご紹介する。アートは、その定義によって様々なものを含むが、本プロジェクトでは、木彫や刺繍などに代表されるアイヌ民族の造形に限定して、世界の先住民の現状と比較しながら検討をおこなった。そこでは、アイヌの工芸に携わっている人々、海外の先住民について研究している研究者など、複数分野の参加者に参加いただき、先住民アートという用語が使用されている現代の状況と多様性を具体的に把握することに努めた。研究会の会場は、当センター以外に、当センターのサテライトでもある阿寒湖においても開催させていただいた。研究会は、次の4点を目的として掲げて10回開催した。

- ①アイヌ民族の造形作家・組合・民族団体による、アイヌ・アートの現状、課題、展望を報告してもらい情報を共有すること。
- ②オセアニア・東南アジア・アフリカ・北米といった諸地域における世界の先住民族アート、およびそれを取り巻く市場と法の関係を報告す

ること。またそれによって、アイヌの人々が自分たちの現状を相対化して把握する理解を助けること。

- ③先住民族アートと市場に関する法的問題の事例を報告してもらうこと。
- ④アイヌ・アートに関するプロモーションや法的施策といった将来像を検討すること。

研究の成果は、『世界のなかのアイヌ・アート』〔山崎・伊藤 2012〕というタイトルで報告書としてまとめた。その内容については、本章末に付した章立てをご参照いただきたい。プロジェクトでの議論を通じて、おぼろげながらも見えてきたこともある。なぜ「アート」ではなく「先住民アート」なのか。一連の議論を通じて、後者には、技術や、デザインや、道具や、素材や、もの作りの環境そのものが「伝承」の重要な素地となっていることが明らかとなった。また、両者は完全に分断されているものではなく、作り手の意識や社会の文脈のなかで変化するものであることも分かってきた〔山崎・伊藤 2012〕。

本プロジェクトでの議論のなかで、参加者の注目を集めたトピックのひとつが、北米を中心に開催されている先住民アートショーとよばれる実践であった。先住民アートショーとは、先住民自身、アカデミア、博物館、行政などが、それぞれの役割を積極的に担いながら実施するコミュニケーション・教育促進事業のひとつの形態で、展示・販売にとどまらない総合的な先住民文化フェスティバルである。研究会の参加者の多くが、この先住民アートショーという実践のアイヌ民族への応用可能性を考えるようになった。しかし同時に、世界の先住民と彼らのアートのおかれている社会的・経済的状況は多様であり、海外での事例を無批判に導入するだけでは、必ずしも「成功」につながらないという認識も共有されていた。よって、アメリカにおいて先住民アートショーに実際に携わっている研究者や北米先住民の当事者を招聘し国際シンポジウム

を開催することにした。本シンポジウムでは、米国先住民アートショーの実施内容や意図、先住民自身によるアート制作・継承・アートショー参加の意義といった諸点の報告をもとに、アイヌ・アートが担う新たな役割と可能性を学術的かつ実践的に探った。本シンポジウムの成果は、報告書『アイヌ・アートが担う新たな役割—北米先住民アートショーに学ぶ』〔山崎・伊藤・城石 2015〕としてまとめた。

本プロジェクトは、先住民アートに関する美学的なアプローチではなく、現在それを生業としている人々の技術や制作、販売といった実践的な側面からアプローチをしたものであった。現代社会のなかで、それらを制作する技術をいかに未来へ受けついでいくのか、担い手を育てていくのか、経済活動として成り立たせていくのかといった側面にも重点を置いた。現代社会における伝統の継承と、それに基づく革新や創造といった課題を実践の立場から考えてきたとも言えよう。それは、アイデンティティはもちろん、政治、観光、博物館、研究とも関わってくるものでもあった。

世界の先住民を見渡した際、アートは、様々な意味で大きな存在である。アートは、観る者へ訴える強い力と批評力を持ち、その時代を映す鏡でもある。将来、アイヌ民族における実践を検討する際、本プロジェクトの成果が少しでも参考となれば幸いである。

## 参考文献

岩下明裕・木山克彦・水谷裕佳・山崎幸治

2014「先住民という視座からの眺め」『図説ユーラシアと日本の国境—ボーダー・ミュージアム』岩下明裕・木山克彦編, pp. 89-96, 北海道大学出版会。

佐々木史郎・古原敏弘・小谷凱宣編

2008『北海道内の主要アイヌ資料の再検討』国立民族学博物館。

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園編

2008『北大植物園資料目録 第6号 アイヌ民族資料』北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園。

水谷裕佳

- 2015「展示品をめぐる対話―北海道と東京における〈北米先住民ヤキの世界〉展」  
『展示する人類学―日本と異文化をつなぐ対話』高倉浩樹編, pp. 83-108,  
昭和堂。

山崎幸治

- 2008「博物館と先住民研究―アイヌ・先住民研究センターが模索する可能性」  
『北方の文化―北太平洋地域の博物館と民族文化②』北海道立北方民族博  
物館編, pp. 41-46, 財団法人北方文化振興協会。
- 2009「先住民族と博物館資料―アイヌ文化展示準備のなかでの学び」『teetasinrit  
tekrukoci 先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料―受けつぐ技―』山崎幸治・  
加藤克・天野哲也編, pp. 92-97, 北海道大学総合博物館・北海道大学アイ  
ヌ・先住民研究センター。
- 2014「境界を展示する―「アイヌと境界」展における試み」『境界研究』特別  
号: 141-149。
- 2015a「映像作品をめぐる対話」『展示する人類学―日本と異文化をつなぐ対  
話』高倉浩樹編, pp. 171-198, 昭和堂。
- 2015b「残すことから生まれることを残す―博物館というフィールド」『Field+  
: フィールドプラス: 世界を感応する雑誌』14: 18-19。

山崎幸治・伊藤敦規

- 2012「おわりに―今後の展開にむけて」『世界のなかのアイヌ・アート』山崎  
幸治・伊藤敦規編著, pp. 269-276, 北海道大学アイヌ・先住民研究セン  
ター。

山崎幸治・伊藤敦規編著

- 2012『世界のなかのアイヌ・アート』北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

山崎幸治・伊藤敦規・城石梨奈編

- 2015『アイヌ・アートが担う新たな役割―米国先住民アートショーに学ぶ』北海  
道大学アイヌ・先住民研究センター。

山崎幸治・加藤克・天野哲也編

- 2009『teetasinrit tekrukoci 先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料―受けつぐ技―』  
北海道大学総合博物館・北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

山崎幸治・木山克彦・宇佐見祥子編

- 2011『アイヌと境界―グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」第4  
期展示』北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」。

Miller, Mara and Koji Yamasaki

2017 Japanese (and Ainu) Aesthetics and Philosophy of Art. In *the Oxford Handbook of Japanese Philosophy*, Bret W. Davis(ed.), 2017online, DOI : 10.1093/oxfordhb/9780199945726.013.33.

Yamasaki, Koji and Mara Miller

2017 Ainu Aesthetics and Philosophy of Art : Replication, Remembering, Recovery. In *New Essays in Japanese Aesthetics*. Minh Nguyen (ed.), pp. 139-153. Lanham, MD : Lexington Books.

# 世界のなかのアイヌ・アート

——先住民族アート・プロジェクト報告書——

## 目 次

|                                                     |           |     |
|-----------------------------------------------------|-----------|-----|
| はじめに——プロジェクトの目的と視座……………                             | 伊藤敦規・山崎幸治 | 3   |
| 目次……………                                             |           | 7   |
| 要旨集……………                                            |           | 9   |
| I 歴史——近世から現代                                        |           |     |
| 第1章 アイヌ文化——伝統と現代……………                               | 山崎幸治      | 31  |
| 第2章 アイヌ工芸の200年——その歴史概観……………                         | 齋藤玲子      | 45  |
| 第3章 アイヌ芸術の理解のために①<br>——『日本美術』の中の『アイヌ芸術』……………        | 浅川 泰      | 61  |
| II 制作・販売——作家の声                                      |           |     |
| 第4章 アイヌ伝統工芸と現代作品のバランス……………                          | 貝澤 徹      | 79  |
| 第5章 アイヌ刺繍と共に……………                                   | 小川早苗      | 93  |
| 第6章 木彫り職人と流通システム……………                               | 川上 哲      | 99  |
| 第7章 技術の伝承について<br>——二風谷と札幌での経験から……………                | 貝澤文俊      | 109 |
| 第8章 アーティストという生き方……………                               | 川村則子      | 123 |
| III 法律・作家・マーケット——先住民族アートの現在                         |           |     |
| 第9章 先住民の知的財産と『先住民の知的財産問題』……………                      | 伊藤敦規      | 137 |
| 第10章 ニュージーランドにおける<br>トイ・イホ・マオリ制作商標に関する報告……………       | 深山直子      | 157 |
| 第11章 アートのある風景の向こう側<br>——先住民族をめぐる概念の多義性とアートの可能性…………… | 海野るみ      | 167 |
| 第12章 ホビの銀細工と知的財産問題……………                             | 伊藤敦規      | 179 |
| 第13章 ナヴァホ社会における織物と伝統技術の継承<br>——「機織り」をはじめた男性たち……………  | 谷本和子      | 195 |
| 第14章 民族アートの知財戦略とブランディング<br>——選択肢としてのオープンとクローズド…………… | 内田純一      | 215 |
| 第15章 エスニック・ブランドを創る<br>——Webショップの可能性と課題……………         | 綾部真雄      | 229 |
| 第16章 アイヌ工芸品と観光について<br>——アイヌ協会の取り組み……………             | 貝澤和明      | 251 |
| 第17章 アイヌ・アートと知的財産<br>——阿寒アイヌコタンでの実践……………            | 床 州生      | 261 |
| おわりに——今後の展開にむけて……………                                | 山崎幸治・伊藤敦規 | 269 |
| IV 資料篇                                              |           |     |
| 参考資料Ⅰ, 「諸外国・地域における先住民への伝統工芸品振興政策」……………              |           | 281 |
| 参考資料Ⅱ, 「アイヌ伝統工芸品の製造・販売状況」……………                      |           | 296 |
| 参考資料Ⅲ, 「アイヌ工芸品作家アンケート」……………                         |           | 324 |

## 目次／CONTENTS

|                                                                            |     |
|----------------------------------------------------------------------------|-----|
| 序（山崎 幸治・伊藤 敦規）                                                             | 4   |
| Preface (Koji Yamasaki and Atsunori Ito)                                   |     |
| シンポジウム開会の挨拶（常本 照樹）                                                         | 12  |
| Opening Remarks (Teruki Tsunemoto)                                         |     |
| シンポジウム趣旨説明（山崎 幸治）                                                          | 14  |
| Welcome and Introduction (Koji Yamasaki)                                   |     |
| 趣旨説明「米国先住民アートショーについて」（伊藤 敦規）                                               | 18  |
| Introductory Remarks "Overview of Native American Art Show" (Atsunori Ito) |     |
| <b>報告 1 Presentation 1</b>                                                 |     |
| ロバート・ブルーニグ氏 予稿                                                             | 29  |
| 「北アリゾナ博物館ヘリテージ・フェスティバル・プログラム」                                              |     |
| Robert Breunig's proceeding                                                |     |
| "Museum of Northern Arizona Heritage Festivals Program"                    |     |
| ロバート・ブルーニグ氏 報告要旨〔文責：山崎・伊藤・城石〕                                              | 44  |
| <b>報告 2 Presentation 2</b>                                                 |     |
| ジム・イノーテ氏 予稿                                                                | 63  |
| 「ズニ・アーツ・アンド・クラフツへの博物館の貢献」                                                  |     |
| Jim Enote's proceeding                                                     |     |
| "Museum Contributions to Zuni Arts and Crafts"                             |     |
| ジム・イノーテ氏 報告要旨〔文責：山崎・伊藤・城石〕                                                 | 72  |
| <b>報告 3 Presentation 3</b>                                                 |     |
| オクテイビアス・シオウテワ氏とジム・イノーテ氏による対談要旨                                             |     |
| 〔文責：山崎・伊藤・城石〕                                                              | 85  |
| Summary of Interview: Octavius Seowtewa and Jim Enote                      |     |
| <b>報告 4 Presentation 4</b>                                                 |     |
| 貝澤 和明氏 報告要旨〔文責：山崎・伊藤・城石〕                                                   | 116 |
| Summary of Presentation by Kazuaki Kaizawa                                 |     |
| <b>コメントおよびディスカッション Comments and Discussion</b>                             |     |
| コメントおよびディスカッション要旨〔文責：山崎・伊藤・城石〕                                             | 125 |
| Summary of Comments and Discussion                                         |     |
| <b>付録 Appendix</b>                                                         |     |
| ポスター・写真 Poster and Photos                                                  | 151 |

# 社会学（社会調査プロジェクト報告）

小内 透

## I. プロジェクトの歩み

社会調査プロジェクトは、当センター発足の準備段階から、立ち上げの構想が議論されていた。当時は、北海道がほぼ7年おきに実施している北海道ウタリ生活実態調査（第7回から北海道アイヌ生活実態調査に改称）の第6回目（2006年実施）の結果が公表された直後で、その内容について、北海道ウタリ協会の関係者から疑問が出されていた。彼らの実感と調査結果がかけ離れているとの感想や調査対象者が少なすぎるのではないかと意見があった。社会学を専門にしている立場から、現代のアイヌの人たちの現状に関する独自の社会調査の提案をしたところ、北海道ウタリ協会の全面的なバックアップのもとで実施することが決まり、2008年に最初の北海道アイヌ民族生活実態調査が実現した。

2008年の調査は全道のアイヌの人々を対象として配布留め置き法により実施された。世帯調査が配布数=3,438、有効回収数=2,903、有効回収率=84.4%、個人調査が配布数=7,306、有効回収数=5,703、有効回収率=78.1%という結果であった。これほど高い有効回収率が達成できたのは、北海道ウタリ協会の全面的なバックアップのおかげである。翌2009年には、前年の全道調査で都市的な地域で最も有効回収数が多かった札幌市と農山漁村で有効回収数が最多であったむかわ町を対象にして、アンケート調査ではわからない、より深い実態を把握するため、アイヌの人々を対象にしたインタビュー調査を実施した。札幌で51名、むかわでは61名の方にお話しをうかがうことができた。その後、2014年には両地域の有権者名簿からサンプリングを行い、アイヌの人々との交流やアイヌ政策に対する評価に関して、地域住民の方々への郵送アンケート調査を実施した。これら一連の調査結果は、当センター

の北海道アイヌ民族生活実態調査報告の「その1」から「その4」として公表している。「その1」は英語版も作成している。いずれも当センターのホームページにアクセスすれば閲覧可能である。

これらの調査と並行しながら、「先住民族多住地域調査」も進めてきた。先住民族が多く住んでいる地域を対象に、実態調査を行うという内容である。2つの柱があり、アイヌ調査と比較対象としての北欧の先住民・サーミを対象にした調査から構成されている。アイヌ調査は北海道アイヌ協会（旧北海道ウタリ協会）事務局の意見を参考に、新ひだか、伊達、白糠の3地域を3年の間（2012～2014年）に順に調査対象地として、アイヌの人々のインタビュー調査と地域住民に対するアンケート調査およびインタビュー調査を実施した。一方、北欧サーミに関しては、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドのサーミ集住地の調査を2012～2015年の間にそれぞれ2年ずつ行った。アイヌ関係は4冊、北欧サーミは3冊の報告書として調査結果をまとめた。いずれも当センターのホームページから閲覧可能である。

なお、これまでの一連の調査結果をまとめ、本年3月末に『先住民族の社会学1 北欧サーミの復権と現状』と『先住民族の社会学2 現代アイヌの生活と地域住民』を刊行した。

今後は、これまで取り上げてこなかった地域を対象に、さらに調査研究を進めていく予定であり、すでに2017年には帯広市を対象にした調査を実施し、本年は旭川市の調査を行う予定である。

## Ⅱ. アイヌ調査で明らかになったこと

アイヌの人々を対象にした調査でわかった1番大きな点は、アイヌの人々が非常に厳しい経済状況におかれているということである。北海道全体で、年収が200万～300万円の世帯がモード（最頻値）になっており、生活保護率も高かった。インタビュー調査を行った5つの地域のほとんどが同様だったが、白糠はより低い世帯年収がモードであり、非常

に厳しい状況であった。経済的な厳しさは、安定的な就業形態で働く人が少ないことに起因している。パート・アルバイトあるいは臨時雇用・季節雇用・自営業主・家族従業員の比率が高いということである。さらに転職回数の多さも、我々が調査した結果の特徴の1つである。転職というのは、上昇移動の転職もありえるものの、ここで対象となった人たちの転職の結果を見ると、基本的には転職を繰り返せば繰り返すほど個人の年収は減っていく状況になっていた。その背景には、教育水準の問題もある。全体的に学歴水準は低い。高校の進学率については、若い世代であれば全国水準とあまり変わりがなくなっているものの、大学進学率はまだまだ格差があるという状況である。さらに進学をしても中退する人も多く、それはアイヌの人たちの1つの特徴になっている。

インタビュー調査の結果、こうした学歴の低さの背景に、差別の問題があることがわかった。差別の場面を整理すると、学校でのいじめ・差別、結婚をめぐる差別、職場あるいは就職時の差別に分けられる。その中で、最も多く指摘されたのは学校でのいじめ・差別であった。意外だったのは、就職や職場での差別の語りはあまり出てこなかったことである（表1）。

表1 民族に関わる被差別経験の場・きっかけ（複数回答）

| 上段=実数(人)、下段=構成比(%) |      |          |          |      |      |       |
|--------------------|------|----------|----------|------|------|-------|
|                    | 学校   | 結婚<br>恋愛 | 就職<br>職場 | 家庭内  | その他  | N     |
| 札幌                 | 14   | 2        | 5        | 1    | 2    | 19    |
|                    | 73.7 | 10.5     | 26.3     | 5.3  | 10.5 | 100.0 |
| 伊達                 | 9    | 4        | 2        | 0    | 1    | 14    |
|                    | 64.3 | 28.6     | 14.3     | 0.0  | 7.1  | 100.0 |
| むかわ                | 10   | 6        | 0        | 0    | 0    | 15    |
|                    | 66.7 | 40.0     | 0.0      | 0.0  | 0.0  | 100.0 |
| 新ひだか               | 22   | 4        | 0        | 1    | 1    | 26    |
|                    | 84.6 | 15.4     | 0.0      | 3.8  | 3.8  | 100.0 |
| 白糠                 | 27   | 8        | 5        | 4    | 1    | 32    |
|                    | 84.4 | 25.0     | 15.6     | 12.5 | 3.1  | 100.0 |
| 計                  | 82   | 24       | 12       | 6    | 5    | 106   |
|                    | 77.4 | 22.6     | 11.3     | 5.7  | 4.7  | 100.0 |

注) Nは民族に関わる和人以外の被差別経験者数。ただし、和人養子を含む。

学校での被差別経験は、進学に影響を与えていた。学歴水準の低さの原因として、すぐ思い浮かぶのは経済的な問題であるが、インタビューすると経済的な問題がないわけではないが、それ以上に「もうこんなにいじめられるんだったら、高校なんか行きたくなかった」という話や「いじめられ不登校ぎみになり、成績も悪くなって勉強が嫌いで高校進学など考えなかった」といった話がたくさん出てくる。中学校でさえも行くのが嫌だということで義務教育の途中で学校を辞めてしまった人たちもたくさんいた。白糠の場合、学校でのいじめや差別が激しく、結果として学歴が低くなり、短大を含めた高等教育に行った人は1人もいなかった。しかも学校での差別というのは、進学に影響しただけではなく、就職にも影響した。いじめられたり、差別されたりしないところに就職しようということで、アイヌの人たちが就職するところは似たようなところになっていた。たとえば、白糠あるいは伊達（ほとんどが有珠地区）では漁業に従事するアイヌの人が多かった。飲食店や建設会社であっても、アイヌの人が経営している会社にアイヌの人たちが多く雇われているパターンが新ひだかでも伊達でも見られた。おそらくいじめや差別を回避するために同じような境遇の人たちが集まる職場に就職するという傾向があったと推察できる。アイヌの人たち固有の職場、あるいは労働市場というのがあると考えられる。また、女性に固有の労働市場という点でいえば、いわゆる水商売系の職場に勤めた経験をもつ者も多かった。

これらの結果を図式的にまとめると（図1）、学校で様々な差別を経験すると進学意欲が低下して、低学歴になる。しかも、低学歴という客観的条件の下で、被差別経験があるからできるだけ差別を受けないような働き場所を求めると、アイヌの人たちが多く集まる職場になり、不安定で低賃金の職場になってしまう。これが家庭の経済的条件を規定し、その子どもの世代の学歴や職業に関して、非常に厳しい状況を再生産してしまう。こういうメカニズムがあるのではないと思われる。



図1 差別を媒介にした学歴水準と経済基盤の弱さの関連

ただし、世代が若くなるとともに被差別経験は減少していた。どの地域でも世代が若くなると「差別された経験はない」との答えが多かった。このような差別の状況の変化のなかで、アイヌとしてのエスニック・アイデンティティも変化してきている。最も重要なのは、アイヌであることやアイヌ文化に対して否定的な考え方をする者が、過去から現在・未来にかけて一貫して、減少してきているということである。かつてはアイヌである自分自身や親を恨んだという者も少なくなかったが、現在は否定的な意識を持つ人は減少している。ただし、アイヌであることに積極的な意識を持つまでに至らず、アイヌとしての意識を持たなくなったという人たちも多い。差別が少なくなり、アイヌのマイナス・イメージが低下してきているということが背景にあると思われる。

ただ、それ以外にアイヌ意識の変化に影響を与えていることとして、アイヌの血筋が薄くなってきていることがあげられる。たしかに、和人との結婚を通じてアイヌとしての血筋が薄くなるに従って、自分がアイヌだと意識する人の割合は低下している。これはある意味必然的かもしれない。他方で、アイヌの文化活動への関わり方も、アイヌとしてのエスニック・アイデンティティに影響を与えていた。とくに、かつては親の世代から「アイヌ語なんか使うな」とか「アイヌ文化なんてそんな意

味がない」と言われてアイヌ文化を捨ててきた世代があった。ところが、近年、アイヌ文化に対する評価が高まってきて、アイヌ文化の活動に積極的に関わる人たちが出てきている。地域によって違いがあるものの、白糖、むかわ、札幌、帯広では非常に積極的にかかわる人が多くなっている。

これを図式的に考えてみると、かつては差別が非常に激しく、そのような状況から逃れるために、和人と結婚しようとする者も少なくなかった。母親や祖母が娘や孫娘に対して和人との結婚を強く勧める事例も多かった。いわば生物学的な同化を進めるという戦略をとっていた人たちもいた。これによって混血化が進み血筋が薄くなった。同時に、社会的な現象として差別が弱まってくる中で、アイヌ文化の活動に参加する・興味を持つということが加わって、アイヌとしてのエスニック・アイデンティティの肯定化・無意識化が進んできている。そこで1つ特徴的なことは、若い人たちのなかに、「アイヌ文化は素晴らしい」という考え方を持つ者が増えていることである。ただし、アイヌ文化に対する考え方とアイヌとしてのエスニック・アイデンティティが結びつかなくなっているという特徴があることも事実である。アイヌだからアイヌ文化の活動に参加するのではなく、アイヌ文化は素晴らしいと思うから、興味があるから、活動するのだという考え方である。こうした意見を持つ若いアイヌの人たちがたしかに増えてきている。

最後に、アイヌ政策に対する評価に関して述べると、アイヌの人たちと一般の住民の間で、共通する部分と大きく異なる部分がある（図2）。共通するのは「差別の解消」、「アイヌ文化を守る」や「正しい理解の提供」といった政策を支持する点である。これに対し、「雇用の支援」や「教育に関する支援」を支持するのはアイヌの人たちの方が一般の住民よりもずっと多い。また、「特別な政策の必要はない」との考え方が一般の住民に強いのに対し、アイヌの人たちには弱い。アイヌの人たちと一般の住民のアイヌ政策に関する評価の違いは大きな問題である。

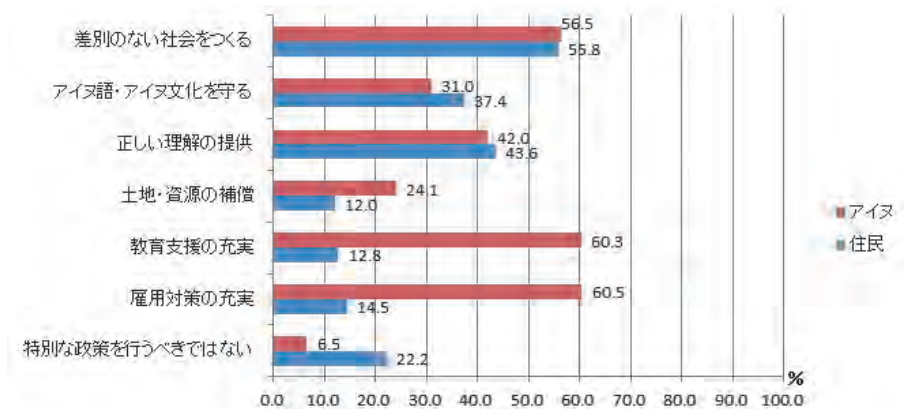


図2 アイヌ政策として重視するもの（5地域合計）

一般の住民とアイヌの人たちの政策評価の差を解消せずに、アイヌ政策をこれまでのように進めていくと、アイヌの人たちに対するバックラッシュが出てくるのは必然だと思われる。実際、そのような傾向が出ている部分もある。そのため、アイヌの人たちの歩みや現状に関して、社会に対して積極的に情報発信を行っていくことが重要になる。また、一般の住民とアイヌの人たちが参加できるアイヌ文化活動の取り組みも1つの大きな役割を果たすのではないと思われる。

### Ⅲ. サーミ調査で明らかになったこと

北欧サーミの調査は、復権の現状と課題を明らかにすることを目的として行われた。

サーミはトナカイ飼育とヨイクという独特な歌唱法の伝統音楽で知られる、北欧の先住民族であり、北欧の国家が成立する以前から、北極圏を含むスカンジナビア半島の北部に住んでいた。国家が成立し近代に入ると、サーミの集住地であったラップランドに各国が多くの国民を入植させるようになった。その過程で、サーミの人々はマジョリティから収奪や差別の対象とされ、抑圧された。しかし、第二次世界大戦後、北欧3国ではいずれの国においてもサーミの復権の動きが始まった。サーミ

の復権の動きは、1979年から本格化したノルウェーにおけるサーミ地域のアルタダム建設反対運動によって飛躍的に進展することになった。アルタダム建設はサーミ地域の自然環境を破壊し、トナカイ飼育に悪影響を及ぼすため、反対運動は国際的な支援も受けながら大きく盛り上がった。結果的にダム建設は阻止できなかったものの、サーミの権利を保障する方向で国の政策を推進することがノルウェー政府により表明された。スウェーデンやフィンランドでも独自にサーミ政策の見直しが行われ、各国の動向が相互に影響を与えながら、北欧3国ではサーミの復権に向けた政策が進められていった。

その結果、現在では、いずれの国でもサーミ法が制定され、サーミが先住民族として認定され、サーミ語が公用語として位置づけられるようになっている（表2）。さらに、北欧3国では、先住民族としてのサーミの権利を保障する具体的な方策として、サーミ議会が設置されている。サーミ議会は、いずれの国でも、国の政府から補助金を受け、それをもとにサーミの言語、教育、文化に資する政策を実行している。

各国のサーミ議会の有権者資格はサーミであると自認する18歳以上で、本人あるいは父母、祖父母（ノルウェーは曾祖父母まで）にサーミ語話者がいる者、または親がサーミ議会の有権者であった者となる。かつての同化政策によりサーミ語が使えない者も多いため、本人がサーミ語話者でなくてもよい規定になっている。ただし、フィンランドのサーミ議会では、本人や祖先がサーミ語話者でなくても、かつてサーミとして納税に関する名簿に登録されていた者の子孫であれば有権者資格が与

表2 北欧サーミの比較

|          | スウェーデン  | ノルウェー   | フィンランド |
|----------|---------|---------|--------|
| サーミ人口    | 20,000人 | 40,000人 | 7,500人 |
| 先住民族認定   | 1977年   | 1987年   | 1995年  |
| サーミ議会    | 1993年   | 1989年   | 1974年  |
| サーミ語公用語化 | 1999年   | 1991年   | 1991年  |

cf. ロシアのサーミ2,000人

注) サーミ人口はSolbakk ed. 2006:15-6; Rasmussen and Nolan 2011:37より。

えられる。

このように、いずれの国でも、サーミは先住民族としての権利の回復が進んでいる。なかでも、かつて最も激しい同化政策がとられたノルウェーにおいて、復権の動きが最も進んでいる。それは、北欧3国の中で、唯一ILO第169号条約（「独立国における先住民族および種族民に関する条約」）を批准している点に示されている。ILO第169号条約は、土地や天然資源に関する権利を含めて、先住民に補償すべき幅広い内容にわたる権利を明示している。同条約は1989年に制定され、ノルウェー政府は1990年にいち早く批准している。しかも、サーミが集住するフィンマルク地方の土地や天然資源の管理を国有企業から地域住民に移管するために、フィンマルク法を2005年に制定している。翌2006年には、フィンマルク法に基づいて、国から移管された土地の管理・運用を任務とするフィンマルク土地管理公社が設立され、サーミ議会と県議会から3人ずつ選出された計6人の理事で構成される理事会によって運営される仕組みが作られている。このような仕組みは北欧3国の中でノルウェーにしか存在していない。

さらに、ノルウェーでは、幼稚園・保育所から高校まで一般国民向けのカリキュラムと並んで、それと同等な価値をもつサーミ・カリキュラムが存在している。サーミ語の教科書も作られ、フィンマルク地方の公立学校では、サーミ語で授業が行われている。フィンマルク地方には国立のサーミ高校（一般の高校は公立）も2校存在している。さらに、同地方に、サーミ語で学べる高等教育機関＝サーミ・ユニバーシティ・カレッジが設置されている。サーミ・ユニバーシティ・カレッジはサーミのための教員養成も担い、大学院ももっている。ノルウェーでは、就学前教育から高等教育までサーミ語で学べる体制が整い、かつて強烈な同化のための手段であった教育や学校が、今では先住民族としてのアイデンティティを醸成する上で重要な役割を果たすようになっている。

一方、スウェーデンでは、かつて同化機関に他ならなかったノマド学

校のあり方が、第二次世界大戦後、徐々に変化し、1977年にはノマド学校は廃止されている。その後、そのうちのいくつかが国立のサーミ学校（小中学校）となり、サーミの子どもたちは一般の公立学校かサーミ学校を選択できるようになった。サーミ学校には、トナカイ・サーミ以外のサーミも入学することができ、サーミ語の教育やサーミ語による教育が行われている。しかし、サーミ語で学べる高校や大学はない。

ノルウェーやスウェーデンとは異なり、フィンランドにはサーミ向けの学校は存在しない。ただし、サーミ地域の公立の小中学校では、希望に応じてサーミ語の教育を受けることができる。また、就学前教育の一つの形態として、ニュージーランドのマオリが開発し世界に広まった「言語の巣」（language nest）が存在しており、サーミ語だけですぐす保育・教育が行われている。なかでも、イナリ・サーミ語の「言語の巣」は、成功例として国内外に知られるようになっている。

北欧3国では、先住民族メディアも発達している。いずれの国にもサーミ・テレビとサーミ・ラジオがあり、公共放送の一部としていくつかのチャンネルを与えられている。放送で用いられる言語は北サーミ語が中心である。ノルウェーとスウェーデンでは、サーミ語の新聞や雑誌も発行されている。活字メディアの場合、北サーミ語がおもに使われるが、若者向け雑誌では、北サーミ語の他に、ルレ・サーミ語、南サーミ語やノルウェー語、スウェーデン語が用いられている。さらに、3か国とも1つないし複数のサーミ博物館が存在し、いずれもサーミの人びとが中心になって運営されている。このほかに、ノルウェーにはサーミ劇場があり、サーミ語による演劇が行われている。

このように、北欧3国には、サーミの文化と社会を維持し発展させるための制度的基盤や社会環境が整備されるようになっている。そのため、サーミ語を使用できることは、サーミ地域で職を得る上で、有利な条件となる。サーミ議会、学校、博物館、劇団、マス・メディアだけでなく、役場を始めとした公共機関でも、サーミ語を使えることは就職す

る際に大きなメリットになる。サーミ議会も、サーミの存在感を高めるために、教育やマス・メディアなどを通して、サーミ語話者を増加させようと力を入れている。その結果、いずれの国でもサーミ語話者やサーミ議会の有権者が増加している。

しかし、北欧のサーミの人びとやサーミ社会は、いくつかの課題も抱えている。まず、サーミとそれ以外の国民の利害対立の問題がある。それは、サーミへの「手厚い」権利保障に対する批判として現れている。さらに、サーミ内部の利害対立がある。トナカイ飼育を行うサーミとそれ以外のサーミの補助金等をめぐる対立、サーミ議会内の政党間の主張の違いや主流言語としての北サーミ語と他の方言との扱われ方の違いをめぐる対立など、サーミ内部には複雑な利害対立が内包されている。また、国や地域の行政機関とサーミ社会の利害対立も軽視できない。天然資源をもとにした地域開発を行いたい行政機関と自然環境を守るため天然資源を維持したいと考えるサーミ社会との間に利害対立が生じやすい。さらに、フィンランドでは、サーミ議会の有権者資格をめぐる最高行政裁判所との対立が生じている。これらの課題を克服するためには、サーミ社会の経済的自立、国を越えたサーミの連携と他国のサーミの支援、世界の先住民族運動におけるイニシャティブをさらに発揮していくことが望まれる。

以上、北欧サーミの現状と日本のアイヌをめぐる状況を比較すると、先住民族としての文化や社会を維持し発展させるための制度的基盤や社会環境のあり方が大きく異なっている。この大きな差は、これまでの日本政府の先住民族への対応のあり方に起因していると思われる。

## 参考文献

- 小内透編著『先住民族の社会学 1 北欧サーミの復権と現状』東信堂、2018年  
同 『先住民族の社会学 2 現代アイヌの生活と地域住民』東信堂、2018年



# 文化遺産学（先住民ヘリテージプロジェクト報告）

## 先住民族文化遺産とツーリズムワーキングの10年の取組

### —歴史文化遺産活用の国際比較—

加藤 博文

#### はじめに

2008年にアイヌ・先住民研究センター（以下、センターと表記）が設立された際に中核的な活動の一つとして「ヘリテージツーリズム」が設定された。その目的は、北海道内にある歴史文化遺産をアイヌ民族の文化遺産として位置付け、ツーリズムとしての活用を探りながら、先住民族文化遺産としての位置づけと実際の活用上の課題について、国際的な取組と比較することにあつた<sup>1</sup>。

北海道の地名の多くがアイヌ語に由来することは、広く知られている。文化を理解するためには、その文化が生まれ、そして継承される空間や景観を理解することであると述べたのは、人文地理学者のトゥアンである（トゥアン 1988）。この考え方に従えば、アイヌ民族が暮らしてきた北海道の空間と景観は、アイヌ民族の生活や伝承が埋め込まれた歴史文化遺産とであるいえる。つまりアイヌ文化を理解することと、北海道の歴史文化景観を理解することは、互いに深く結びついている。しかしながら、現状では北海道の景観からアイヌ文化を理解することは容易ではない。札幌という都市景観に代表されるように、過去150年の近代化と植民地化は、北海道の歴史文化景観を変容させ、アイヌ文化は見えにくい存在となっている。北海道大学のキャンパスも例外ではない。その大地に埋め込まれているアイヌ文化は訪れる人々に意識されることは少ない。

「ヘリテージツーリズム」プロジェクトは、その後「先住民文化遺産とツーリズム」プロジェクトとその名を変えたが、引き続き北海道内で

暮らす地域の人々に、また北海道外から訪れる人々に、如何にして北海道の歴史文化遺産の紹介を通じて、アイヌ文化を理解してもらう機会を作り出すことが可能かを議論してきた。本論では、2008年からの取り組みを振り返りつつ、その課題と展望をまとめて見たい。

## 1. 議論の始まりとして知床

ワーキンググループで最初に検討課題として取り上げたのは、2005年に世界自然遺産に登録された知床半島とその登録過程におけるアイヌ民族の歴史文化遺産の評価についてであった。知床半島は1964年に国立公園に指定されて以来、豊かな自然環境が残される場所として多くの観光客が訪れる北海道を代表する観光地である。この知床半島を環境庁は、2003年に白神山地、屋久島に続く第3の世界遺産候補地として小笠原諸島や琉球諸島と合わせて候補地に選定した。世界自然遺産の登録申請に際しての評価は、国際自然保護連合（IUCN）が担い、現地調査が行われた。

この世界自然遺産への申請過程におけるアイヌ文化遺産への配慮の欠如と、遺産評価の過程にアイヌ民族の参画を認めなかった問題については、小野有五による批判的検討がなされている（小野2006）<sup>2</sup>。小野は、世界遺産への申請に際して作成された『推薦書』<sup>3</sup>の基になった『知床世界遺産候補地管理計画』（環境省ほか2004）におけるアイヌ民族への言及が極めてわずかであった点を指摘する。また世界遺産への推薦過程において環境庁や政府が、アイヌ民族と話し合う機会を持たなかったことを問題視している。

特に小野が重視した点は、「「問題」の不在性」である（小野2006：43）。小野が問題視するのは、『推薦書』や『管理計画』の内容を知ったアイヌ民族からの異議申し立てに対する環境庁の対応である。環境省は、「知床2004年に日本政府からユネスコへ提出された際に、その世界遺産地域には、常住するアイヌ民族がいないので、考慮

する必要はないと判断した」と回答したとされる（ibid）。小野はこの2004年段階の状況について、先住民族であるアイヌ民族と世界遺産との関係は「存在すらしていなかった」と総括している。

小野が指摘した課題には、三つの側面が含まれている。その一つは、知床世界遺産登録の過程で指定範囲内に所在するアイヌ語やアイヌ文化と関係する文化的景観や多くの考古遺跡の存在が遺産を構成する要素として評価されなかったことである。二つ目は、小野が指摘した世界遺産審査の過程でのアイヌ民族との協議の不在である。最後の三つ目は、世界遺産登録後の遺産の管理へのアイヌ民族の参画が考慮されなかったことである<sup>4</sup>。

一つ目に関しては、『知床世界遺産候補地管理計画』（環境省ほか2004）や『推薦書』では、指定区域内で確認したされている「周知の遺跡」の分布や数についての言及はなされていない。日本における世界遺産の登録へ向けた手続きが文化遺産を文化庁が担当し、自然遺産を環境省が担当するという縦割りの行政機構が影響した点も看過できない。しかしながらこの問題の根底には、小野が指摘したように当時の日本政府のアイヌ民族の位置づけ、「先住権」を巡る政治的判断が影響していたことは間違いない（小野2006）。

世界遺産をめぐるのは、とりわけ文化遺産に関して、専門家による地域事情や、地域住民の心情を理解しない遺産保護の姿勢に対する批判がなされてきた（太田2001, 宗田2006）。なぜ知床世界遺産登録においてアイヌ民族の歴史や地名や伝承を含めた歴史文化遺産との結びつきを検討することができなかったのであろうか。世界遺産と先住民族との関わりを議論する国際的な動向をよりよく反映させることができなかった要因とその背景を明らかにすること、そこからワーキングの議論は始まった。

## 2. 文化的景観という視点の欠如

2008年から開始された「先住民文化遺産とツーリズム」ワーキングでは、知床世界遺産におけるアイヌ歴史文化遺産の認知度を継続的に調査するため、1) 先住民考古学フィールドスクール、2) 地元のエコツアー研究会との共同展示、3) 知床ウトロ地区でのアイヌ語地名や文化的景観を活用した音声観光情報システムの開発実験、4) 知床文化遺産トレイルツアーなどを実施した。これらの取組の成果については、2013年に報告書を刊行している。2008年からの5年間の取り組みの詳細については、報告書を参照いただきたい(加藤・山村2013)。

知床世界自然遺産を訪れる観光客へのアンケート調査から明らかになったのは、知床世界自然遺産とアイヌ文化の結びつきについての情報が訪問者にほとんど提供されていないという事実であった。知床に至る道筋において目にする北海道の山や川、そして地名はアイヌ語由来のものが多く、しかし、その文化的景観を訪れる人々に意識される機会は少ない。ましてや知床世界自然遺産の区域においては、自然環境の雄大さと美しさが世界遺産たらしめる主たる価値として訪れる人々に発信されているが、そこに印されたアイヌ文化の足跡への言及はわずかである。

世界遺産はその制度としての誕生が戦争によって失われる文化財を保護するための「1907年ハーグ条約第4条」とユネスコの提唱による「1954年の新ハーグ条約」であり、当初の関心は目に見える遺産の保護に向けられていた(松浦2008, 佐滝2009ほか)。世界遺産の対象は、宗教的施設であり、古代の神殿であり、長い風雪に耐え残されてきた建造物などの遺産であった。その後1980年代に入ると、世界遺産自体の関心は発展途上国にある著名な古代遺跡の保護から、世界中の身近な多様な文化遺産へと変化していく(飯田編2015, 2017, 宗田2006)。中でも注目されたのは、町並みや農村景観であった。とりわけヨーロッパ諸国において身近な景観を世界遺産として再評価する動きが活発化したといわれている(ibid)。世界遺産の変遷を論じた宗田

好史は、このような世界遺産をめぐる議論の変化の背景にヨーロッパ先進国内で1970年代に高まりを見せた「既存の権威を否定する政治運動」があり、文化政策もその大きな影響を受けたことを指摘している（ibid：9）。

1990年代の国際記念物遺産会議（ICOMOS）での議論は、遺産の評価を地域固有の立場から再定義する取組へと移行した。そこで論じられたのは、真正性（Authenticity）、多様性（Diversity）、統合性（Integrity）であった。これらの議論に加えて、無形（Intangible）の価値が論じられるようになる。衆知のようにこの議論は、2006年の世界無形文化遺産条約として結実する（松浦2008）。

新たに作り出された遺産の概念の中でも、先住民族の歴史文化遺産との関係から重要なものに文化的景観という遺産概念がある。世界遺産委員会では、1985年から検討が始められたが、ここで指摘される人間が自然を利用して作り出した景観や自然を素材とした文化、自然と文化の融合などの特性は、広く世界各地に見いだすことができるものである。世界遺産委員会においては、選定基準としての普遍的価値が議論になった。これを受けて1992年の世界遺産委員会では、各国に「顕著な文化的景観」の暫定リストの提供依頼を呼びかけた。この呼びかけに対して早速反応が示され、国内に先住民族を抱えるニュージーランド政府とオーストラリア政府が文化的景観に関連する提案を行った。

ニュージーランド政府は、1990年に自然遺産として登録されたトンガリロ国立公園を文化遺産としても登録する提案書を提出した<sup>5</sup>。その理由は、トンガリロ山自体に先住民族マオリの伝承が残されており、地名も含めてマオリの聖地としての価値が認められるというものであった<sup>6</sup>。さらに1994年の世界遺産委員会には、オーストラリア政府から1987年にやはり自然遺産に登録されたウルル＝カタ・ジュタ国立公園を文化遺産に登録する申請がなされた。登録理由は、ウルルに数多くのアボリジニの壁画が残され、ウルル自体もアボリジニのドリームタイム

と呼ばれる神話と深く結びついている聖地である点が挙げられた<sup>7</sup>。これらのニューランド政府とオーストラリア政府による既存の自然遺産に先住民族の文化的価値を追加申請する取組みは、先住民族文化遺産の世界遺産としての評価、可視化しにくい文化的価値の評価に大きな影響を与えたといえる。

一方で、指摘しておく必要があるのは、同じ時期の1993年に日本政府が行った白神山地と屋久島の自然遺産の登録申請である。1992年からの世界遺産委員会における文化的景観をめぐる動きを日本政府が正確に理解していれば、白神山地と屋久島についても自然遺産としての価値のみではなく、それぞれの自然遺産の持つ文化的特質についても検討する機会を持つことができたであろう。さらにそこでの議論が知床世界遺産の登録申請での議論に与えた影響も少なくなかったはずである。結果的に日本国内における世界遺産に対する理解は、1992年から世界遺産委員会において議論されていた文化的景観という概念や、先住民族の文化遺産との関係性の議論の水準には及んでいなかったといえよう<sup>8</sup>。

### 3. 景観に埋め込まれた文化遺産とその語り方：先住民族ツーリズム

近年になって、やっと札幌市内各所にアイヌ文化を紹介するモニュメントなどが設置されるようになったが、海外から訪れる識者からは、引き続き札幌市内や北海道各地でアイヌ文化に触れる機会が少ないという指摘を多く受ける。しかし、本来、北海道の各地の山や川などの地名の多くはアイヌ語に由来する。

人は自然との関わる日々の生活の中で自然を素材とし、自然と文化を融合させ文化的景観を作り上げる。またその土地に暮らす人は、この作り出された文化的景観の中で自らの成長過程を体感し、得られた知識と記憶とを場所と結びつける。地名の意味についてトゥアンは、人間がその高い象徴能力によって目の前にあるものを単に視覚的描写するだけではなく、自らの経験や思考、精神を反映させ、文化と一部としてお

り、目に入る空間の特徴や景観に名前をつけること、これは人間による空間や景観を象徴化する行為の具体例であると述べている（トゥアン1988）。

札幌市内には、アイヌ語に由来する山が身近にそびえ、川が流れている。またチャシと呼ばれる砦や見張り番、儀礼空間としても利用される遺跡も残されている。足元の北海道大学のキャンパスにおいても、アイヌ語由来する名をもつ川が流れ、キャンパス内では、アイヌ民族の生活の痕跡を残す考古遺跡が発掘されている。とりわけ重要なのは、キャンパス北部の一角にある遺跡庭園内の竪穴住居址の窪みである。考古学的には、13世紀以降の歴史アイヌ期のものではないが、札幌圏に住むアイヌ民族にとっては、祖先の遺跡として位置付けられ、地域の有志の手によって毎年祖霊祭が営まれている。しかしこの場所の存在も、さらにこの場所と地域のアイヌ民族との関わりも、学内においては知られていない<sup>9</sup>。アイヌ文化は、我々の身近に息づいている。ただ我々が意識することが少ないだけである、といえよう。

ワーキンググループ内部の議論では、これまで軽視されてアイヌ民族の歴史文化遺産の記録保存と活用の方法の開発が検討された。アイヌ民族の歴史文化遺産を効果的に発信する手法として注目されたのが「ツーリズム」という手法である。本来、「ツーリズム」とは経済活動であるとともに、「最も重要な文化交流の手段」であり、「先人から受け継ぎ、次世代へ引き継ぐべき文化遺産の価値・重要性を、旅行者だけではなく、地域社会内外のあらゆる人々に、「現場での実体験」、あるいは「知識」、そして「感性面での親しみ・楽しみ」として、アクセス可能にするための手段」とであると定義される（山村2013：35）。

しかし、北海道におけるツーリズムとアイヌ民族の歴史文化遺産には問題点がある。山村高淑は、これまでのツーリズム開発が「先住民族の歴史・文化・現在に対する軽視」してきた点、その根底にある無関心を指摘する（山村2013：35）。そして北海道文化の基層には、「特にアイ

ヌ文化が存在しており、先住民族文化への理解・敬意なしに、ことさら開拓文化やロマンを語る観光プロモーションやプログラムは歴史を曲解して伝えてします危険性がある」と述べている (ibid.)。

さらに山村は、ICOMOSが1999年に策定した「国際文化観光憲章」<sup>10</sup>を引きながら「先住民族観光 (Indigenous Tourism)」の重要性を指摘する。観光学の分野においては、類似の概念としてエスニックツーリズム (Ethnic Tourism) が知られているが、先住民族ツーリズム<sup>11</sup>とエスニックツーリズムの違いは、その主体が旅行者 (ゲスト) の体験内容を重視したものか、受け入れ側 (ホスト) である先住民族側の主体性に着目しているかという点にあるという (ibid : 38)。先住民族ツーリズムの定義としては、「先住民族が管理や提供する資源面で直接関与する観光活動」 (Butler and Hinch 1996) として理解を挙げている。

先住民族文化遺産を正しく理解するためには、先住民族が主体的に遺産管理に参加することが不可欠である。すでに多くが指摘しているが、先住民族の歴史文化遺産には、コミュニティの外の訪問者から「見えにくい遺産」が多い。例をあげると北欧の先住民族サーミでは、自然に配置された岩などが聖地として彼らの信仰体系の重要な要素として組み込まれている。しかしそのような聖地と自然の景観との違いを説明がなければ外部者には理解できない。またアイヌ民族においても祈りの対象となる聖地であるチノミシリは自然の岩や山であり、当事者以外にはその存在を認識することができない<sup>12</sup>。日本においても現行の保存の枠組みや評価基準では、アイヌ民族の歴史文化遺産、内部からしか識別できない文化的景観を適切に評価することは不可能である。文化は外部の視点のみでは、本質的な重要性を見過ごしてしまうという点を忘れるべきではない。

#### 4. 誰が歴史文化遺産を語るのか? : 組織づくりと人材育成

これからの北海道において、アイヌ民族の歴史文化遺産を地域社会と

ともに保存し、活用していくために必要なものは何であろうか。山村は、ICOMOSによる「国際文化観光憲章」に基本原則として定められている「ホスト社会と先住民族コミュニティの関与」が重要であるという（山村2016）。そこには、文化遺産の保護と観光のプランニングに関与すべき三者として、1）ホストコミュニティ、2）遺産所有者、3）土地あるいは重要な場所について伝統的な権利と責任を有する先住民族が挙げられている（ICOMOS 1999/ 2002： Principle 4）。

つまり、北海道において今後、先住民族の歴史文化遺産の保存・活用には、アイヌ民族の主体的な参画が不可欠であることを示している。

このような問題の具体的な解決策として考えられるのは、アイヌ民族自らが歴史文化遺産を語るツーリズムの整備である。このような取組を実現するためには、北海道において歴史文化遺産を保存・活用するためのヘリテージツーリズムや先住民族ツーリズムについて、関係者が共通認識を持つことであろう（山村2016）。

先住民族の歴史文化遺産の保存・活用において先住民族自身が保存管理計画や、遺産活用に直接参画する理由は、他にもある。先に先住民族の歴史文化遺産の中には「見えにくい遺産」があることを述べた。知識や記憶が埋め込まれた空間や景観の中には、特定の個人や集団にとって特別な意味を持つ場所が含まれている。とりわけ信仰や儀礼など外部に対しては秘匿すべき場所や、聖地など外部の立ち入りが制限される場所も存在する。自らが持つ歴史文化遺産のどの部分を外部へ公開するのか、どの部分を公開しないのか、またどのようにして公開するのかなど個別の検討は、当事者による判断が必要である。外部から訪問する者にとっては、どのような場所が制限を受ける場所であるのかは、自らの知覚能力のみで理解することできない。やはり場所に埋め込まれた物語を理解し、意味を読み解くためには、その場所の知識や記憶を知る個人や集団から学ぶしか方法がないのである。そこに先住民族の歴史文化遺産の保存・管理への参画の必要性があるといえよう。

先住民族文化の振興、アイヌ文化の振興には、様々な人材の育成が必要である。伝統的な知識や技、工芸などには、技術伝承者の育成が不可欠であり、言語の復興のためには語学教師が必要となろう。同様にアイヌ民族の歴史文化遺産をアイヌ民族自身で保存・管理していくためにはそのための専門家の育成が必要となる。さらに保存管理計画の立案や検討に参画するアイヌ民族の専門家も必要となるであろう。

このような新たな段階を迎えている北海道において、人材育成を担う社会的役割を持った大学の責任は大きい。2019年にスタートするアイヌ・先住民学の大学院においては、国際的な比較を含めたアイヌ民族の文化遺産の専門家、先住民族文化遺産の専門家の育成が大きな責務の一つとなることは確実である。

## 参考文献

- 飯田卓編2015『文化遺産と生きる』臨川書店  
飯田卓編2017『文明史のなかの文化遺産』臨川書店  
イーフトゥアン1988（1993）『空間の経験』，筑摩書房  
太田好信2001『民族誌的近代への介入—文化を語る権利は誰にあるのか』人文書院  
小野有五2006「シレットコ世界自然遺産へのアイヌ民族の参画と研究者の役割—先住民族ガバナンスからみた世界遺産—」，『環境社会学研究』12，pp.41-56.  
加藤博文・山村高淑編2013『先住民文化遺産とツーリズム—アイヌ民族における文化遺産活用の理論と実践—』，北海道大学アイヌ・先住民研究センター，札幌  
環境省・林野庁・文化庁・北海道2004『知床世界遺産候補地管理計画』  
佐滝剛弘2009『「世界遺産」に真実—過剰な期待，大いなる誤算』祥伝社新書  
松浦晃一郎2008『世界遺産—ユネスコ事務局長は訴える』講談社  
宗田好文2006「世界遺産条約のめざすもの」，『環境社会学研究』12，pp.5-22.  
山村高淑2013「ヘリテージツーリズムと先住民族観光」，加藤博文・山村高淑編『先住民文化遺産とツーリズム—アイヌ民族における文化遺産活用の理論と実践—』，pp.35-44，北海道大学アイヌ・先住民研究センター，札幌  
Butler, R. and T. Hinch 1996 *Tourism and Indigenous Peoples*. International Thomson Business Press.

- 
- <sup>1</sup> このワーキングの立ち上げには、センターの兼務教員であった環境科学院の小野有五教授（現北海道大学名誉教授），観光学高等研究センター，そして筆者が関わった。
- <sup>2</sup> 小野は，2006年に論文において，推薦書（環境庁ほか2004）のもとになった「知床世界遺産候補地管理計画」（環境庁ほか2004）において，「「知床」の地名がアイヌ語に由来することは書かれているが，遺産地域とアイヌ民族との関わりについてはまったくふれられてはおらず，」と指摘し，世界遺産登録過程における世界遺産と先住民族とのつながりに対する政府側の認識不測を批判している（小野2006：43）。
- <sup>3</sup> 知床遺産データセンターにおいて推薦書入手できる（[http://shiretokowhc.com/data/process/200401/wabun\\_01/index.html](http://shiretokowhc.com/data/process/200401/wabun_01/index.html)）。
- <sup>4</sup> 世界自然遺産への登録に際してのIUCNによる技術評価報告書には，先住民族の参画（involvement of Indigenous Peoples）としてアイヌ民族の管理計画への参画が助言されている。
- <sup>5</sup> ニュージーランド政府によるトンガリロ国立公園のホームページによる（<https://www.doc.govt.nz/parks-and-recreation/places-to-go/central-northisland/places/tongariro-national-park/>）
- <sup>6</sup> 1990年時点でのトンガリロ国立公園の自然遺産としての選定理由は，1800年間の噴火の歴史を持つ火山群であったが，その評価過程においてIUCNは，トンガリロ国立公園の特質に先住民族であるマオリとの文化的繋がり（の強さ）を指摘している。このことはIUCN自体においてもすでに自然遺産の評価においてその土地の先住民族との繋がり（の重要性）が認識されていたことを示している。
- <sup>7</sup> UNESCOの世界遺産ホームページより<https://whc.unesco.org/en/list/447>
- <sup>8</sup> 日本における文化的景観としての文化遺産の認識は，2005年の改正文化財保護法によって規定が持ち込まれることとなった。2007年には「アイヌの伝統と近代の開拓による沙流川流域の文化的景観」が全国で3番目の重要文化的景観に選定されている。
- <sup>9</sup> ワーキングでは，北大生を対象に幾度かキャンパス内でモニターツアーを行ったが，多くの学生は遺跡庭園の存在を認識しておらず，またその空間が現在でもアイヌ民族の祈りの場となっている事実も意識したことがないと回答している。
- <sup>10</sup> 「国際文化観光憲章」（International Cultural Tourism Charter）：[https://www.icomos.org/charters/tourism\\_e.pdf](https://www.icomos.org/charters/tourism_e.pdf)

<sup>11</sup> 山村（2016）においては，“Indigenous Tourism”は「先住民族観光」と表記されているが，ここではプロジェクトのタイトルとの生合成も含め，「先住民族ツーリズム」と表記している。日本語表現での「観光」という用語には，商業主義的な印象がつきまとうことは否めない。「ツーリズム」というカタカナでの表記がそのようなネガティブな印象を必ずしも薄めるとは限らないが，少なくともここでは，ツーリズムの経済的行為のみではない知の伝達，学習という意味を強める意味でも「ツーリズム」と表記した。

<sup>12</sup> チノミシリが外部評価者から認識されずに開発行為により大きく破損した事例としては，「二風谷ダム建設差止訴訟」の事例が知られている。

# 考古学（研究拠点形成事業【先端拠点型】報告）

アイヌ考古学から先住民考古学へ

—これまでの10年，これからの10年—

加藤 博文

## はじめに

「アイヌ研究」には長い歴史がある。黎明期の日本の人類学と考古学は、まだ未分化で幅広い人類に対する関心を持っていた（寺田1981、坂野2005など）。その研究対象は、「古物の事か日本人種の事が都鄙風俗の異同の事」（坪井1886：2）とあるように文化総体とそれを作り出した人々に向けられていた。坪井正五郎が日本国家が多民族で構成されていることに自覚的であり、常にエスニック・ジャパニーズとしての「日本人」とアイヌ民族との関係に強い関心を持っていたことは、指摘されている通りである（三上2015、川村2013など）。

しかし、従来の「アイヌ研究」に当事者であるアイヌ民族の声が反映されたり、アイヌ民族が自ら研究に参画する機会は、ほとんど存在しなかった。他の先住民族と同様に、「アイヌ研究」は当事者不在の他者による研究として展開されてきた（加藤2008、Kato2017）。

先住民族の権利回復にむけた国際社会の動きは、すでに1960年の「アフリカの年」以降の脱植民地化の動きとともに始まる。1970年代から80年代にかけて世界各地で先住民族による権利回復運動が活発化し、国連を中心とした組織的な取組が進められた。

しかしながら、衆知のように日本政府がアイヌ民族を先住民族と公式に認め、アイヌ政策を先住民族政策として位置付けたのは、2008年とかなり遅い。北海道大学にアイヌ・先住民族研究センター（以下、センターと表記）が設立されたのは、2007年4月であり。センター発足後には、同年9月に「先住民族の権利に関する国際連合宣言」（以下、権

利宣言と表記)が日本政府も賛成票を投じる中で採択され、翌2008年には、衆参両院の本会議において「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が全会一致で採択されている。アイヌ政策が大きく動きつつある中で発足したセンターであったが、2008年にこれまでの「アイヌ研究」を多領域から総括し、これからのあるべき取組を議論する目的でシンポジウム「アイヌ研究の現在と未来」が開催された。そこでの議論は、歴史学から考古学、形質人類学、法律・政治学、文化人類学まで多岐にわたった。

本論では、このシンポジウムでの議論を踏まえ、その後の10年間におけるアイヌ民族と考古学との関係性について、生じた変化と残された課題を概観したい。

## 1. 先住民族にとっての考古学

考古学は、特定の土地や地域に暮らした（または暮らしている）集団の生業経済や信仰体系、社会組織をその集団の物質文化や彼らが自然環境との相互作用によって作り出した文化的景観に基づいて復元する。考古学では、復元された生活様式の総体を「考古学文化」と名付け、その歴史的動態を編年作業によって描き出してきた。

考古学が対象とする遺跡や出土資料には、少なくない数の先住民族の祖先が残した歴史文化遺産が含まれている。1986年にピーター・アッコ（1938-2007）を中心に設立された世界考古学会議（以下、WACと表記）では、設立当初より活動の中心の一つに考古学と先住民族との関係を掲げ、先住民族のメンバーを学会内部に含め、共に議論を展開させてきた。この姿勢は、2016年に京都で開催されたWAC8においても明確に示されている。

上述したように日本でも人類学や考古学は日本列島の集団形成史に関心もち、アイヌ民族とその文化の形成を重要な課題の一つとしてきた（埴原ほか1972など）。日本列島の集団の多様性については、埴原和

郎が「日本列島人の二重構造モデル」によって3つの集団の形成史モデルを提示している（Hanihara 1991）。また日本列島の文化的多様性については、藤本強が列島の文化基盤を大きく「中の文化」，「北の文化」そして「南の文化」に三分し，説明するモデルを提示している（藤本 1988）。

しかし，1980年代から90年代に国際社会で見られた先住民族と考古学との関係性を再検討する動きは，同時代の日本考古学において見られなかった。1980年代の北海道考古学では，宇田川洋によって本州の中近世段階の遺跡や出土資料を「アイヌ考古学」として捉える提起がなされたが（宇田川1980）<sup>1</sup>，研究者側の議論に終始し，アイヌ民族の研究の参画にはつながらなかった。

この1980年代初頭には，アイヌ民族側から人類学研究の目的で発掘収集されたアイヌ民族の祖先の遺骨が多数，北海道大学医学部に保管されていることが明らかとなり，保管管理への批判，本来の埋葬地域への返還を求める動きが起き，新聞報道も含め大学を巻き込んだ大きな社会問題となっている（北海道大学2013）。しかしながら，「アイヌ考古学」が先住民族と考古学との関係を自らの研究課題の一つとして，この問題に向き合う動きは見られなかった。また問題の当事者である北海道大学に所属する研究者からもアイヌ民族からの要求に対する意見表明は示されなかった。

1980年代は北海道の考古学にとってもう一つ大きな出来事が生じている。「二風谷ダム建設差し止め訴訟」である。ダム建設に先立って実施された考古学調査が明らかにした調査成果は，地域のアイヌ社会のアイデンティティ形成と裁判の判決へ大きな影響を与えた（萱野・田中1993）。二風谷ダム裁判は，国の組織の一つである札幌地方裁判所が，ダム建設に伴う国の土地収用の手続きの違法性と，アイヌ民族を先住民族として認め，その文化享有権を認定した画期的な判決であった。しかし，裁判において考古学が先住民族の権利回復に大きく寄与できる

可能性が示唆されたにも関わらず、先住民族と考古学の関係性が考古学会の内部で自らの課題として広く共有されることもなかった<sup>2</sup>。

海外での先住民族と考古学の関係性をめぐる議論では、考古学が果たすべき地域社会への説明責任が重視されてきた。考古学資料はどのような歴史の文脈において語られているのか。資料を提供する地域社会（ソースコミュニティ）との関係。歴史は誰によって語られ、また誰のために語られているのか。これらの課題がこれからの考古学の中核的課題として提起された（Smith and Wobst 2005）。クレア・スミスとマーチン・ウォブストは、先住民族と考古学の関係を論じるにあたり、まず脱植民地化の文脈から論じている。彼らは「本質的に考古学は植民地主義者の取り組みである」という認識を示す（ibid： 5）。その理由は、従来の「考古学が西洋文化の価値観を基礎において、一般的に実施されている」こと、「精神性よりも物質性を、宗教性よりも科学性を尊重し、考古学的な実践が強固に西洋式の世界観にとどまっている」<sup>3</sup>ことを挙げている（ibid.： 5）。このような指摘と批判は、北海道島における考古学にも当てはまる。北海道考古学でも日本文化の起源探しの物語の一部として、日本史の辺境史として、日本考古学の地域性の一部として資料の構築が進められてきた。そこでの語りは、日本人研究者による一方向的な語りであった。研究に歴史文化遺産の当事者である先住民族アイヌの世界観が反映されたり、アイヌ民族自身の研究への参画を図るための仕組みづくりは、積極的に進められてこなかった。

## 2. 2008年シンポジウムで提起された課題

センターが主催した2008年のシンポジウムで考古学については、これまでの「アイヌ考古学」の取り組みとその課題について報告がなされた。報告者である佐藤孝雄は、「アイヌ考古学」の研究領域としての確立過程において、渡辺仁の「クマ祭文化複合体」論（渡辺1972）と「アイヌ・エコシステム」論（Watanabe 1973）が果たした影響の大

きを指摘した（佐藤2008）。また渡辺の提唱した「土俗考古学」という方法論が、後に続く宇田川らの「アイヌ考古学」における民族考古学の方法に継承されたことにも言及している（ibid）。一方で佐藤は、渡辺の研究目的が狩猟最終民研究にあり、アイヌ社会を「狩猟採集民の生活を読み解くためのリファレンス」とみなしていた点を批判する（ibid： 77）。そして1990年代は、新たな資料の蓄積を受けて天野哲也（天野1995）や深澤百合子（深澤1995）が渡辺の古典的モデルの見直すを進めた時段階であるとする。さらに渡辺モデルを批判的に継承し、新たなアイヌ史モデルを提示した事例として瀬川拓郎の取組みを紹介した（瀬川2000, 2007）。

佐藤は、これからの「アイヌ考古学」にとって重要な課題として、アイヌ民族と考古学との関係に言及している。佐藤は、時として考古学者が資料を客観的に評価し、解釈する過程で提示する「アイヌ像」や「アイヌ史」がアイヌ民族からどのように受け止められているのか、そこに考古学者とアイヌ民族との間に歴史観の齟齬が生じやすいか、と問いかけた（佐藤 2008： 82）。同じ文脈から考古学者がアイヌ民族の歴史を語る際に当事者であるアイヌ民族の存在を意識すべきと主張する瀬川の指摘も引用し（瀬川2007：258），これからの「アイヌ考古学」が向き合うべき重要な課題として提起したのである。

筆者は、佐藤の報告を解説する中で、佐藤が指摘するアイヌ民族と考古学との関係を重視し、その課題を掘り下げた（加藤2008）。そこで指摘したのは、なによりもこれらの課題について研究者自身が自覚的であるかどうかという点である。具体的には、「アイヌ考古学」がどのような歴史観を構築してきたのか、研究者がアイヌ民族の歴史を語る際の射程に今を生きるアイヌ民族へ及ぼす影響について考慮しているかどうか、またアイヌ民族が研究者や研究をどのような眼差しで見つめているのか、という点である（ibid）。海外での「先住民考古学」という新たな研究の動きを紹介しつつ、先住民民族とその歴史文化を単に研究の対象

として扱うのではなく、先住民族と共に研究することを目指す取組み、さらに先住民族自身による研究の実践を支援する取組みの重要性を提起した。今後の研究課題としては、文化遺産の知的財産権の問題や文化財返還を検討することが重要であり、社会的協約として研究倫理を整備し、その運用の仕組みを構築していくことが不可欠であることも指摘した。

アイヌ民族の研究への参画やアイヌ民族との共同研究の必要性については、シンポジウムの中で、考古学以外の研究者からも発言があった。榎森進は、これからのアイヌ史研究が研究者の関心のおもむくままの研究ではなく、一般のアイヌの人々との共同研究が必要であると力説している（榎森2008）。ここで傾聴すべきは、アイヌ民族の登壇者からの発言である。過去の研究の影響による研究に対する拒否感が今だに存在すること、調査研究がアイヌ民族側のプラスになった実感は少ないという指摘（貝澤2008）、研究の客観性や中立性の名をもとに行われる暴力の可能性に注意を喚起する指摘（新井2008）がなされている。また野本正博氏は、大方の研究者は伝統文化にのみ関心を寄せて、現代を生きるアイヌの姿に無関心であること、アイヌ民族が単なる研究協力者としてではなく、アイヌ民族自らが研究の主体となって振興すべき文化の内容を吟味すべきと主張し、またアイヌ民族は諸問題を解決するための手段として研究者を必要とするが、「お付き合いをする研究者を自分たちで選ぶこともできる」と研究者の姿勢に釘をさしている（野本2008）。

### 3. 先住民族と考古学の関係性への反応：失われた社会？

2008年のシンポジウムで提起された「アイヌ考古学」の課題点に対しては、その後いくつかの反論が示された。それらの各論の主張からは、改めて北海道での「アイヌ考古学」が当事者不在で進められている現状を読み取ることができる。

最初に大井晴男による批判を取り上げる（大井2011）。大井の批判

は、筆者の2009年の先住民考古学に関する論考に対する批判であり、直接2008年のシンポジウムでの議論に対するものではないが、批判の内容が本論と直接関係している。大井は、「先住民考古学」という手法が先住民族自身が参加する考古学研究を目指すのであれば、「・・北海道の現状から考えれば・・いちじるしく困難であること・・ほとんど不可能に近い・・」と主張する（大井2011：88）。その理由として、近代化が「アイヌ族の『地域社会』の存続を困難にし、あるいは、不可能にし」、それにより「現時点で、北海道の最後の『アイヌ族の『地域社会』が失われてからすでに100年余が経過し・・いわゆる『アイヌ系住民』は、『日本人』として、その『地域社会』の一員として、生きることを強いられてきた」（ibid：88）ことをあげる。

しかし、大井のように伝統的なアイヌ社会が既に失われていることから、北海道の歴史文化遺産の当事者が不在と言い切る論調は適切ではない。大井は、植民地化される以前の「純粋な」伝統をもつアイヌ社会のみを歴史文化遺産の正当な後継者社会としてみなしているが、そのような理解は、今を生きるアイヌ民族の存在を無視するものである。あらゆる社会は、変動する歴史の中で変化しつつあり、集団のアイデンティティもまた固定化したものでない（川田1997）。エスニシティとは、政治的・社会的に影響を受けて変化していくものである（Birth 1969, スコット2013）。なによりも先住民族の固有の文化は、政治的圧力によって一方的に奪われたものであり、彼らにはそれを回復する権利がある。さらに重要な点は、先住民族としての規定は自己規定によってなされるものであり、第三者がその先住民族が失われたかどうかを決めるものではないということにある。研究者側からこのような発言が繰り返されている間は、先住民族側からの研究者への不信感は消えることはないであろう。

また2008年のシンポジウムでの議論について直接言及したものとして小野による論評がある（小野2014）。小野は、筆者、佐藤の論考に

瀬川の論考（瀬川2007, 2010）を加え、従来の「アイヌ考古学」とは異なる見解として、「アイヌ民族史論」<sup>4</sup>として位置付けている（小野2014：117）。小野は、北海道において「アイヌ民族を主体にとらえるのではないが・・・国家史の枠としてでない、地域主体の立場から北海道の遺跡を読み解こうとする視点」がすでに存在していると述べる。そしてアイヌ民族による、アイヌ民族のための、アイヌ民族とともに行うアイヌ民族史の構築は、「アイヌ民族だけでなく、非アイヌ民族を含めた「地域のため」の歴史に変えていく必要があるのではない。またその語りかける対象も「地域に対して」でなければならぬ」と述べる（ibid）。小野は、「北海道における遺跡に対する市民の反応は、一部を除けば関心が低い。そこには遺跡はアイヌのもので、自分達とは縁のないものという意識が根強く影響しており。この傾向は「アイヌ文化期」の遺跡において最も顕著となる」（ibid）という。確かに現在の北海道においてアイヌ民族は、圧倒的に少数者である。我が国の現行の文化財保護法は、先住民族の文化遺産に関する特別の権利を明記していない。よって先住民族の歴史文化遺産であっても、地域社会を構成するすべてのステークホルダーがその価値と意義を理解することが大切であるという主張は間違っていない。しかしながら、日本政府が賛成票を投じた「権利宣言」には、考古遺産を含めた先住民族の歴史文化遺産の権利が明記されている。また先住民族の歴史文化遺産の管理保全への関与については、多数者側がこれを理解する必要があるとも述べられている。

小野は、大井の主張を引用して、「アイヌ民族史がアイヌ民族のためだけの歴史として描かれるのであれば、それは大井のいう『アイヌ民族の現状に対する同情、ないし止むこととない差別への負い目から生まれる』（大井2013：90）研究とみなされても仕方がない」という（小野2014：118）。しかし、筆者らの主張の背景は、「アイヌ民族の現状に対する同情」や「止むことのない差別への負い目」ではない。むしろ

過去の研究のあり方に対する批判的な検証の必要性である。過去の「アイヌ研究」は、大井が述べるようにアイヌ民族を失われた存在として扱ってきた。アイヌ民族の歴史は、アイヌ民族を主体としたものではなく、日本古代史や先史狩猟採集民研究のカatalogとして研究されてきた。

アイヌ民族に限らず、世界の先住民族にとって近代化の過程は、自らの文化伝統を自らの意思に反して奪われた苦渋の歴史である。その過程において研究もまた先住民族の価値観や世界観に配慮することなく、研究資料を収奪し、一方的な歴史観を積み重ねてきた。被植民地経験を有する先住民族社会からは、そのような歴史をもつ研究に対して、強い不信感が幾度となく示されてきた。

先住民族とともに研究するという姿勢は、実は、容易に実現できるものではない。新たな関係の構築には、まず過去の研究のあり方を批判的に検証し、これまので先住民族と研究との関係を真摯に反省することが不可欠である。そこからしか新たな関係が生まれないことを、研究者は理解すべきである。

#### 4. これまでの10年とこれからの10年

2008年のシンポジウムから10年が経過した。当時と比べて、アイヌ民族の歴史について関心が高まってきていることは確かである。アイヌの歴史を冠した書籍もこの10年間で数多く出版された。一方で、当時提起された課題は引き続き課題として残されたままである。またアイヌ民族が歴史文化遺産の調査研究に参画する機会は、どのくらい増えたのであろうか。考古学の世界では、北海道の歴史文化遺産を先住民族の歴史文化遺産として理解する動きが進んだのであろうか。

「権利宣言」に明記された先住民族の権利、考古遺産を含む自らの歴史文化遺産を管理・保存・活用する権利について、まだ我が国では十分に理解されてはいない。一方で今日、アイヌ民族側からは、先住民族の

歴史文化遺産としての考古遺跡や、研究目的で不法に取得された出土遺骨の返還問題など、文化遺産の所有権や知的財産権に関する関心は高まりをみせている。このような社会的な動きに対して研究者側からの積極的な発言は見られない。自らを取り巻く課題や社会的責任に対する意識の低さは、アイヌ民族から研究者への不信感という形で表面化してきている。

考古遺産をアイヌ民族の歴史文化遺産として法的に位置付けることは、さらに時間を要するであろう。しかし、歴史文化遺産に直接関わる考古学は法制度とは別にアイヌ民族と考古学の関係を再構築することができる。そのためには研究のすべての過程、すなわち計画・実施・評価・保存活用に地域のアイヌ民族が参画できる機会を設けることである。また研究倫理を整備し、研究実施の可否を検討する過程にもアイヌ民族が参画できる仕組みを構築することである。これらは法整備を待つことなく、研究者が自らの意思でなすことができる取組みである。さらにアイヌ民族の研究者を育成することも研究者社会の重要な役割であることはいうまでもない。

次の10年が経過したとき、北海道の歴史文化遺産が先住民族の歴史文化遺産として研究者とアイヌ民族から位置付けられる状況を作り出していく責任が我々には課せられている。

## 参考文献

- 天野哲也1995「アイヌ文化の形成」『展望考古学』，pp.232-239，考古学研究会  
新井かおり2008「自己を省察するための当事者性」『アイヌ研究の現在と未来』，  
pp.59-64，北海道大学出版会  
大井晴男2011「『先住民考古学』への疑問，あるいは、『アイヌ考古学』の現状と  
課題」『北海道考古学』第47号，pp.87-95.  
小野哲也2014「特集：北海道考古学の回顧と展望 アイヌ文化期」『北海道考古学』  
第50号，pp.113-122.  
宇田川洋1988『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター

- 宇田川洋1980『アイヌ考古学』教育社
- 榎森進2008「これからのアイヌ史研究にむけて」『アイヌ研究の現在と未来』，  
pp.20-59，北海道大学出版会
- 貝澤和明2008「アイヌ研究者との対話と協力」『アイヌ研究の現在と未来』，  
pp.131-135，北海道大学出版会
- 加藤博文2007「考古学文化とエスニシティ」，前川要編『北東アジア交流史研究—古代と中世』，497—509頁，塙書房
- 加藤博文2008「アイヌ研究において考古学の果たすべき役割は何か」『アイヌ研究の現在と未来』，pp.100-114，北海道大学出版会
- 加藤博文2009「先住民考古学という視座—文化遺産・先住民族・考古学の課題—」『北海道考古学』第45号，pp.31-44
- 加藤博文2014「考古資料から民族はどう描けるか」『考古学研究会60周年記念誌 考古学研究60の論点』，pp.93-94，考古学研究会
- 萱野茂・田中宏1993『二風谷ダム裁判の記録—アイヌ民族ト<sup>ン</sup>叛乱』三省堂
- 川村伸秀2013『坪井正五郎—日本で最初の人類学者』弘文堂
- 坂野徹2005『帝国日本と人類学者—1884-1952年』勁草書房
- 佐藤孝雄2008「＜アイヌ考古学＞の歩みとこれから」『アイヌ研究の現在と未来』，  
pp.72-93，北海道大学出版会
- 瀬川拓郎2000『アイヌ・システムの考古学』北海道出版企画センター
- 瀬川拓郎2007『アイヌの歴史—海と宝のノマド』講談社
- スコット，ジェームス，C. 2013『ゾミア—脱国家の世界史』みずず書房
- 坪井正五郎1886「本会略史」『東京人類学会報告』1，pp. 1-3
- 寺田和夫1981『日本の人類学』角川文庫
- 野本正博2008「アイヌにとっての先住民研究」『アイヌ研究の現在と未来』，  
pp.236-241，北海道大学出版会
- 埴原和郎・藤本英夫・浅井亨・吉崎昌一・河野正道・乳井洋一1972『シンポジウム アイヌ—その起源と文化形成』北海道大学図書刊行会
- 深澤百合子1995「エスノヒストリーとしてのアイヌ考古学」『北海道考古学』第31号，pp.271-273
- 藤本強 1988『もう二つの日本文化：北海道と南東の文化』東京大学出版会
- 北海道大学2013『北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書』国立大学法人北海道大学
- 三上徹也2015『人猿同祖ナリ・坪井正五郎の真実』六一書房

渡辺仁1972「アイヌ文化の成立—民族・歴史・考古諸学の合流点」『考古学雑誌』  
第58巻第3号：47-67

Barth F. 1969. Ethnic Groups and Boundaries : The Organization of Cultural Differences. Universitets Forlaget, Oslo. (「エスニック集団の境界」青柳まちこ編・監訳 1996『「エスニック」とは何か』新泉社. pp. 23-72)

Kato H. 2017 The Ainu and Japanese Archaeology : A Change of perspective, *Japanese Journal of Archaeology* Vol. 4, No. 2.

Hanihara K. 1991 Dual Structure Model for the Population History of the Japanese, *Japan Review* No.2, pp.1-33.

Smith C. and H.M. Wobst 2005, Decolonizing archaeological theory and practice, *Indigenous Archaeologies-Decolonizing Theory and Practice*, Routledge

Watanabe H. The Ainu Ecosystem : Environment and Group Structure, University of Washington.

---

<sup>1</sup> 宇田川の提唱した「アイヌ考古学」は、渡辺のアイヌ社会論をベースにしている。しかし、具体的な資料の読み方において、宇田川の「アイヌ考古学」は渡辺のものと同じ視できない。個々の物質文化資料の呼称もアイヌ語本来の名称を重視し、アイヌ文化の文脈、世界観から社会構造や物質文化の体系を読み解こうとする試みがなされている。この意味において宇田川の研究は、それ以降の「アイヌ考古学」とは異なっており、よりアイヌ民族側の視点に立っている。非先住民による先住民考古学の先駆けとして改めて再評価したいと考えている。

<sup>2</sup> 裁判を通じて吉崎昌一や大塚和義がアイヌ民族にとっての考古遺跡を含む歴史文化遺産やチプサンケやチノミシリの空間としての重要性を意見陳述としている。その陳述はアイヌ民族の先住民としての文化的享有権をまとめた判決文に大きく反映された(萱野・田中1993)。

<sup>3</sup> 英語圏では、従来の知の体系の基盤における西欧中心主義の影響を強調するが、ここでいわれる「西洋文化」や「西洋式の世界観」を「日本文化」や「日本人による世界観」に置き換えれば、その関係が先住民と主流社会との間に見られる普遍的な関係であることが理解できよう。

<sup>4</sup> 小野は、筆者らがアイヌ民族を歴史を超えて連続する「あるものとしての民族」と主張していると理解しているが、それは誤解である。筆者に関していえば、先住民の定義は、マルチネス・コーボによる定義(Cobo1983)に従うべきであり、重要なポイントは、植民地化以前に自身のテリトリーの中で発達してきた社

会との歴史的連続性を有すると考えている（加藤2007）。またバルトを引用するまでもなく、実態としての集団のアイデンティティは、血や伝統によって構築される「民族」意識よりも、時代ごとの政治的、社会的影響を受けて、変化するもの（Birth1969, スコット2013）と理解している。アイヌ民族は、今を生きる先住民族として、彼らの祖先から受け継いだ歴史文化遺産の権利を主張しているのである。



# おわりに：アイヌ民族と北海道大学

長谷川 晃

本年の2月に北海道大学アイヌ・先住民研究センターが設立10周年を迎え、この間の活動とその成果を反映した充実した形で記念シンポジウム「アイヌ・先住民研究の“これまで”と“これから”」を行うことができた。これは、全ての関係者の方々のご尽力、とりわけこのセンターの創設に踏み切られた北海道大学元総長・中村睦男先生、そしてこのセンターの10年間を率いてこられたセンター長・常本照樹先生のご努力の賜物である。改めて、この間のセンターの活発な活動とその多くの成果に対して心から敬意を表すると共に、お祝いとお慶びを申し上げたい。

まず、個人的な感慨に及んで恐縮ではあるが、一言だけ触れさせていただくなれば、私の専攻は法哲学で、必ずしもアイヌ民族に関する研究を専門とするわけではないのだが、法学研究科の同僚である常本先生とのご縁があって、アイヌ・先住民研究センターの設置準備からお手伝いをし、また設置後は昨年まで9年間兼務教員として運営にも参加させていただいた。加えて、その関係で、北海道庁等からの依頼に基づき、委員会等でアイヌ民族の方々ともお話をさせていただくという機会もいくつかあった。また、北大における私自身の法哲学の授業やセミナーなどにおいても、ささやかではあるが、折に触れてアイヌ民族にかかる権利問題について解説をさせていただき、学生や留学生のイントロダクションを図ったりしてきた。上記のシンポジウムで配布されたこの10年間のセンターの活動の資料を見ると、その活動の経過が非常によく分かることもあり、自己の経験も重なって、たいへん大きな感慨を覚える次第である。

そのような中で、この間のセンターの着実な発展を目の当たりにしてきた私にとっては、10年前、必ずしも十分に見通しがきいていたとは

言えない中で旅立ちをしたセンターが、現在のような形でアイヌ民族の人々との共生の道を探るための確固たる学術フォーラムへと成長したことが本当に意義深く感じられる。そして、この記念の機会に他ならぬ北大法学研究科の大先輩・中村先生や畏友である常本先生、そして上記のシンポジウム参加の皆様方に北大を代表してお祝いを申し上げることができたのは全くもって望外であり、光栄の次第である。

アイヌ・先住民研究センターの多面にわたる学術的活動の成果は、記念シンポジウムにおいて如実に示されており、参加の各位はそのことを大いに感得されたところと思われ、私がもはや繰り返すまでもないことであろう。国内外の研究者やアイヌ民族の方々からの声も含めて、極めて多角的な構成の中、記念シンポジウムにおいては学術面での多面的で着実な成果と、アイヌ民族の方々との種々の交流の深まり、そして、そこから見えてくる新たな学術的課題の明確化などがなされた。そして、そこには真摯な探求心にあふれてセンターに集う教員研究者の方々はいうまでもなく、民族の尊厳を守り、歴史と未来に真剣に向き合いながら現在を生きんとするアイヌ民族の方々の貴重な協同の軌跡を見出すことができるであろう。このような協同は、大きな歴史の中ではまだようやく始まったばかりかもしれない。しかしながら、それは、この国においては唯一無二の試みであり、現在の北海道大学が大きな誇りとするところでもある。

確かに、アイヌ民族の歴史や社会、そしてその未来にかかる研究や教育、そして関連した文化的な活動などが全て順調に進展しているとはいい切れない面もまだあることは否めないところがあって、北海道大学にとっても様々な課題がある。すでに中村元総長におかれては、北海道大学がアイヌ民族の尊厳への適切な配慮を欠いていたことを真摯に反省し、それらの経験を深く記憶に刻み、その上で今後の方向を検討し、責務を果たしていくと表明してくださっているが、現在の名和豊春総長や私を含む全学執行部もそれを引き継いで、そして深めていくことが重要

だと考えている。北海道大学としては、北大人全体がそれぞれの立場でこれらの課題を受け止め、向き合い、それぞれの答えを出していくこと、また大学全体とアイヌ民族との共生の促進・進化の見地から関連するさまざまな学術的な活動を理解し、またサポートをしていくこと、そして、自らも可能な社会实践を積み重ねていくということが、これからも北海道大学、そしてアイヌ・先住民研究センターにとっての大きな挑戦であり続けると考えている。

その一方で、例え一歩ずつではあるとしても、北海道大学、そしてアイヌ・先住民研究センターは、アイヌ民族を取り巻く様々な課題に対する解決の試みを誠実に重ねてきているところでもある。特にアイヌ・先住民研究センターの10年はまさにその最も重要な一環であり、このことが、このセンターがただ10年間にわたって学術的活動を展開してきたという事実にとどまらない、次の5年、そして、さらには新たな10年に向かう極めて重要な意義を有するゆえんだと私は思っている。これからも北海道大学はこのアイヌ・先住民研究センターの活動を大学の基軸の一つとし、その活動をサポートしながら、アイヌ民族の人々の多年に渡る労苦に思いをいたし、誠意を持って、アイヌ民族の人々に寄り添いつつ、北海道に位置する我が国の基幹総合大学という学術の府にふさわしい形で責任を持ちながら、その役割を果たしてゆく。



## 資 料

# アイヌ・先住民研究センターの活動 【平成19～29年度】

- |               |          |
|---------------|----------|
| 1. センターの年度別活動 | p116～154 |
| 2. 研究拠点形成事業活動 | p155～163 |
| 3. 展示活動       | p164～176 |
| 4. 出版物        | p177～180 |
| 5. 授業提供（北大）   | p181～187 |
| 6. 海外学術交流協定   | p188～189 |

## 1. アイヌ・先住民研究センターの年度別活動【平成19～29年度】

### 平成19年度活動実績

#### ■公開講演会

- ・「マオリの権利回復運動の過程とその課題：ナイトフの事例から」  
2007年6月19日（火） 18：30～20：00  
スティーブン・ケント〔ニュージーランド、リンカーン大学、博士課程〕
- ・「アイヌ語のこれから」  
2007年6月23日（土） 13：30～15：30  
中本ムツ子〔千歳アイヌ文化伝承保存会会長〕
- ・「ハワイ先住民に関する最近の法律問題」  
2007年7月14日（土） 14：30～16：30  
マーク・レヴィン〔ハワイ大学ロースクール准教授〕
- ・「二風谷ダム判決とその後—訴訟の舞台裏とこの10年の動き—」  
2007年7月24日（火） 18：00～20：00  
田中 宏〔弁護士・北海道大学法科大学院教授〕
- ・「現代によみがえったベルツのアイヌ沖縄同系論」  
2007年9月7日（金） 18：00～20：00  
斎藤成也〔国立遺伝学研究所教授〕
- ・「先住民族アートの模倣問題—アメリカ先住民族ホピのジュエリーを事例として—」  
2007年10月27日（土） 14：30～16：30  
伊藤敦規〔東京都立大学大学院社会科学研究科 博士課程〕
- ・「「先住民族の権利に関する国際連合宣言」の採択とその意義」  
2007年11月17日（土） 14：30～16：30  
常本照樹〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター長〕
- ・「言葉を再び活性化するために役立つオンライン資料—ハワイ語の事例を中心に—」  
2007年11月30日（金） 18：00～20：00  
塩谷 亨〔室蘭工業大学工学部准教授〕
- ・「保護法制定前夜のアイヌ民族：十勝アイヌと共有財産」  
2008年1月12日（土） 15：00～17：00  
井上勝生〔北海道大学大学院文学研究科 教授〕
- ・「台湾原住民法制の現状と課題：原住民の人権にかかわる三つの訴訟を中心に」

2008年2月2日（土）15：00～17：00

呉 豪人〔台湾・輔仁大学副教授〕

- ・「文化資源活用とコミュニティ多民族・多文化な地域づくりに向けて―」

2008年2月8日（金）18：00～20：00

パオラ・ファリーニ〔ローマ大学教授〕

- ・「アイヌ民族、琉球人、そして日本人：日本列島における形態と生活誌の多様性」

2008年2月15日（金）18：00～20：00

石田 肇〔琉球大学医学部教授〕

#### ■夏季ワークショップ「台湾・原住民族法ワークショップ」

2007年8月21日（火）9：30～17：00

林修澈 教授〔国立政治大学原住民族研究中心〕

王雅萍 講師〔国立政治大学原住民族研究中心〕

黃居正 副教授〔国立清華大学科技法律研究所〕

#### ■冬季シンポジウム「アイヌ文化振興法の過去・現在・未来」

2007年12月15（土）～16日（日）

キャロル・エリック（SRI 財団）

メロディ・カピリアロハ・マッケンジー〔ハワイ大学ロースクール先住民法研究センター長〕

ジョン・M・ヴァンダイク〔ハワイ大学ロースクール教授〕

ジョー・ワトキンス〔オクラホマ大学先住民研究センター長〕

岩崎まさみ〔北海学園大学教授〕

萱野志朗〔萱野茂二風谷アイヌ資料館館長・アイヌ・先住民研究センター運営委員〕

北原次郎太〔アイヌ民族博物館学芸員〕

スチュアート・ヘンリ〔放送大学教授〕

常本照樹〔アイヌ・先住民研究センター〕

#### ■シシリムカ・サテライト

- ・公開講演会（1）「ハワイ先住民の活動に学ぶ ―教育の問題を中心に―」

2007年12月17日（月）18：30～20：00

シェリー・ブローダー〔ハワイ州弁護士〕

- ・公開講演会（２）「文化資源をいかした地域づくりと景観」

2008年2月9日（土）13：30～17：30

辻井達一〔北海道環境財団理事長〕，パオラ・ファリーニ〔ローマ大学教授〕

## ■センター巡回講座

2007年6月16日（土） 平取町

2007年8月18日（土） 旭川市

2008年3月23日（日） 苫小牧市

## 平成20年度活動実績

### ■公開講演会

- ・「サハリン・ウイラタの現状―彼らをとりまく開発，生態系そして文化の諸問題―」

2008年4月1日（火）18：00～20：00

リュドミーラ・ミソーノヴァ〔ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所 上級研究員〕

- ・「歴史的不正の克服―アメリカにおける法的経験の観点から―」

2008年4月2日（水）18：00～20：00

エリック・ヤマモト〔ハワイ大学ロースクール教授〕

- ・「AINU PRIDE―私の生きる道」

2008年5月23日（金）18：00～20：00

酒井美直〔AINU REBELS代表〕

- ・「GLOBALBASEを活用した世界遺産の管理と活用―バリ島の事例―」

2008年6月9日（月）18：00～20：00

藤田晴啓〔東洋大学 教授〕

- ・「伝統的フラによるハワイ先住民族のエコツーリズムと権利回復」

2008年6月14日（土）14：00～16：00

カーイ・ネルソン，ドーソン・セシリアほか〔ハワイカウアイ先住民交流グループ〕

- ・「マンローの考古学研究―横浜時代を中心に―」「N.G.マンローと鳥居龍蔵―二人の異文化へのまなざし―」

2008年6月15日（日）14：00～17：00

岡本孝之〔慶応義塾大学准教授〕，天羽利夫〔元徳島県立博物館長〕

- ・「文化ツーリズムとヨルタヨルター排除の事例―」  
2008年7月5日（土）13：30～15：30  
ウエイン・アトキンソン〔メルボルン大学〕
- ・「アイヌ語の文法書を作る」  
2008年7月18日（金）18：30～20：30  
佐藤知己〔文学研究科准教授，アイヌ・先住民研究センター〕
- ・「雁と熊―想像世界での系譜と宇宙創成神話―」  
2008年7月29日（火）18：00～20：30  
フィリップ・バルテル〔グルノーブル大学教授，イマジネール研究所所長〕
- ・「アメリカ先住民墓地保護・返還法(NAGPRA)をめぐる―先住民における倫理基準―」  
2008年9月21日（日）10：30～18：30  
ジョー・ワトキンス〔オクラホマ大学先住民研究センター長〕  
コメンテーター：加藤博文〔文学研究科准教授，アイヌ・先住民研究センター  
兼務教員〕  
キャロル・エリック〔SRI財団広報教育部長〕「教育を通じた歴史遺産の保全  
への取り組み」
- ・「アイヌ民族が先住民族であるという意味」  
2008年11月20日（木）18：30～20：30  
常本照樹〔法学研究科教授，アイヌ・先住民研究センター長〕
- ・「ラパヌイ（イースター島）の先住民社会と考古学およびラパヌイ先史学の新たな視点」  
2009年1月9日（金）18：00～20：30  
テリー・ハント〔ハワイ大学マノア校教授〕
- ・「過去の不正義にどう向き合うか―政府による「認知」と「謝罪」をめぐる―」  
2009年2月20日（金）18：00～20：30  
ジェフ・スピナー＝ハレブ〔ノースカロライナ大学政治学部教授〕
- ・「政府をもつこと―サミを事例に―」「高等教育における先住民族の学生―その課題―」  
2009年3月7日（土）13：30～17：30  
ペレ・クレメッツセン・ハッタ〔トロムソ大学サミ研究センター副事務局長〕  
リネ・ヴラアベルグ〔トロムソ大学留学生カウンセラー〕
- ・「博物館所属のアイヌ民族資料調査を振り返って―ハドソン川からエルベ川まで―」

2009年3月20日（金）10：30～12：00

小谷凱宣〔名古屋大学名誉教授〕

■夏季シンポジウム「アイヌ研究の現在と未来：第1部」

2008年6月29日（日）

- ・歴史学 榎森 進〔東北学院大学教授〕「これからのアイヌ史研究にむけて」

コメンテーター：新井かおり〔立教大学大学院社会学研究科修士課程〕

谷本晃久〔文学研究科准教授，アイヌ・先住民研究センター  
兼務教員〕

- ・考古学 佐藤孝雄〔慶応大学教授〕「アイヌ考古学の歩みとこれから」

コメンテーター：谷上 隆〔千歳文化財保護協会理事〕

加藤博文〔文学研究科准教授，アイヌ・先住民研究センター  
兼務教員〕

- ・言語学 佐藤知己〔文学研究科教授，アイヌ・先住民研究センター兼務教員〕

「アイヌ語の復興とアイヌ語研究」

コメンテーター：太田 満〔旭川アイヌ語教室講師，北海道教育大学旭川校非  
常勤講師〕

津曲敏郎〔文学研究科教授，同北方研究教育センター長〕

■冬季シンポジウム「アイヌ研究の現在と未来：第2部」

2008年12月6日（土）

- ・文化人類学 佐々木利和〔国立民族学博物館教授〕「文化人類学は何故アイヌを  
忌避するか」

コメンテーター：野本正博〔アイヌ民族博物館学芸員〕

- ・法律学・政治学 佐々木雅寿〔法学研究科教授，アイヌ・先住民研究センター〕

コメンテーター：阿部ユボ〔北海道ウタリ協会副理事長〕

：辻 康夫〔法学研究科教授，アイヌ・先住民研究センター兼  
務教員〕

- ・形質人類学 百々幸雄〔北海道文教大学教授〕「アイヌと縄文人：日本列島の基  
層集団」

コメンテーター：貝澤和明〔北海道ウタリ協会主任〕

：マーク・ハドソン〔西九州大学准教授〕

■フォーラム「Indigenous Peoples：国際人権基準と国内施策—台湾と日本の場合—」

2008年6月28日（土）

横田洋三〔中央大学法科大学院教授〕

林 江義〔台湾行政院原住民族委員会〕

■センター巡回講座

2008年6月13日（金） 平取町「シシリムカ・サテライト講座」

平成21年度活動実績

■公開講演会

- ・「新たな統治のあり方を目指して—カナダ・ヌナブト準州のイヌイトの挑戦—」

2009年4月3日（金）18：30～20：00

大村敬一〔大阪大学准教授〕

- ・「WIPCE（教育のための世界先住民族会議）参加報告会」

2009年5月29日（金）18：00～20：00

小野有五〔地球環境科学研究院教授，アイヌ・先住民研究センター〕，川上将司〔アイヌ・先住民研究センター〕ほか

- ・「アメリカ・インディアン政治的活動とその影響」

2009年6月12日（金）18：00～19：20

フィリップ・デロリア〔アメリカ学会（ASA）会長，ミシガン大学教授〕

- ・「台湾における開発と原住民族—太魯閣国家公園の場合」

2009年6月16日（火）18：00～20：00

スコット・サイモン〔オタワ大学准教授〕，イサウ・タダウ〔同禮部落自然生態自治協進會〕

- ・「先住民にとっての神話と遺産」

2009年9月18日（金）18：30～20：00

ボブ・サム〔トリングット・ストーリーテラー〕

- ・「アイヌ政策懇談会報告書の考え方」

2009年9月25日（金）18：30～20：00

常本照樹〔アイヌ・先住民研究センター長〕

- ・国際ワークショップ「先住民族の文化遺産と知的財産権をめぐる諸問題」

2009年10月4日（日）10：00～17：00

ジョージ・ニコラス〔サイモン・フレイザー大学教授〕， Joe Watkins 〔オクラホマ大学教授〕， 阿部ユボ 〔北海道アイヌ協会副理事長〕

- ・「先住民族の語りと文学ール・クレジオさんを迎えてー」

2009年12月2日（水）18：00～20：00

ル・クレジオ〔2008ノーベル文学賞受賞作家〕， 津島佑子〔作家〕， 池澤夏樹〔作家〕， 結城幸司〔アイヌアートプロジェクト代表〕

- ・「過去を掘ることから未来を見出すーハワイ， カウアイ島における失われた生活環境の復元への取り組みー」

2010年1月11日（月）14：00～17：00

デヴィット・バーニー〔国立熱帯植物園保全部門長， ハワイ大学客員教授〕，  
テリー・ハント〔ハワイ大学教授〕

- ・「アラスカにおける考古学と先住民コミュニティ」

2010年2月5日（金）18：00～20：00

リック・ネヒト〔アバディーン大学上級講師〕

#### ■夏季シンポジウム「口承文芸の魅力ーアイヌとその隣人ー」

2009年6月14日（日）午前10：00～午後5：30（於：北大）

【基調講演】荻原眞子〔帝京平成大学教授〕

「ユーラシアの英雄・勇者たちーアイヌの英雄叙事詩とのかかわりでー」

【講演】中川 裕〔千葉大学教授〕「まだまだ知られていないアイヌ散文説話の魅力」

風間伸次郎〔東京外国語大学教授〕「ツングース諸民族の口承文芸について」

丹菊逸治〔和光大学非常勤講師〕「ニヴフ口承文芸の魅力」

遠藤志保〔千葉大学大学院博士課程〕「昔話の論理・散文説話の論理ー昔話が散文説話になるためにー」

【総合討論】（上記講演者および）

大谷洋一〔北海道立アイヌ民族文化研究センター研究職員〕

白石英才〔札幌学院大学准教授〕

#### ■公開シンポジウム「アイヌ民族と博物館の共同にむけて」

2009年12月6日（日）午前10：00～午後17：00（於：北大）

佐々木利和〔国立民族学博物館教授〕

出利葉浩司〔北海道開拓記念館学芸員〕

内田祐一〔帯広百年記念館学芸員〕

共催：国立民族学博物館共同研究「博物館におけるアイヌ民族とその文化の展示のあり方の再検討」（代表：スチュアート ヘンリ）（主管），北海道大学アイヌ・先住民研究センター

■サステナビリティ・ウィーク2009国際シンポジウム「先住民族と自然資源—持続的資源利用の視点から—」

2009年11月15日（日）午前10：00～午後5：00（於：北大）

【講演】ブラッド・クームズ〔オークランド大学上級講師〕

マリノ・タヒ〔ランドケアリサーチ社マオリ提携部長〕

パニア・タイソン-ネイサン〔マオリ観光評議会CEO〕

小野有五〔地球環境科学研究院教授，アイヌ・先住民研究センター兼務教員〕

■冬季シンポジウム「アイヌ民族政策のこれから—アイヌ政策懇談会報告書を考える—」

2009年12月20日（日）午前10：00～午後5：30（於：北大）

- ・歴史編 佐々木利和〔国立民族学博物館教授〕
- ・理論編 常本照樹〔アイヌ・先住民研究センター長〕
- ・アイヌ民族の視点 秋辺日出男，貝澤真紀，八重樫志仁

■センター巡回講座

2009年9月2日（水） 平取町二風谷地区サテライト講座

常本照樹〔北海道大学アイヌ・先住民センター長〕「アイヌ政策懇談会報告書の考え方」

2009年9月11日（金） 新ひだか町（於：新ひだか町公民館）

常本照樹〔北海道大学アイヌ・先住民センター長〕「アイヌ政策懇談会報告書の考え方」

2009年10月17日（土） 旭川市（於：川村カ子トアイヌ記念館）

谷本晃久〔北海道大学文学研究科准教授／アイヌ・先住民研究センター兼務教員〕

「『保護地』自主管理の夢 近文アイヌの構想と運動をめぐって」

## 平成22年度活動実績

### ■公開講演会

- ・「先住民ラコタの民族自治と生存への取り組み」

2010年5月27日（木）18：00～20：00

トーマス・ビオルシ〔カリフォルニア大学バークレー校エスニック・スタ  
ディーズ研究科長〕

- ・「先住民アーティストの誕生—アボリジニ芸術の展開」

2010年5月30日（日）15：00～16：30

窪田幸子〔神戸大学大学院国際文化学研究科教授〕

主催：北海道大学文学研究科北方研究教育センター

後援：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

- ・「ミトコンドリアDNAからみたアイヌ」

2010年7月2日（金）18：30～20：00

安達登〔山梨大学大学院医学工学総合研究部教授〕

- ・「先住民族地理学への招待と課題—先住民族のための、先住民族とともにある地  
理学—」

2010年9月29日（水）18：30～20：30

リッチー・ハウイト〔マッコーリー大学教授〕

- ・「崩壊を回避する—イースター島での手法—」

2010年10月30日（水）14：00～15：30

テリー・ハント〔ハワイ大学教授〕

- ・「ロシア人の見たアイヌ民族」

2010年11月15日（月）18：00～20：00

アンドレイ・ソコロフ〔ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館研究員〕

- ・「インディアンの土地における事業—ビジネスを通じた機会の創造—」

2010年11月20日（土）13：30～15：30

ビル・キロガ〔ネイティヴアメリカンボタニクス社〕

共催：北海道大学総合博物館、北海道大学スラブ研究センター

- ・「追憶のヤキ儀礼—聖なる空間、女性の労働、死者のための2つの儀式における  
文化的持続性—Sacred Space, Women's Labor, and Cultural Persistence in Two  
Ceremonies for the Dead」

2011年2月11日（金）13：30～15：30

キルシュティン・エリクソン〔アーカンソー大学准教授〕

共催：北海道大学総合博物館，北海道大学スラブ研究センター，北海道大学アイヌ・先住民研究センター

- ・「アイヌと境界 樺太アイヌの歴史と経験」

2011年2月19日（土）13：30～15：30

田村将人〔北海道開拓記念館学芸員〕， 檜木貴美子

GCOEプログラム土曜市民セミナー 北大アイヌ・先住民研究センター共催公演会

共催：北海道大学総合博物館，北海道大学スラブ研究センター

■シンポジウム「アイヌ政策の実現に向けて—現状報告とアイヌからの提言—」

2010年10月10日（日）午前10：00～午後4：30（於：北大）

常本照樹「懇談会報告の考え方と政策推進会議の役割」

佐々木利和「懇談会報告をふまえた象徴空間の構想」

【アイヌからの提言】

島崎直美，中井貴規，菊地修二，丸子美記子，田澤守，野本久栄，宇梶静江，木村英彦

■国際シンポジウム「日本型先住民族政策の可能性—海外からの視点—」

2010年10月24日（日）午前10：00～午後4：30（於：ACU）

ランスマン・アン・マルユットウ「フィンランドにおけるサーミ政策」

リンゼイ・G・ロバートソン「米国先住民法と2009年アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会報告書」

林志興「台湾における原住民族政策の展開について」

■国際シンポジウム「『先住民族の知的財産』国際プロジェクトが目指すもの」

2011年1月17日（月）18：00～20：00（於：阿寒）

【開会の辞】 常本照樹

【来賓挨拶】 小松正明〔釧路市副市長〕， 大西雅之〔NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構理事長〕

【基調講演】 ジョージ・ニコラス〔サイモン・フレイザー大学教授〕

「有形および無形文化遺産の振興と保護に向けた，アイヌと『先住民族の知的財産国際プロジェクト』の協力推進」

2011年1月18日（火）9：30～17：00（於：阿寒）

【フォーラム】「先住民族の文化資源と知的財産—その理論と実践—」

ジョー・ワトキンス「文化の共有と遺産の管理—一般の人々となつながらの方法の選択—」

T.J.ファーガソン「米国南西部の部族による遺産管理」

リー・クワンワイジュウマ「ホピにおける文化資源の管理」

シェイラ・ギア「ユーコン準州における先住民族文化遺産プログラム」

ダイアン・ストランド「Aduri—Our Way—」

黄居正「先住民族の知的財産の特殊性：台湾原住民族文化的表現保護法（ITCEPA）」

青柳由香「アイヌ文化と法制度」

伊藤敦規「日本市場における米国先住民の知的財産権『侵害』—ひとつの解決策としてのホピ・ズニ作家展—」

貝澤守「文化資源活用に向けた工芸家・地域・行政の協働」

秋辺日出男「阿寒におけるアイヌ文化エコツアー」

床州生「アイヌ・アートと知的財産—阿寒アイヌコタンでの実践—」

永田義幸「アイヌ文化を活かしたホテルづくり」

【コメント】

ジョージ・ニコラス〔サイモン・フレイザー大学教授〕

■シンポジウム「今、アイヌであること—共に生きるための政策をめざして—」

2011年3月6日（日）13：00～17：00（於：法政大学市ヶ谷キャンパス）

【開会挨拶】山本真鳥〔日本学術会議会員，地域研究委員会人類学分会委員長，法政大学教授〕

【講演】本多俊和「世界の先住民族，日本の先住民族」

佐々木利和「一つの列島，二つの国，三つの文化」

常本照樹「アイヌ政策と多文化共生」

篠田謙一「アイヌ民族の自然人類学研究とその課題」

原田公久枝「今，アイヌであることを語る」

丸子美記子「今，アイヌであることを語る」

【コメンテーター】

加藤忠〔北海道アイヌ協会理事長〕

窪田幸子〔日本学術会議連携会員，神戸大学教授〕

主催：日本学術会議第一部地域研究委員会人類学分科会，第二部統合生物学委員会自然人類学分科会

共催：京都大学人文科学研究所「人種表象の日本型グローバル研究」プロジェクト，北海道大学アイヌ・先住民研究センター，法政大学国際日本学研究所

#### ■センター巡回講座

2010年9月24日（金） 平取町（於：二風谷アイヌ文化博物館）

シャーリン・フィッシャー〔ビーバー村教員〕・ジェフ・ゲーマン〔熊本学園大学非常勤講師〕「アラスカ先住民族の教育ービーバー村の現状についてー」

2010年10月29日（金） 平取町（於：二風谷アイヌ文化博物館）

デビッド・バーニー〔国立熱帯植物園・ハワイ大学客員教授〕「過去を掘る中に未来を見出すーカウアイ島における古生態学，サイバー基盤そして復元ー」

#### 平成23年度活動実績

#### ■公開講演会

- ・「保苺実 写真展関連イベント 2011年度・前期 道民カレッジ連携講座 座談会『保苺実の歴史学をいかに受けつぐのか？』」

2011年4月16日（土）13：30～15：30

窪田幸子〔神戸大学大学院国際文化学研究科教授〕

野上元〔筑波大学人文社会系准教授〕

谷本晃久〔北海道大学文学研究科准教授／アイヌ・先住民研究センター兼務教員〕

主催（主管）：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

共催：北海道大学総合博物館，北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」

- ・「自然言語処理とデータ蓄積に関する事例研究会」

2011年6月2日（木）14：00～16：00

マーク・カイザー〔カリフォルニア大学バークレー校バークレー言語センター副センター長，スラブ学部ロシア語講師〕

- ・「先住民族の固有文化と観光促進ーハワイの事例からー」

2011年6月29日（水）18：30～20：00

浅沼正和〔ホノルル・フェスティバル財団事務局長，JTB元ホノルル支店長，  
ハワイ・ビショップ博物館協会評議員〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター，北海道大学観光学高等研究セ  
ンター

- ・「新聞記者 門馬豊次の見た明治期の色丹島と千島アイヌ」

2011年7月29日（金）18：30～20：00

猪熊樹人〔根室市歴史と自然の資料館・学芸員〕

- ・「ブロニスワフ・ピウスツキの遺稿整理の最新状況—先住民族～アイヌ民族～ブ  
ロニスワフ・ピウスツキー」

2011年9月6日（火）18：00～20：00

アルフレッド・F・マイエヴィチ〔アダム・ミキエヴィッツ大学教授〕

- ・「一人の伝道師 ジョン・パチェラーの生涯とアイヌ研究」

2011年9月30日（金）18：30～20：00

キーステン・レフシン〔コペンハーゲン大学教授〕

- ・「本州以南のイナウ状祭具とその習俗」

2011年10月7日（金）18：30～20：00

今石みぎわ〔東京文化財研究所無形文化遺産部研究員〕

- ・「日本国憲法と先住民族であるアイヌの人びと」

2011年10月13日（木）18：30～20：00

佐藤幸治〔京都大学名誉教授〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター，北海道大学公法研究会・立法  
過程研究会

- ・「高等教育における米国先住民学生支援の現在」

2012年2月10日（金）18：30～20：00

カルメン・フォグホーン〔カリフォルニア大学パークレー校 アメリカ・イン  
ディアン大学院プログラム ディレクター〕

- ・「マイノリティとシティズンシップ『少数派』であること，『国民』であること」

2012年3月29日（金）18：30～20：00

ルーカス・スウェイン〔米国ダートマス・カレッジ政治学部教授〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター，北海道大学法学研究科高等法  
政教育研究センター

■「第15回アイヌ語弁論大会 イタカン ロー アイヌ語で話しましょう！」

2011年11月5日（土）10：00～17：00

主催（主管）：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

■国際シンポジウム「民族共生の象徴空間—日本と海外の比較—」

2011年9月17日（土）10：00～17：00（於：北大）

常本 照樹〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター長〕「民族共生の象徴となる空間」

浦 忠成〔国立台湾史前文化博物館 元館長〕「台湾原住民族文化公園と博物館」

イーサン・アラン・ペティクリュー〔アラスカ先住民文化センター文化教育担当副館長〕“Alaska Native Heritage Center”

ジーナ・ティンバーマン〔オクラホマ・インディアン文化センター兼博物館長〕  
“The American Indian Cultural Center and Museum”

■サステナビリティ・ウィーク2011 国際シンポジウム「北方のツーリズムと景観」（於：北大）

2011年11月1日（火）10：00～17：15

【午前の部】

〈基調講演〉サカリ・ロム〔フィンエアー日本支社営業総支配人〕

〈セッション3〉

西山徳明〔北海道大学観光学高等研究センター教授〕「日本および北海道における景観を資源とする観光の動向」

ヨハン・エルデハイム〔ラップランド大学〕「観光の発展—（複数の声による）地元住民の役割—」

山村高淑〔北海道大学観光学高等研究センター准教授〕「北海道におけるツーリズムの課題と可能性—先住民族の歴史・文化・現在に関するアクセス手段としてのツーリズムの観点から—」

ヘイッキ・マキパー〔元執行委員〕「『カティンクルタ』ヨーロッパ最大のリゾート地：地元資源の利用」

## 【午後の部】

〈基調講演〉加藤博文〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授〕

### 〈セッション4.1〉

瀬川拓郎〔旭川市博物科学館主幹〕「先住民の景観史—交易適応と植民都市形成がもたらしたアイヌの土地利用と景観の変化—」

アルヤ・ラウティオ〔オウル大学トゥーレインスティテュート〕「フィンランドにおけるサーミ民族の健康」

アンナ・スタットムレルゴスマン〔ラップランド大学北極センター研究員〕「地域社会レベルでの脆弱性を『解釈する』—ロシア北部からの事例研究—」

### 〈セッション4.2〉

吉原秀喜〔平取町役場アイヌ施策推進課学芸員・主幹、アイヌ文化環境保全調査係長〕「文化景観・環境とコミュニティ・ベースのツーリズム—北海道平取地域におけるアイヌ文化環境保全調査の事例〈1〉—」

リサレナ・オパスハンニネン〔オウル大学教授〕「LICHEN：言語・文化遺産の保護、管理、研究」

主催（主管）：フィンランドセンター北海道事務所

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター、北海道大学観光学高等研究センター

2011年11月2日（水）10：00～17：10 「先住民族と教育」

## 【午前の部】

### 〈セッション5.1〉

長野環 / 木村真奈美 / 川島五月〔アイヌ文化環境保全調査室職員〕「文化環境の調査・保全活動を通じた継承—北海道平取地域におけるアイヌ文化環境保全調査の事例〈2〉—」

ペル・クレムステンハエッタ〔トロムソ大学サーミ研究センター副事務長〕「伝統的な知識の記録と管理」

### 〈セッション5.2〉

常本照樹〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター長〕「アイヌ民族と高等教育」

トロケル・ラムッセン〔サーミ大学博士課程〕「教えを手段としたサーミ語の例」

アルヤ・ラウティオ〔オウル大学トゥーレインスティテュート〕「北極圏での健康と福祉にかかわるプログラムでのネットワーク」

## 【午後の部】

〈基調講演〉フレデレック・フォルスバーク〔在ヘルシンキフィンランド教育文化省参事官〕

### 〈セッション6.1〉

北原 次郎太〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授〕「アイヌ語復興の現状と課題」

トロケル・ラムッセン〔サーミ大学博士課程〕「初等教育におけるサーミ語使用」

シェルティ・バルト〔ヴァルドバイキサーミセンター事務長〕「実践としての母語教育」

### 〈セッション6.2〉

萱野志朗〔エフエム二風谷放送『FMピパウシ』ディレクター、萱野茂二風谷アイヌ資料館館長〕「言語の継承と保護におけるメディアの役割と重要性」

ユハニ・ノウスニエミ〔イナリYLEサーミラジオディレクター〕「言語の継承と保護におけるメディアの役割と重要性」

主催（主管）：フィンランドセンター北海道事務所

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

## ■センター巡回講座

2011年10月15日（土）14：00～15：30（於：帯広百年記念館）

佐々木利和「アイヌ絵からわかるアイヌ文化」

## ■無料公開連続セミナー「アイヌを学ぶ3ヶ月」（於：北大）

2011年10月4日（火）～12月20日（火）※祝日を除く毎週火曜日・全12回18：30～20：00

丹菊逸治「アイヌ語：アイヌ語をめぐるいくつかのトピック」「アイヌ口承文学：北東ユーラシアとの接点」

落合研一「法と民族：アイヌ民族をみつめる法的視点」

北原次郎太「アイヌ文化」

佐々木利和「アイヌ文化総合：蝦夷ってこう描かれたの？」

## ○後援事業

「北方研究教育センター サイエンス・カフェ ツンドラカフェ」

2011年6月4日（土）「ウイлтаのおばあちゃんと暮らした1年」

2011年7月30日（土）「ツンドラカフェ（番外編）『歴史から学ぶ，そのために未来に記録を残すー宮城県石巻市の体験からー』」

2011年10月15日（土）「見て，触れて，創るカムチャッカ先住民アート」

2011年11月19日（土）「都市でゲルに暮らすーウランバートル市民による街づくりの実践ー」

2012年2月26日（日）「カムチャッカの伝統文化を歌い継ぐー先住民アリユートル民族の歌と踊りー」

主催：北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター

## 平成24年度活動実績

### ■公開講演会

- ・「アイヌ文化継承の組織化に向けてーアイヌ文化継承・教育を『先住民族教育』論から考えるー」

2012年7月27日（金）18：30～20：00

ジェフ ゲーマン〔北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 特任准教授〕

- ・「現代社会における貧困と社会的排除：先住民研究との接点」

2012年8月22日（水）18：00～20：00

阿部彩〔国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部長〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター，北海道アイヌ協会

### ■国際シンポジウム「ニュージーランドとカナダの先住民族政策」

2012年8月11日（土）10：00～17：30（於：北大）

- ・デス・カホテア〔マオリ文化遺産考古学コンサルタント〕「マオリの文化遺産管理と法制度」

コメンテーター 加藤博文

- ・ブラッドフォード・モース〔ニュージーランド・ワイカト大学法学部長〕「先住民族と植民国家：カナダとニュージーランドの経験」

コメンテーター 常本照樹

### ■国際シンポジウム「台湾原住民族政策の理念と現状 個人認定・言語復興・文化公園を中心に」

2012年12月9日（日）10：00～16：30（於：北大）

常本照樹「はじめに・日本の現状」

林修澈〔国立政治大学原住民族研究センター長〕「台湾における原住民と原住民族の認定」

黄季平〔国立政治大学民族学系 副教授〕「台湾原住民族の言語の推進」

鍾興華〔Calivat GADU〕〔台湾原住民族文化園區管理局長〕「台湾原住民族の伝統文化の振興と伝承—原住民族文化公園を例として—」

■サステナビリティ・ウィーク2012 国際シンポジウム

2012年10月13日（土）13：00～16：30（於：北大）

【シンポジウム全体の趣旨説明】 加藤博文

【基調講演】

ティム・シャドラホール〔ロンドン大学考古学研究所・パブリック考古学准教授〕「21世紀におけるパブリック考古学」

ジョー・ワトキンス〔オクラホマ大学ネイティブアメリカンスタディーズ・プログラム長〕「考古学者と先住民コミュニティの関係改善における先住民考古学の重要性」

【ストーリーテリング】

結城幸司〔アイヌアートプロジェクト代表〕，福本昌二〔アイヌアートプロジェクト〕「七五郎沢の狐」

2012年10月14日（日）10：00～16：20（於：北大）

【セッション1：パブリック考古学の可能性】 座長：キャロル・エリック〔オクラホマ大学ネイティブアメリカンスタディーズ講師〕

報告1：岩波連〔北海道大学文学研究科修士課程〕「世界遺産知床におけるパブリック・アーケオロジーのとりくみ」

報告2：平澤悠〔北海道大学文学研究科修士課程〕「過去と今，人とモノ，文化財活用未来」

報告3：吉原秀喜〔平取町役場アイヌ施策推進課主幹〕「地域資源としての文化財とツーリズム」

報告4：川島五月，木村真奈美，長野環〔平取町役場アイヌ文化環境保全調査係〕「文化環境保全調査の成果を活かしたヘリテージツアー」

【セッション2：ヘリテージツーリズムの取り組み】 座長：山村高淑

報告1：門脇こずえ〔社団法人北海道アイヌ協会札幌支部国際人権部長〕「札

幌の文化遺産をめぐる—平岸ヘリテージトレイル—」

報告2：原田公久枝〔Team Nikaop, Hunpe Sisters 所属〕「ヘリテージツーリズムWGの取り組みから考えたこと」

報告3：中井貴規「旭川におけるヘリテージトレイル作成に向けての試案」

報告4：門脇賢司〔財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構アイヌ文化アドバイザー〕「増毛方面トレイルの構築にむけて」

報告5：高崎優子〔北海道大学大学院文学研究科博士後期課程〕「今と繋げる、自分で語る—沖縄から学ぶヘリテージツーリズムの現在と未来—」

【シンポジウム全体の総括報告】 岡田真弓「2つの考古学的アプローチとツーリズムの可能性」

2012年10月15日（月）10：00～11：30 北大構内ヘリテージツアー

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），北海道大学観光学高等研究センター

#### ■無料公開連続セミナー「アイヌを学ぶ3ヶ月」

2012年7月5日（木）～9月27日（木）※8月16日を除く毎週木曜日・全12回  
18：30～20：00（於：北大）

- ①北原次郎太「アイヌ民族の宗教文化」
- ②山崎幸治「モノからみるアイヌ文化」
- ③丹菊逸治「アイヌ語の世界」
- ④落合研一「ハワイ先住民とアイヌ民族の法的立場」
- ⑤加藤博文「考古学から見たアイヌ文化の成立過程」
- ⑥佐々木利和「アイヌを描いた絵から分かること」
- ⑦常本照樹「先住民族と政策」

#### ■センター巡回講座

2012年10月20日（土）（於：帯広百年記念館）

山崎幸治「民具からみるアイヌ文化—博物館資料を生かしたアイヌ文化の新展開—」

2013年2月16日（土）（於：旭川市生活館）

佐藤知己「アイヌ語の魅力—研究や学習で大切なこと—」

○共催および後援事業

■北方研究教育センター サイエンス・カフェ ツンドラカフェ

2012年7月28日（土）「沈黙の詩人の饒舌―石原吉郎の見たシベリア―」

主催：北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター

後援：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

■北海道立アイヌ民族文化研究センター所内研修および北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究会

2012年9月4日（火） テーマ「アイヌ絵研究の最前線を学ぶ」

2013年3月21日（水） テーマ「アイヌの民具としての漆器」

共催：北海道立アイヌ民族文化研究センター，北海道大学アイヌ・先住民研究センター

■「第16回アイヌ語弁論大会 イタカン ロー アイヌ語で話しましょう！」  
（於：北大クラーク会館）

2013年2月2日（土）

共催：アイヌ文化振興・研究推進機構（主管），北海道大学アイヌ・先住民研究センター

○教育派遣

「伝承者（担い手）育成事業」（於：アイヌ民族博物館）

平成25年度活動実績

■公開講演会

- ・「サハリン先住民族のたどった戦後―樺太アイヌ，ウイльта，ニヅフの〈引揚げ〉と〈残留〉について―」

2013年6月28日（金）18：30～20：00（於：北大）

田村将人〔札幌大学 特命准教授〕

- ・「考古学が構築する二つの島の世界―日英での考古遺産の活かし方―」

2013年10月19日（土）13：30～15：30（於：北海道開拓記念館）

クリス・ゴスデン〔オックスフォード大学東アジア考古学・芸術・文化センター長〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），北海道開拓記念館

- ・「ハワイにおけるアイヌ文化展示—AINU TREASURES：A Living Tradition in Northern Japan 展報告—」

2013年10月25日（金）18：00～20：00（於：北大）

マイケル・シュースター〔イースト・ウエスト・センター 学芸員〕

- ・「『先住民族の権利』と『文化』」

2013年12月4日（水）18：00～20：30（於：北大）

アヴィゲイル・アイゼンバーグ〔ビクトリア大学 政治学部長〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），北海道大学法学研究  
科高等法政教育研究センター

- ・「久保寺逸彦氏とアイヌ文学研究」

2014年3月21日（金）14：00～17：00（於：北大）

中川 裕〔千葉大学 教授〕，佐々木利和〔アイヌ・先住民研究センター 特任  
教授〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），北海道立アイヌ民族  
文化研究センター

## ■CAIS公開セミナー2013「『先住民族の権利に関する国連宣言』の国内実施：ア メリカの経験と先住民族世界会議（WCIP）2014への展望」

2013年8月3日（土）14：00～17：00（於：ACU）

リンゼイ・ロバートソン〔オクラホマ大学法科大学院附属先住民法政研究セン  
ター長〕

## ■研究フォーラム「アイヌ口承文芸の多様性と連続性」

2013年8月11日（日）13：30～16：30（於：北大）

丹菊逸治〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授〕「樺太アイヌの伝  
承とニヅフの伝承」

北原次郎太〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授〕「口承文芸の世  
界観—祈り・語り—」

田村雅史〔北海道立アイヌ民族文化研究センター〕「道東釧路地方の伝承から  
見たアイヌ口承文芸」

■国際シンポジウム「アイヌ・アートが担う新たな役割—米国先住民アートショーに学ぶ—」

2014年1月26日（日）13：00～17：30（於：北大）

ロバート・ブルーニグ〔北アリゾナ博物館長〕

ジム・イノート〔ズニ博物館長〕

オクティビアス・シオウテワ〔ズニ宝飾品作家，宗教的指導者〕

貝澤和明〔社団法人北海道アイヌ協会 民・工芸品担当〕

山崎幸治〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授〕

伊藤敦規〔国立民族学博物館 助教〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），国立民族学博物館

■国際ワークショップ「伝統知，記憶，情報，イメージの再収集と共有—民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望—」

2014年1月28日（火）～1月29日（水）（於：国立民族学博物館）

須藤健一〔国立民族学博物館長〕

伊藤敦規〔国立民族学博物館 助教〕

岸上伸啓〔国立民族学博物館 副館長〕

野林厚志〔国立民族学博物館教授〕

ジム・イノート〔ズニ博物館長〕

オクティビアス・シオウテワ〔ズニ宝飾品作家，宗教的指導者〕

ロバート・ブルーニグ〔北アリゾナ博物館長〕

福岡正太〔国立民族学博物館 准教授〕

山崎幸治〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授〕

共催：国立民族学博物館（主管），北海道大学アイヌ・先住民研究センター

■国際シンポジウム「先住民族コミュニティの発展への大学の貢献」

2014年3月23日（日）9：30～17：00（於：北大）

湯京平〔国立政治大学社会科学学院副院長，政治学系 教授〕

孫振義〔国立政治大学地政学系 准教授〕

陳彦安〔国立政治大学地政学系 研究生〕

陳建宏〔国立政治大学地政学系 研究生〕

孫振義〔国立政治大学地政学系 准教授〕

蘇芳儀〔国立政治大学地政学系 研究生〕

甯方璽〔国立政治大学地政学系 助教〕

蔡名曜〔国立政治大学地政学系 研究生〕

曾正男〔国立政治大学应用数学系 助教〕

官大偉〔国立政治大学民族学系 助教〕

王雅萍〔国立政治大学民族学系 准教授〕

宋神財〔台湾国家科学委員会計画顧問〕

宋峻杰〔国立政治大学 非常勤研究員〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），台湾国立政治大学，  
北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター

■サステナビリティ・ウィーク2013 国際シンポジウム「先住民文化遺産とツーリズム—生きている遺産の継承と創造—」

・「誰が守っていくのか」

2013年11月15日（金）13：00～16：00（於：北大）

加藤博文〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 教授〕

岡田真弓〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 博士研究員〕

ジョージ・ニコラス〔サイモン・フレイザー大学 教授，IPinCH代表〕

西島達夫〔平取町アイヌ文化振興推進協議会イオル専門委員長〕

赤間 哲〔三井物産株式会社環境・社会貢献部社有林・環境基金室長〕

ジョー・ワトキンス〔米国国立公園局局部族担当人類学部長，IPinCHメンバー〕

結城幸司〔アイヌアートプロジェクト代表〕

・「どのように継承していくのか」

2013年11月16日（土）10：00～16：00（於：北大）

デイブ・シェペ〔ストーロー研究・資源管理センター長〕

レイチェル・ギラウド〔カリフォルニア州立大学 准教授〕

木村英彦〔北海道アイヌ協会平取支部長〕

貝澤 徹〔平取町工芸家・アーティスト〕

北原次郎太〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授〕

佐々木利和〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 特任教授〕

松浦晃一郎〔ユネスコ前事務局長〕

・ワークショップ「ツーリズム開発は地域の文化資源を活かせるのか」

2013年11月17日（日）14：00～16：00（於：沙流川歴史館）

森田 勝〔金沢市経済局営業戦略部長〕

貝澤一成〔平取町アイヌ施策推進課長〕

松浦晃一郎〔ユネスコ前事務局長〕

西山徳明〔北海道大学観光学高等研究センター長〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），北海道大学観光学高等研究センター，平取町

■無料公開連続セミナー「アイヌを学ぶ3ヶ月」

2013年7月2日（火）～9月24日（火）※8月13日を除く毎週火曜日・全12回・  
18：30～20：00（於：北大）

- ①丹菊逸治「アイヌ語の世界」
- ②北原次郎太「アイヌ民族の宗教文化」
- ③山崎幸治「モノからみるアイヌ文化」
- ④落合研一「ハワイ先住民とアイヌ民族の法的立場」
- ⑤加藤博文「考古学から見たアイヌ文化の成立過程」
- ⑥常本照樹「先住民族と政策」
- ⑦佐々木利和「アイヌを描いた絵から分かること」

■センター巡回講座

2013年10月19日（土）14：00～15：30（於：帯広百年記念館）  
北原次郎太「アイヌの言葉と祈りの文化」

○共催および後援事業

■「第17回アイヌ語弁論大会 イタカン ロー アイヌ語で話しましょう！」  
（於：北大クラーク会館）

2013年10月19日（土）10：00～17：00

共催：アイヌ文化振興・研究推進機構（主管），北海道大学アイヌ・先住民研究センター

■「中国における民族法と民間慣習法」（於：北大）

2013年12月14日（土）13：00～17：30

共催：北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター（主管），  
北海道大学アイヌ・先住民研究センター，日本学術振興会・科学研究費  
基盤研究(A)「権威主義体制と市場を媒介する法と政治ー中国的メカニズ

## ムの解明」

- 国際ワークショップ「伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有一民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望」

2014年1月28日（火）～1月29日（水）（於：国立民族学博物館）

共催：国立民族学博物館（主管），北海道大学アイヌ・先住民研究センター

- 北海道立アイヌ民族文化研究センター所内研修および北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究会

「久保寺逸彦文庫の意義」

2014年3月20日（木）（於：センター）

共催：北海道立アイヌ民族文化研究センター（主管），北海道大学アイヌ・先住民研究センター

## ○教育派遣

「伝承者（担い手）育成事業」（於：アイヌ民族博物館）

## 平成26年度活動実績

### ■公開講演会

- ・「本はその来歴を語る一知られざる『蝦夷生計図説』の写本」

2014年6月20日（金）18：30～20：00（於：北大）

ワシーリー・シェプキン〔ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所 研究員／北海道大学アイヌ・先住民研究センター 客員研究員〕

- ・「ヒグマ猟とアイヌ文化」

2014年7月25日（金）18：30～20：00（於：北大）

狩野義美

- ・「マオリはどうやってことばを取り戻したのかーテ・アタアランギとアイヌ語の将来ー」

2014年9月1日（月）18：30～20：00（於：北大）

ルアケレ・ホンド〔テ・アタアランギ協会 理事長〕

エラナ・ブレワートン〔テ・アタアランギ協会 理事〕

- ・「西ヨーロッパのアイヌ・コレクション」

2014年10月9日（木）18：30～20：30（於：北大）

ハンス＝ディーター・オイルシュレーガー〔ボン大学准教授〕

- ・「アイヌ民族が創造した衣服文化―博士論文の内容を中心に―」

2015年2月21日（土）14：30～16：00（於：北大）

津田命子〔北海道立アイヌ総合センター学芸員〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），公益社団法人北海道アイヌ協会

#### ■国際シンポジウム「ハワイ先住民の現在」

2014年9月27日（土）13：30～17：30（於：ACU）

シェリー・ブローダー〔弁護士，ハワイ大学ロースクール 非常勤講師〕

メロディ・カピリアロハ・マッケンジー〔ハワイ大学先住民法研究センター長〕

#### ■国際シンポジウム「台湾原住民族の現在」

2014年10月25日（土）10：00～17：30（於：北大）

林江義〔原住民族委員会 主任委員〕

林修澈〔国立政治大学原住民族研究センター長〕

黄季平〔国立政治大学民族学科 准教授〕

王慧玲〔台湾原住民族文化公園 管理局長〕

蔡宜静〔台湾原住民族文化公園 専門員〕

藍旻瑩〔高雄市政府原住民事務委員会 事務局長〕

謝玉忠〔花蓮県瑞穗郷奇美原住民文物館 企画員〕

#### ■北海道大学アイヌ・先住民研究センターサテライト特別講座／シシリムカ文化大学共催「地域における先住民族文化振興の現状と展望」

2014年10月26日（日）14：15～16：55（於：沙流川歴史館）

アイヌ民族の地域組織から〔平取アイヌ協会〕

地方自治体から〔平取町アイヌ施策推進課〕

呉明季〔花蓮県瑞穗郷奇美文物館長〕

何鳳美〔屏東県獅子郷文物陳列館 企画員〕

■サステナビリティ・ウィーク2014 国際シンポジウム「先住民文化遺産とツーリズム—文化的景観と先住民遺産をめぐる諸問題—」

- ・「岩と水が創り出す文化的景観」

2014年12月20日（土）13：00～17：00（於：北大）

ニール・プライス〔ウプサラ大学考古学部 教授〕

カール＝ヨスタ・オヤラ〔ウプサラ大学考古学部 講師〕

友田哲弘〔旭川市博物館 学芸員／主査〕

吉原秀喜〔平取町アイヌ施策推進課 主幹／学芸員〕

- ・「海と湖が創り出す文化的景観」

2014年12月21日（日）10：00～16：00

スヴェン・ハーカンソン〔ワシントン大学バーク博物館 准教授〕

リック・ネヒト〔アバディーン大学考古学部 講師〕

八幡巴絵〔アイヌ民族博物館 学芸員〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），北海道大学観光学高等研究センター

後援：WAC-8 JAPAN（世界考古学会議京都大会実行委員会）

■文化庁委託事業 アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイヴ化に関する調査研究報告会

「アイヌ語の未来を考える—音声資料をいかに活用していくか—」

2015年1月31日（土）13：00～16：00（於：北大），2月1日（日）13：00～16：00（於：沙流川歴史館）

鈴木仁也〔文化庁文化部国語課 国語調査官〕

関根健司〔平取町二風谷アイヌ語教室 講師〕

中川裕〔千葉大学文学部 教授〕

萱野志朗〔平取町二風谷アイヌ語教室 事務局長〕

■無料公開連続セミナー「アイヌを学ぶ」

- ・初級2014年6月3日（火）～7月29日（火）毎火曜・全9回・18：30～20：00  
於：北大

①北原次郎太「アイヌ民族の宗教文化」

②山崎幸治「モノから見るアイヌ文化1・2」

③丹菊逸治「やさしいアイヌ語・アイヌ文学1・2」

- ④加藤博文「考古学から見たアイヌ文化の成立過程」
- ⑤蓑島栄紀「史料からみたアイヌ民族の古代・中世交流史」
- ⑥落合研一「アイヌ民族の法的立場1・2」
- ・上級2014年9月2日（火）～10月28日（火）9月23日を除く毎火曜・全8回・  
18：30～20：00 於：北大
- ①佐々木利和「アイヌを描いた絵から分かること」
- ②北原次郎太「宗教を通して見る北方文化の中のアイヌ文化」
- ③高橋靖以「アイヌ語のなかの多様性」
- ④蓑島栄紀「『えぞ』の成立とその背景」
- ⑤加藤博文「アイヌと北海道考古学（1）」
- ⑥長沼正樹「アイヌと北海道考古学（2）」
- ⑦丹菊逸治「アイヌ口承文学を分析・解釈する」
- ⑧常本照樹「先住民族と政策」

#### ■センター巡回講座

「江戸時代のトカチ場所とアイヌ社会」

2014年10月11日（土）14：00～16：00（於：帯広百年記念館）

谷本晃久〔北海道大学文学研究科 准教授／北海道大学アイヌ・先住民研究センター 兼務教員〕

#### ○共催および後援事業

#### ■「カリフォルニア・ネイティブチュマッシュ・インディアンズナウ」

2014年11月20日（木）18：00～19：30

ナカムラアユミ〔Santa Ynez Band of Chumash Indians部族政府内環境課〕

会場：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション棟608号

主催：日本学術振興会・科学研究費基盤研究(B)「北海道における先住民族の『知』の接合に関するアクション・リサーチ研究」

共催：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院

後援：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

#### ■「ISNLC2015 北方の言語と文化にかんする国際シンポジウム」

2015年1月24日（土）10：00～16：50（於：北大）

- ・Session1(10：10～12：00) 言語・文化継承とドキュメンテーション  
ウラジスラフ・リンティテギン〔チュクチ総合カレッジ 講師〕

ワレンチン・グセフ〔ロシア語アカデミー言語学研究所〕

・Session2(13：30～16：50) 民族誌の言語資料

永山ゆかり〔北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター 助教〕

丹菊逸治〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授〕

長崎郁〔国立国語研究所 プロジェクトPDフェロー〕

江畑冬生〔新潟大学人文学部 准教授〕

松本亮〔京都大学大学院文学研究科〕

山田敦士〔日本医療大学 准教授〕

共催：北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター（主管），北海道大学アイヌ・先住民研究センター

■「ISNLC2015 北方の言語と文化にかんする国際シンポジウム」

2015年1月25日（日）10：30～17：00（於：北大）

・Session3(10：30～12：00) 言語の記録・保存

白石英才〔札幌学院大学 准教授〕

白尚燁〔北海道大学文学研究科 博士課程〕

津曲敏郎〔北海道大学大学院文学研究科 教授〕

・Session4(13：30～16：50) アイヌ文学とアイヌ語

矢崎春菜〔北海道大学文学研究科 博士課程〕

北原次郎太〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授〕

奥田統己〔札幌学院大学 教授〕

岸本宜久〔北海道大学文学研究科 博士課程〕

高橋靖以〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 博士研究員〕

佐藤知己〔北海道大学大学院文学研究科 教授〕

共催：北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター（主管），北海道大学アイヌ・先住民研究センター

○教育派遣

「伝承者（担い手）育成事業」（於：アイヌ民族博物館）

## 平成27年度活動実績

### ■公開講演会

- ・「アイヌの歌人・遼星北斗の生涯とその思想の変化について」

2015年6月12日（金）18：30～20：00

山科清春〔遼星北斗研究会 代表〕

- ・「民族衣装を着なかったアイヌ—先住民にとっての伝統と現代—」

2016年2月23日（火）18：30～20：00

瀧口夕美〔『民族衣装を着なかったアイヌ—北の女たちから伝えられたこと—』著者〕

- ・「アイヌを描いた絵からわかること—史料だけにとどまらない『アイヌ絵の世界』の魅力—」

2016年3月4日（金）18：30～20：00

佐々木利和〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 客員教授〕

### ■国際シンポジウム「台湾国立政治大学社会科学院・烏来地区タイヤル族シンポジウム」

2015年9月3日（木）17：30～19：00（於：センター会議室）

湯京平〔台湾国立政治大学 教授〕

王雅萍〔台湾国立政治大学 副教授〕

張晏碩〔台湾国立政治大学 兼任助手〕

周小雲，游秋蘭，莊育桔，嚴欣怡〔烏来機織協会〕

陳文玲〔台湾国立政治大学 教授〕

范月華〔台湾国立政治大学 専任助手〕

### ■サステナビリティ・ウィーク2015 国際シンポジウム「地域社会へ与える考古学の影響—ポストコロニアル時代の考古学と先住民コミュニティ—」

2015年11月7日（土）13：00～17：30（於：北大）

ジョージ・ニコラス〔サイモン・フレイザー大学 教授〕

スーザン・ローウィ〔コロンビア大学 准教授〕

リック・ネヒト〔アバディーン大学 上級講師〕

陳瑪玲〔国立台湾大学 教授〕

カール＝ヨスタ・オヤラ〔ウプサラ大学 研究員〕

2015年11月8日（日）10：00～16：30（於：北大）

大西秀之〔同志社女子大学 准教授〕

小野哲也〔標津町教育委員会〕

森岡健治〔平取町沙流川歴史館〕

長野環〔平取町アイヌ文化保全対策室〕

松田陽〔東京大学 准教授〕

岡村勝行〔大阪文化財研究所〕

石田肇〔琉球大学 教授〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），北海道大学観光学高等研究センター

後援：WAC-8 JAPAN（世界考古学会議京都大会実行委員会）

■先住民遺骨等返還の制度と運用：米国NAGPRAの事例

2016年2月8日（月）10：00～17：00（於：センター）

メラニー・オブライエン〔米国内務省国立公園局NAGPRA担当部長〕

ティモシー・マッキューン〔遺骨等返還コンサルタント，オーストラリア国立大学上級研究員〕

■無料公開連続セミナー「アイヌを学ぶ」

・初級 2015年6月2日（火）～7月28日（火） 毎週火曜日・全9回・18：30～20：00

①北原次郎太「アイヌ民族の宗教文化」

②津田命子（特別講師）「モノから見るアイヌ文化1」

③山崎幸治「モノから見るアイヌ文化2」

④丹菊逸治「やさしいアイヌ語・アイヌ文学1・2」

⑤加藤博文「考古学から見たアイヌ文化の成立過程」

⑥蓑島栄紀「前近代の『アイヌ史』概観―交易・交流の視点から」

⑦落合研一「アイヌ民族の法的立場1・2」

・上級 2015年9月1日（火）～10月27日（火） 9月22日を除く毎週火曜日・全8回・18：30～20：00

①北原次郎太「宗教を通して見る北方文化の中のアイヌ文化」

②高橋靖以「アイヌ語のなかの多様性」

③蓑島栄紀「『昆布』をめぐる古代交流―奈良・平安日本とエミシ・エゾ」

- ④長沼正樹「アイヌと北海道考古学（1）」
- ⑤加藤博文「アイヌと北海道考古学（2）」
- ⑥丹菊逸治「アイヌ口承文学を分析・解釈する」
- ⑦常本照樹「アイヌ政策の現在」

■センター巡回講座「十勝地方の古代文化と交易・交流」

2015年10月10日（土）14：00～16：00（於：帯広百年記念館）

葛島米紀〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授〕

○共催および後援事業

■共催「International Conference Northeast Asia and the North Pacific as a Linguistic Area」

2015年8月20日（木）21日（金）18：00～19：30（於：北大）

主催：国立国語研究所

■共催「アイヌの文化に触れてみる」

2015年10月17日（土）13：00～16：00（於：鶴見大学）

主催：鶴見大学比較文化研究所

■共催「北海道大学ーフィンランドジョイントシンポジウム スピンオフセミナー」

“Contaminant Monitoring in Former Mining Areas of the Canadian High Arctic”

2015年11月12日（木）10：00～11：30（於：北大）

主催：北海道大学北極域研究センター

■共催「第19回アイヌ語弁論大会 イタカンロー アイヌ語で話しましょう！」

2015年11月21日（土）10：00～17：00（於：北大高等教育推進機構）

主催：公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

■後援「アイヌアートシンポジウム」

2015年12月12日（土）13：30～17：00（於：阿寒湖アイヌシアターイコロ）

主催：阿寒湖温泉アイヌ文化推進実行委員会

■後援「フォーラム 釧路地方のアイヌ文化と観光振興・アイヌ政策」

2016年2月15日（月）13：00～17：30（於：釧路市交流プラザさいわい）

主催：阿寒湖アイヌコタンアイヌ施策委員会

○教育派遣

「伝承者（担い手）育成事業」（於：アイヌ民族博物館）

平成28年度活動実績

■公開講演会

- ・「近代政治学と先住民族問題」

2016年10月26日（水）18：00～20：30（於：北大）

ジェイムズ・タリー〔カナダ・ヴィクトリア大学名誉教授〕

■日露国際研究集会「コレクション形成史からみる日露関係史—ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所（IOM）所蔵アイヌ・北方関係史料の共同研究—」

2016年7月10日（日）10：00～17：00（於：北大）

蓑島米紀〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター〕

保谷徹〔東京大学史料編纂所〕

谷本晃久〔北海道大学文学研究科／アイヌ・先住民研究センター〕

マランジャン、カリネ〔ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所〕

鈴木仁〔北海道大学大学院〕

田村将人〔東京国立博物館〕

兔内勇津流〔北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター〕

シェプキン、ワシーリー〔ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所〕

東俊佑〔北海道博物館〕

鈴木建治〔北海道大学国際本部〕

佐々木利和〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），東京大学史料編纂所海外S科研ロシアⅢユニット，北海道大学文学研究科北方研究教育センター

■サステナビリティ・ウィーク2016 国際シンポジウム「東アジアにおける大学と先住民族との協業のあり方を探る」

2016年11月3日（木）9：30～17：30（於：北大）

劉益昌〔中央研究院歴史語言研究所研究員〕

陳有貝〔国立台湾大学人類学系副教授〕

青野友哉〔伊達市噴火湾文化研究所学芸員〕

陳瑪玲〔国立台湾大学人類学系教授〕

鄭安晞〔国立台中教育大学区域与社会發展学系助理教授〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（主管），文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「稲作と中国文明—総合稲作文明学の新構築—」

後援：北海道大学観光学高等研究センター

■北海道—ヘルシンキセミナー事業 共同研究R-2「北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来」

2017年3月2日（木）～3日（金）（於：ヘルシンキ大学）

加藤博文，近藤祉秋，平澤悠，山内太郎〔北海道大学保健科学研究院〕，森田航〔北海道大学歯学研究科〕，岡田真弓〔北海道大学創成研究機構〕

■Singing for the Whales : Environmental Change and Cultural Resilience among the Iñupiat of Arctic Alaska

2016年6月21日（火）18：00～20：00（於：センター）

榊原千絵〔オーバリン大学助教〕

■ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所所蔵「酒吞童子絵巻」検討会

2016年7月5日（火）13：00～14：30（於：センター）

太田彩〔宮内庁三の丸尚蔵館主任研究官〕

■カナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学交流事業報告会

2017年1月16日（月）14：00～15：00（於：センター）

丹菊逸治「UBCの先住民族言語研究教育プログラムと先住民族図書館」

城石梨奈「UBC人類学博物館におけるファースト・ネーションズとの協業の取り組み：職員への聞き取りから」

近藤祉秋「先住民研究をいかに教えるのか？UBCとの教育・研究交流とその計画」

■月例公開講座「アイヌを学ぶ」（於：北大）

- ①丹菊逸治「アイヌ民族の言語と社会」2016年6月28日（火）18：30～20：00
- ②山崎幸治「モノからみるアイヌ文化」7月26日（火）18：30～20：00
- ③高橋靖以「言語からみたアイヌの精神文化」8月30日（火）18：30～20：00
- ④蓑島栄紀「交易からみたアイヌの歴史」9月27日（火）18：30～20：00
- ⑤近藤祉秋「アラスカの狩猟と食文化」11月29日（火）18：30～20：00
- ⑥加藤博文「考古学は何を、誰に語るのか」2017年1月31日（火）18：30～20：00
- ⑦北原次郎太「伝承から見る動物神」2月28日（火）18：30～20：00
- ⑧丹菊逸治「アイヌ民族の伝統的知財管理」3月28日（火）18：30～20：00

■センター巡回講座「十勝地方のアイヌ語について」

2016年6月18日（土）14：00～15：30（於：帯広百年記念館）

高橋靖以〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 博士研究員〕

○共催および後援事業

■共催「アイヌの文化にもっと触れてみる」

2016年10月15日（土）13：00～16：00（於：鶴見大学）

丹菊逸治，山崎幸治，北原次郎太，蓑島栄紀

主催：鶴見大学比較文化研究所

■共催「旅する木彫り熊—アート・ツーリズム・境界—」

2017年3月4日（土）13：00～15：30（於：北大）

大谷茂之〔八雲町郷土資料館・八雲町木彫り熊資料館 学芸員〕

荒木繁〔木彫家〕

主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット

■後援「容姿と装束にみる近世日本—近隣異国像と自己像—」

2016年10月17日（月）18：30～20：30（於：北大）

ロナルド・トビ〔イリノイ大学名誉教授〕

主催：北海道大学日本史学講座

○教育派遣

「伝承者（担い手）育成事業」（於：アイヌ民族博物館）

平成29年度活動実績

■公開講演会「古写真を手に昭和の二風谷を歩こう」

2017年6月24日（土）13：00～14：00（於：二風谷工芸館）

貝澤雪子〔貝沢民芸〕

■シンポジウム「先住民族アイヌと入植植民地北海道—アイヌ史の方法論—」

2017年7月29日（土）14：00～17：30（於：北大）

丹菊逸治〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授〕

坂田美奈子〔苫小牧駒澤大学准教授〕

マーク・ウィンチェスター〔神田外語大学講師〕

■北海道大学アイヌ・先住民研究センター設立10周年記念シンポジウム「アイヌ・先住民研究のこれまでとこれから」

2018年2月3日（土）10：00～17：00（於：ACU-A大研修室1606室）

中村睦男〔北海道大学名誉教授・元総長〕

丹菊逸治〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授〕

北原次郎太〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授〕

谷本晃久〔北海道大学大学院文学研究科准教授／アイヌ・先住民研究センター  
兼務教員〕

佐々木利和〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員教授〕

山崎幸治〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授〕

小内 透〔北海道大学大学院教育学研究科教授／アイヌ・先住民研究センター  
兼務教員〕

加藤博文〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授〕

貝澤守〔二風谷民芸組合代表理事〕  
秋辺日出男〔阿寒アイヌ工芸共同組合専務理事〕  
八幡巴絵〔アイヌ民族博物館学芸係長〕  
中井貴規〔アイヌ文化財団博物館運営準備室研究員〕  
佐藤孝雄〔慶応義塾大学文学部教授〕  
出利葉浩司〔北海学園大学人文学部客員研究員〕  
林修澈〔台湾国立政治大学名誉教授〕  
黄季平〔台湾国立政治大学原住民民族研究センター長〕  
長谷川晃〔北海道大学副学長〕

■調査研究報告会“Native American and Indigenous Studies Conference”報告会

2017年7月27日（木）18：30～20：00（於：センター）

近藤祉秋「先住民研究と超学際プロジェクト～マスキューイムのカヌー復興を  
中心として」

丹菊逸治「先住民研究の広がり～ジェンダー研究から短編映画まで」

■月例公開講座「アイヌを学ぶ」（於：北大）

①北原次郎太「トウスクルーアイヌのシャマンはどう祈る－」2017年5月30日  
（火）18：30～20：00

②中止

③山崎幸治「『アイヌ』のモノとイメージ」7月25日（火）18：30～20：00

④丹菊逸治「アイヌ・先住民文化継承の具体的方法論」8月29日（火）  
18：30～20：00

⑤加藤博文「先住民考古学からアイヌ民族史を考える」9月26日（火）18：  
30～20：00

⑥佐々木利和「村垣淡路守と東蝦夷地巡見絵巻について」10月24日（火）  
18：30～20：00

■センター巡回講座「アイヌから見た和人、和人から見たアイヌーアイヌ民族社会  
と伝統文化の仕組み－」

2017年10月21日（土）（於：帯広百年記念館）

丹菊逸治〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授〕

○共催及び後援事業

■共催 第15回創成シンポジウム「大地に眠る物語を読むー考古学者と人形劇師ー」

2017年9月30日（土）16：00～18：00（於：北大）

沢則行〔人形劇師〕

矢吹英孝〔さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座〕

安田晃子〔さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座〕

池内潤樹〔さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座〕

加藤博文〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授〕

岡田真弓〔北海道大学創成研究機構助教〕

主催：北海道大学 創成研究機構

協力：公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会（札幌市こどもの劇場やまびこ座）

連携：札幌国際芸術祭実行委員会，TERRACE -科学とアートが会える場所-

後援：札幌市，札幌市教育委員会，北海道新聞社

■共催 台湾国家教育研究院・北海道アイヌ・先住民研究センター共同シンポジウム「台湾における原住民族教育の過去・現在・未来ー制度と現場の視点からー」

2017年9月11日（月）15：00～17：00（於：北大）

宋峻杰〔国家教育研究院教育制度・政策研究センター助理研究員〕

頼協志〔国家教育研究院教育制度・政策研究センター副研究員〕

曾大千〔国家教育研究院教育制度・政策研究センター研究員兼センター長〕

主催：台湾国家教育研究院教育制度・政策研究センター

■共催 平成29年度危機的な状況にある言語・方言サミット（北海道大会）

2017年12月3日（日）10：00～18：20（於：北大）

中川裕〔千葉大学・教授〕

石原昌英〔琉球大学・教授〕

山田真寛〔国立国語研究所・教授〕

長谷川紀子〔名古屋大学大学院〕

中井貴規〔国立アイヌ民族博物館設立準備室〕

主催：文化庁

共催：北海道，北海道教育委員会，国立国語研究所，琉球大学，（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構，（公社）北海道アイヌ協会

■共催 講演会「コミュニティ主導の環境モニタリングと北方の生態系復元」

2018年1月20日（土）13：00～ （於：北大）

主催：北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター，北極域研究センター，J-Ark Net 共同研究「北極域における人新世の生業システム」

協力：ArCs（文科省北極域研究推進プロジェクト）テーマ6&7

○センター出前講座

■「文化人類学入門 博物館学からみるアイヌ民族のいま」

2017年6月30日（金）13：15～14：45（於：龍谷大学）

山崎幸治〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授〕

○教育派遣

■「環太平洋の考古学」

2017年5月16日（火）（於：極東連邦大学，ウラジオストク（ロシア））

加藤博文〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授〕

■「伝承者（担い手）育成事業」（（一財）アイヌ民族博物館）

## 2. 平成25～29年度 日本学術振興会研究拠点形成事業「先端拠点形成型」

### 「北方圏における人類生態史総合研究拠点」の活動

(プロジェクトリーダー 加藤博文教授)

#### ■平成25年度

##### ○礼文島国際フィールドスクール

礼文町浜中遺跡群での人類生態史調査

2013年7月20日(土)～8月21日(水)

※7月20日(土)～7月21日(日) 北海道大学にて海外からの学生参加者を対象としたオリエンテーションを実施

##### ○セミナー

- ・「安定同位体分析・年代測定国際セミナー：完新世の狩猟採集民を科学する」

2013年7月3日(水)～7月5日(金) (於：オックスフォード大学)

- ・「アイヌ文化形成過程の解明：北からの視点」(第67回日本人類学会一分科会シンポジウム)

2013年11月3日(日) (於：国立科学博物館)

- ・「ヒトと動物の関係史」

2013年12月3日(火)～12月4日(水) (於：アバディーン大学考古学部)

- ・「骨に記録された生活誌」

2014年1月11日(土) (於：北海道大学附属図書館大会議室)

##### ○共同研究及び研究者交流

- ・加藤博文他11名 プロジェクトメンバーによる全体会議

2013年11月3日(日) (於：国立科学博物館)

- ・加藤博文「北海道の先史文化および先住民文化遺産」に関する大学院生向けのチュートリアルとアイヌ考古学に関する講義

2014年2月1日(土)～3月17日(月) (於：オックスフォード大学・連合王国)

- ・加藤博文「北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来」に係るセミナーでの講演

2014年3月13日(木) (於：ウプサラ大学(ストックホルム・スウェーデン))

## ■平成26年度

### ○礼文島国際フィールドスクール

礼文町浜中遺跡群での人類生態史調査

2014年8月1日（金）～8月31日（日）

※7月26日（土） 北海道大学にて海外からの学生参加者を対象としたオリエンテーションを実施

※岐阜県立関高等学校の野外実習を受入れ

### ○セミナー

- ・「北方人類生態史セミナー」

2014年5月4日（日）～5月9日（金）（於：アルバータ大学（カナダ エドモントン））

- ・「先住民考古学国際セミナー」

2014年12月10日（水）～12月14日（日）（於：オックスフォード大学）

- ・「生物人類学セミナー」

2015年1月11日（日）～1月12日（月）（於：オックスフォード大学）

- ・「北方圏の狩猟採集民の人類学・考古学セミナー」

2015年1月13日（火）～1月14日（水）（於：フローニンゲン大学極地研究センター（オランダ））

- ・「文化遺産国際セミナー」

2015年2月22日（日）～2月23日（月）（於：イースト・アングリア大学（連合王国 ノリッチ））

### ○研究者交流と共同研究

- ・プロジェクトメンバーによる班会議および全体会議

2014年4月12日（土）～4月14日（月）（於：琉球大学）

出席者：加藤博文ほか14名

- ・「礼文島から北ユーラシアに連なる人類史の世界」に関する一般者参加者向けの講義

2014年4月23日，5月14日，5月28日，6月25日，7月9日，7月23日（全て水曜日）

（於：朝日カルチャーセンター 札幌教室）

講師：加藤博文ほか5名

- ・プロジェクトメンバーによる研究会議

2014年12月17日（水）（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

出席者：加藤博文ほか8名

- ・サーミ文化遺産についての研究打ち合わせ

2015年2月8日（日）～2月11日（水）（於：オウル大学（フィンランド オウル））

出席者：加藤博文

- ・1.サーミの文化遺産返還問題についての資料収集と意見交換，2. 先住民文化遺産，先住民考古学についてのセミナー企画の打ち合わせ

2015年2月12日（木）～2月16日（月）（於：1. スウェーデン国立歴史博物館（スウェーデン スtockホルム），2. ウプサラ大学（スウェーデン ウプサラ））

出席者：加藤博文

- ・1. アイヌ・コレクションの収集経緯についての資料調査，2. アイヌ・コレクションの収集経緯についての資料調査およびグリーンランドにおけるイヌイット文化遺産の返還問題についての資料調査と意見交換

2015年2月17日（火）～2月20日（金）（於：1. モースゴー博物館およびオーフス大学（デンマーク オーフス），2. デンマーク国立博物館（デンマーク コペンハーゲン））

出席者：加藤博文

#### ○「国民との科学・技術対話事業」

- ・出張講義「人類の北方圏への適応，もう一つの人類史を考える」

2014年10月16日（木）（於：北海道札幌東高等学校）

講師：加藤博文

- ・出張講義「考古学からみたアイヌ民族史」

2014年12月5日（金）（於：立命館慶祥高等学校）

講師：加藤博文

- ・北海道小樽潮陵高等学校の訪問を受入れ

2015年3月31日（火）（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

対応者：加藤博文

#### ■平成27年度

##### ○礼文島国際フィールドスクール

礼文町浜中遺跡群での人類生態史調査

2015年8月1日（土）～8月31日（月）

※7月25日（土） 北海道大学にて海外からの学生参加者を対象としたオリエンテーションを実施

※岐阜県立関高等学校の野外実習を受入れ

## ○セミナー

- ・「生物人類学セミナー」

2016年1月9日（土）～1月13日（水）（於：オックスフォード大学（連合王国 オックスフォード））

- ・「先住民考古学国際セミナー」

2016年2月10日（水）～2月13日（土）（於：アバディーン大学（連合王国 アバディーン））

- ・「パブリック考古学セミナー」

2016年2月10日（水）～2月13日（土）（於：アバディーン大学（連合王国 アバディーン））

- ・「博物館における北方先住民族遺産の保存活用，アクセス権をめぐるセミナー」

2016年2月14日（日）～2月16日（火）（於：オックスフォード大学（連合王国 オックスフォード））

## ○研究者交流と共同研究

- ・プロジェクトメンバーによる班会議および全体会議

2015年4月25日（土）～4月26日（日）（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

出席者：加藤博文ほか14名

- ・第81回日本考古学協会総会において成果発表

2015年5月23日（土）～5月24日（日）（於：帝京大学）

出席者：加藤博文ほか5名

- ・ヨーロッパ考古学会

2015年9月2日（水）～9月5日（土）（於：グラスゴー大学（連合王国 グラスゴー））

出席者：加藤博文

- ・第11回国際狩猟採集民会議

2015年9月6日（日）～9月12日（土）（於：ウィーン大学（オーストリア ウィーン））

出席者：加藤博文

- ・サーミ文化遺産についての研究打ち合わせ

2015年10月20日（火）～10月27日（火）（於：ウプサラ大学ルンド大学（スウェーデン ウプサラ））

出席者：加藤博文

- ・1. アイヌ民族資料の調査計画打ち合わせ, 2. 先住民文化遺産, 先住民考古学についてのセミナー企画の打ち合わせ 3. サーミ民族資料の返還問題についてのヒアリング

2015年11月19日（木）～11月26日（木）（於：1. ピットリバース博物館（連合王国 オックスフォード）, 2. オックスフォード大学（連合王国 オックスフォード）3. ノルディスク民族博物館（ノルウェー オスロ））

出席者：加藤博文

- ・「北方圏の人類史」についてのワークショップと生物考古学研究の研究討議実施  
2016年1月14日（木）～1月16日（土）（於：1. ウプサラ大学（スウェーデン ウプサラ））

出席者：加藤博文 他8名

- ・「礼文島での考古学調査」についての講義実施及び研究交流  
2016年1月17日（日）～1月20日（水）（於：ヘルシンキ大学（フィンランド ヘルシンキ））

出席者：加藤博文

- ・本事業に係る大学院生の研究交流  
2016年1月9日（土）～1月14日（木）（於：ロンドン大学（連合王国 ロンドン））

出席者：平澤 悠 他3名

- ・スワン・ポイント遺跡出土資料分析他  
2016年1月18日（月）～2月18日（木）（於：アラスカ大学（米国 アラスカ））

出席者：平澤 悠

#### ○「国民との科学・技術対話事業」

- ・出張講義「北方圏の人類史」

2015年11月18日（水）（於：北海道立命館慶祥高等学校）

講師：加藤博文

- ・出張講義「北方圏の人類史」

2015年12月8日（火）～12月9日（水）（於：岐阜県立関高校）

講師：加藤博文

■平成28年度

○礼文島国際フィールドスクール

礼文町浜中遺跡群での人類生態史調査

2016年8月1日（月）～8月21日（火）

※岐阜県立関高等学校の野外実習を受入

※東京大学理学部実習の受入

○セミナー

- ・「生物人類学セミナー」

2017年1月12日（日）～1月14日（火）（於：オックスフォード大学（連合王国 オックスフォード））

- ・「北方考古学の成果と課題：移動・統合・アイデンティティ」

2017年1月15日（水）～2月20日（金）（於：ウプサラ大学ゴットランドキャンパス（スウェーデン ゴットランド島））

○研究者交流と共同研究

- ・プロジェクトメンバーによる班会議および全体会議

2016年4月9日（土）～4月10日（日）（於：北海道大学東京オフィス）

出席者：加藤博文ほか27名

- ・先住民族文化遺産 先住民文化財返還等取り組みについてのヒアリングと研究交流  
2016年4月26日（火）～5月4日（木）（於：ノルウェー サミ議会（ノルウェー））

出席者：加藤博文

- ・セミナー打ち合わせと研究交流

2016年5月5日（金）～5月9日（火）（於：ヘルシンキ大学（フィンランド ヘルシンキ））

出席者：加藤博文

- ・世界考古学会議京都大会 セッションでの報告と討論

2016年8月27日（土）～9月3日（土）（於：京都大学）

出席者：加藤博文ほか6名

- ・日本シベリア学会第2研究報告会でのセッションでの報告と討論

2016年11月19日（土）～11月20日（日）（於：千葉大学）

出席者：平澤悠

- ・セミナー実施打ち合わせ

2017年1月20日（金）～1月22日（日）（於：ヘルシンキ大学（フィンランドヘルシンキ））

出席者：加藤博文

#### ○プロジェクト若手研究員育成プログラムによる研究交流派遣

- ・2017年3月4日（土）～3月15日（水）（於：オーフス大学（ノルウェー オーフス）アバディーン大学（連合王国 アバディーン））

出席者：近藤祉秋

- ・2017年3月5日（日）～3月20日（月）（於：アラスカ大学（アメリカ フェアバンクス））

出席者：平澤悠

#### ○「国民との科学・技術対話事業」

- ・出張講義「小さな島からグローバルヒストリーを見る：礼文島に残された4000年の歴史」

2016年10月20日（木）（於：北海道札幌北高等学校）

講師：加藤博文

#### ■平成29年度（事業最終年度）

#### ○礼文島国際フィールドスクール

礼文町浜中遺跡群での人類生態史調査

2017年8月1日（火）～8月25日（金）

参加者：北大生 12名

海外からの参加学生 18名

国内からの参加学生 19名

※北海道大学サマーインスティテュートの一環として実施，岐阜県立関高等学校の野外実習を受入れ

## ○セミナー

- ・「北方圏における人類文化と環境適応」

2017年4月1日（土）～4月3日（月）（於：ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ バンクーバー））

- ・「中世温暖期の集団拡散と民族文化の統合」

2017年5月4日（木）～5月7日（日）（於：ウプサラ大学（スウェーデン ウプサラ））

- ・「生物人類学及び戦跡考古学セミナー」

2017年11月15日（水）～11月18日（土）（於：琉球大学）

- ・「移住・適応・先住性」

2018年3月21日（水）～3月25日（日）（於：オックスフォード大学（連合王国 オックスフォード））

## ○研究者交流と共同研究

- ・プロジェクトメンバーによる班会議及び全体会議

2017年4月15日（土）（於：北海道大学東京オフィス）

出席者：加藤博文ほか17名

- ・セミナー打ち合わせと研究交流

2017年12月7日（木）～12月10日（日）（於：オックスフォード大学（連合王国 オックスフォード））

出席者：加藤博文

## ○共同研究「北方圏における人類文化・環境適応・景観創造」に係る意見交換及び打ち合わせ

- ・2017年7月9日（日）～7月12日（水）（於：モスクワ大学（ロシア モスクワ））

出席者：加藤博文

- ・2017年12月11日（月）～12月15日（金）（於：デンマーク国立博物館（デンマーク コペンハーゲン））

出席者：加藤博文

- ・2017年12月10日（日）～12月17日（日）（於：デンマーク国立博物館（デンマーク コペンハーゲン））

出席者：平澤 悠

○プロジェクト若手研究員育成プログラムによる研究交流派遣

- ・2017年11月19日（日）～2018年3月3日（土）（於：コペンハーゲン大学デンマーク自然史博物館研究室（デンマーク コペンハーゲン））

出席者：蔦谷 匠

- ・2017年12月21日（木）～2018年3月3日（土）（於：コペンハーゲン大学デンマーク自然史博物館研究室（デンマーク コペンハーゲン））

出席者：澤藤 りかい

○「国民との科学・技術対話事業」

- ・出張講義「北方圏の人類史」

2018年1月17日（水）（於：立命館慶祥高校）

講師：加藤博文

- ・出張講義「北方圏の人類史」

2018年2月1日（木）（於：北海道立小樽潮陵高校）

講師：加藤博文

### 3. 展示活動

「博物館プロジェクト」(平成20年度～平成29年度)

「先住民族アート・プロジェクト」(平成21年度～平成27年度)

(プロジェクトリーダー：山崎幸治准教授)

博物館プロジェクト(平成20年度～平成29年度)

○企画展示(主催・共催)

■『テエタシンリッ テクルコチ 先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料—受けつぐ技—』

2009年2月1日～3月29日(於：北海道大学総合博物館(企画展示室))

主催：北大アイヌ・先住民研究センター/北大総合博物館

協力：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

(※関連イベント)

・オープニング・セレモニー(カムイノミ)

2009年2月1日10:00～(於：北海道大学総合博物館)

・シカ笛を作って、鳴らしてみよう&シカ猟のおはなし

2009年2月28日10:30～12:00(於：北海道大学総合博物館)

ゲスト：浦川太八

・作者による展示解説&アイヌの晴れ着を着てみよう

2009年2月28日, 3月20日13:00～13:30・14:30～15:00(於：北海道大学総合博物館)

・土曜市民セミナー「北大植物園のアイヌ資料：その歴史と特徴」

3月14日(土)13:30～15:00(於：北海道大学総合博物館)

加藤 克(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園 助教)

共催：北海道大学総合博物館/北海道大学アイヌ・先住民研究センター

(※図録)

・山崎幸治・加藤克・天野哲也編2009『teetasinrit tekrukoci 先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料—受けつぐ技—』北海道大学総合博物館・北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

・Koji Yamasaki, Masaru Kato, Tesuya Amano (eds.), 2012, teetasinrit tekrukoci : The handprints of our Ancestors. Ainu Artifacts Housed at Hokkaido University-Inherited Techniques. Hokkaido University Museum/Hokkaido University Center for Ainu & Indigenous Studies.

■『先住民と国境』

- ・北米先住民ヤキの世界：2010年11月19日～2011年2月13日（於：北海道大学総合博物館）
- ・アイヌと境界：2011年2月18日～5月8日（於：北海道大学総合博物館）  
主催：北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」.  
共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター.

（※関連イベント）

- ・土曜市民セミナー「インディアンの土地における事業」  
2010年11月20日13：30～15：30（於：北海道大学総合博物館）  
ビル・キロガ（ネイティヴアメリカンボタニクス社）  
共催：北海道大学総合博物館 /北海道大学スラブ研究センター/北海道大学アイヌ・先住民研究センター
- ・GCOE市民セミナー「追憶のヤキ儀礼—聖なる空間，女性の労働，死者のための2つの儀礼における文化的持続性」  
2011年2月11日13：30～15：30（於：北海道大学総合博物館）  
カースティン・エリクソン（アーカンソー大学准教授）  
共催：北海道大学総合博物館 /北海道大学スラブ研究センター/北海道大学アイヌ・先住民研究センター
- ・土曜市民セミナー「アイヌと境界—樺太アイヌの歴史と経験—」  
2011年2月19日13：30～15：30（於：北海道大学総合博物館）  
田村将人（北海道開拓記念館 学芸員）「サハリンでの国境の変遷と樺太アイヌ」  
檜木貴美子「私のライフストーリー：樺太アイヌとして」  
共催：北海道大学総合博物館 /北海道大学スラブ研究センター/北海道大学アイヌ・先住民研究センター

（※図録）

- ・水谷裕佳編2011『北米先住民ヤキの世界—World of the Yaqui People—』北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」。
- ・山崎幸治・木山克彦・宇佐見祥子編2011『アイヌと境界—グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」第4期展示—』北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」。
- ・Koji Yamasaki, Katsuhiko Kiyama, Shoko Usami(eds),2011,Ainu and Boundaries—Global COE program "Reshaping Japan's Border Studies" 4th museum exhibition".

Hokkaido University Global COE program "Reshaping Japan's Border Studies".

■『保莉実写真展 カントリーに呼ばれて—オーストラリア・アボリジニとラディカル・オーラル・ヒストリー』

2011年4月8日～5月8日（於：北海道大学総合博物館）

主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター．共催：北海道大学総合博物館  
/北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」．

協力：保莉実とつながる会/北海道立北方民族博物館/フレメン写真製作所/佐藤守功デザイン事務所

（※関連イベント）

・座談会「保莉実の歴史学をいかに受けつぐのか？」

2011年4月16日13：30～15：30（於：北海道大学総合博物館）

窪田幸子〔神戸大学教授〕，野上元〔筑波大学准教授〕，谷本晃久〔北海道大学准教授〕

主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター．

共催：北海道大学総合博物館/北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」．

■『北米先住民ヤキの世界 東京巡回展』

2012年2月2日～2月16日（於：早稲田大学ワセダギャラリー）

主催：早稲田大学オーストラリア研究所

共催：北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」/北海道大学アイヌ・先住民研究センター/北海道大学総合博物館．

■AINU TREASURES：A Living Tradition in Northern Japan

2013年1月20日～5月5日（於：East-West Center Gallery（ハワイ州ホノルル））

共催：East-West Center Arts Program/Center for Ainu and Indigenous Studies,  
Hokkaido University.

Curator：Michael Schuster

Guest Curator, Photographer：Koji Yamasaki

Additional research：Masaru Kato, Nanako Iwasa, Vincent Mitsuharu Okada

Exhibit design：Lynne Najita, Michael Schuster

Guest visual artists and lecturers：Toru Kaizawa, Jirota Kitahara

Guest performers : Oki, Marewrew, Shusei Toko, Ikuo Yamamaru

※関連イベント

- 2013年1月20日14:00~15:30

Exhibition Gala Opening including reception, invocation ceremony and art demonstration.

- 2013年2月3日14:00~15:00

Illustrated talk "Ainu 101 : Japan's Indigenous People" by Vincent Mitsuharu Okada, UH doctoral candidate in social welfare.

- 2013年2月17日14:00~15:00

Illustrated hands-on presentation "Ainu : Teaching Young Learners the Importance of Preserving Culture and Language" by Terrina Wong and Naomi Hirano-Omizo.

- 3月3日14:00~15:00

Performance Demonstration by Oki and Marewrew quartet, renowned Ainu musicians

- 3月10日14:00~15:00

Illustrated talk "From ku=kor ikor (my treasures) toan=kor ikor (our treasures) : New Perspectives and Challenges in Ainu Art" by Nanako Iwasa, M.Ed. and doctoral student, Hokkaido University Graduate School of Education.

- 4月14日14:00~15:00

Illustrated talk "An Illegal Dam Still Stands : The Nibutani Dam and Nibutani Village."

UH Law Professor Mark Levin discusses environmental action by Ainu villagers.

- 5月5日14:00~15:00

Illustrated talk "Handprints of Our Ancestors : Curating an Exhibition about Ainu Traditions and Continuity." Guest curator Koji Yamasaki, Associate Professor, Hokkaido University Center for Ainu and Indigenous Studies, discusses his work with the Ainu community.

■ 『久保寺逸彦—アイヌ文学研究の足跡』

2014年3月10日~3月23日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

主催：北海道立アイヌ民族文化研究センター（主管）/北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

(※関連イベント)

・講演会「久保寺逸彦氏とアイヌ文学研究」

2014年3月21日14:00~17:00 (於:北海道大学)

中川 裕 (千葉大学教授), 佐々木利和 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター特任教授)

主催:北海道立アイヌ民族文化研究センター(主管)/北海道大学アイヌ・先住民研究センター.

■『昭和レトロ アイヌのお土産大集合』サテライト企画展

2016年3月26日~5月13日, 6月6日~10月31日 (於:阿寒湖アイヌコタン アイヌ文化創造伝承館)

主催:北海道大学アイヌ・先住民研究センター/阿寒湖アイヌシアター運営協議会.

■『台湾・烏来タイヤル工芸展, 烏來泰雅工藝展』(阿寒会場)

2016年5月16日(月)~6月2日(木) (於:阿寒湖アイヌコタン アイヌ文化創造伝承館)

共催:北海道大学アイヌ・先住民研究センター/台湾国立政治大学烏来楽酷計画(ウライ・ロカ・プロジェクト)/新北市烏来区原住民編織協会/新北市烏来区公所/阿寒湖アイヌシアター運営協議会

■『台湾・烏来タイヤル工芸展, 烏來泰雅工藝展』(二風谷会場)

2016年5月18日~5月26日 (於:二風谷工芸館)

共催:北海道大学アイヌ・先住民研究センター(主管)/台湾国立政治大学烏来楽酷計画(ウライ・ロカ・プロジェクト)/新北市烏来区原住民編織協会/新北市烏来区公所/平取町立二風谷アイヌ文化博物館/二風谷民芸組合.

■『旅する木彫り熊—アート・ツーリズム・境界』(セミナー関連展示)

2017年3月4日 (於:北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

主催:北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット(UBRJ)/北海道大学アイヌ・先住民研究センター

(※関連イベント)

・セミナー「旅する木彫り熊—アート・ツーリズム・境界」

2017年3月4日13:00～15:30（於：北海道大学）

大谷茂之〔八雲町郷土資料館・八雲町木彫り熊資料館学芸員〕，荒木 繁〔木彫家〕

主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット  
（UBRJ）/北海道大学アイヌ・先住民研究センター

■『二風谷，昭とおみやげ物語』サテライト企画展

2017年6月10日～7月9日（於：二風谷工芸館）

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター(主管)/平取町立二風谷アイヌ文化博物館

協力：二風谷民芸組合

（※関連イベント）

- ・「古写真を手に昭和の二風谷を歩こう」

2017年6月24日13:00～14:00（於：二風谷）

ナビゲーター：貝澤雪子〔二風谷民芸組合〕

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター(主管)/平取町立二風谷アイヌ文化博物館

協力：二風谷民芸組合

○北海道大学総合博物館 センター展示

■『新冠のアイヌ語地名－狩野義美氏の伝承－』

2016年7月26日～2017年7月30日（於：北海道大学総合博物館 当センターブース）

主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（アイヌ・先住民言語アーカイヴ・プロジェクト/博物館プロジェクト）

協力：新ひだか町博物館/北海道大学附属図書館/株式会社エフ・オブジェクト  
（狩野義美，大下謙二，新川剛生，藪中剛司，加藤克）

■『「アイヌ」のモノとイメージ』

2017年8月4日～（開催中）（於：北海道大学総合博物館 当センターブース）

主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（博物館プロジェクト）

## ○展示協力など

### 【特別協力】

- ・『語り、継ぐ。—アイヌ口承文芸の世界—』

2009年5月30日～7月20日（於：北海道立文学館）

主催：北海道立アイヌ民族文化研究センター/北海道立文学館/財団法人北海道文学館

特別協力：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

### 【協力1】

- ・企画展『在るということ—あるアイヌたちの日常と本来性—』

2012年12月3～8日（於：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 ※コンテンツ提供）

主催：慶應義塾大学HAPP

- ・国立民族学博物館 常設展示場新構築「アイヌの文化」（展示リニューアル）

2014年7月～2016年6月（於：国立民族学博物館。※コンテンツ提供，委員3名）

- ・企画展『伝統文化は誰のもの—文化資源をめぐる協働を考える—』

2014年10月31日～11月13日（於：首都大学東京 ※展示およびシンポジウム報告）

主催：首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループ。

### 【協力2】

- ・財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 アイヌ工芸品展

平成22年度『アイヌ—美を求める心』，平成23年度『千島・樺太・北海道 アイヌのくらし』，平成24年度『AINU ART—風のかたりべ』，平成25年度『ロシアが見たアイヌ文化—ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより』，平成25年度『アイヌの工芸—東北のコレクションを中心に—』，平成27年度『木と生きる—アイヌのくらしと木の造形』，平成28年度『イカラカラーアイヌ刺繍の世界』，平成29年度『現れよ。森羅の生命—木彫家 藤戸竹喜の世界』 ※企画委員等

- ・国立アイヌ民族博物館設立準備 ※委員等

※上記以外でも，センター教員は，多くの他機関の博物館関連事業や研究活動に

協力。

## 先住民族アート・プロジェクト(平成21年度～平成27年度)

### ■研究会

#### ・第1回

2009年6月27日（於：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟）

山崎幸治・伊藤敦規「先住民族アート・プロジェクト趣旨説明」

2009年6月28日（於：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟）

伊藤敦規「先住民族アートに関するプロモーションの現状報告—米国先住民ホピのジュエリーを事例として」

#### ・第2回

2009年10月3日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

深山直子「マオリ・アートの現代的展開—『トイ・イホ』商標制度の導入を中心に—」

貝澤和明「アイヌ工芸品と観光について—アイヌ協会の取り組み—」

2009年10月4日（於：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟）

IPinCH（文化遺産における知的財産）ワークショップにオブザーバー参加

#### ・第3回

2010年2月13日（於：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟）

青柳由香「文化と法制度—木彫と刺繍にみられるアイヌ文様を題材に—」

2010年2月14日（於：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟）

深山直子「『トイ・イホ』商標制度の急転回—予備的報告—」

#### ・第4回

2010年6月5日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

(株)北海道二十一世紀総合研究所「諸外国・地域における先住民族の伝統工芸品産業に係わる調査報告」

2010年6月6日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

伊藤敦規「米国南西部先住民の商用アートの価格構造」

川上 哲「卸業とアイヌ工芸の現在」

#### ・第5回

2010年7月31日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

長谷川由希「オーストラリアの国立・州立美術館におけるアボリジナル・アートの成立—オーストラリア国立美術館を中心に—」

浅川 泰「アイヌ芸術の理解のために（1）」

2010年8月1日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

齋藤玲子「アイヌ工芸の過去と現在 200 年のメッセージ」

・第6回

2010年11月27日（於：ウヌカラ チセ＜出会いの家＞，釧路市阿寒町）

青柳由香「文化と法制度—木彫と刺繍にみられるアイヌ文様を題材に（2）」

伊藤敦規「ホピ・ズニ作家展—先住民の知的財産問題の解決に向けた一つの実践—」

2010年11月28日（於：釧路市阿寒町）

阿寒アイヌコタン，あかん遊久の里 鶴雅「レラの館」など見学

・第7回

2011年7月2日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

海野るみ「アートのある風景—アパルトヘイト後南アフリカの曖昧な多文化とアート—」

2011年7月3日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

貝澤 徹「アイヌ伝統工芸と現代作品のバランス—平取町二風谷でのアイヌ工芸の事例—」

・第8回

2011年9月3日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

貝澤文俊「会社形態におけるアイヌ・アート」

川村則子「作品制作について」

2011年9月4日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

小川早苗「事業所形態におけるアイヌ・アート」

・第9回

2011年10月15日（於：国立民族学博物館）

綾部真雄「エスニック・ブランドを創る—インターネット・ショッピングの可能性と課題—」

2011年10月16日（於：国立民族学博物館）

谷本和子「ナヴァホ・インディアン社会における伝統技術とジェンダー—『機織り』をする男性たち—」

・第10回

2011年12月10日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

内田純一「民族アートの知財戦略とブランディング—選択肢としてのオープンとクローズド—」

2011年12月11日（於：北海道大学アイヌ・先住民研究センター）  
成果報告書に関する協議

■国際シンポジウム『先住民族の文化資源と知的財産—その理論と実践—』 IPinCH  
（文化遺産における知的財産）

2011年1月18日（ニュー阿寒ホテル，釧路市阿寒町）

青柳由香「アイヌ文化と法制度」

伊藤敦規「日本市場における米国先住民の知的財産権『侵害』—ひとつの解決策としてのホピ・ズニ作家展—」

床 州生「アイヌ・アートと知的財産—阿寒アイヌコタンでの実践—」

※報告書：山崎幸治・伊藤敦規（編著）2012『世界のなかのアイヌ・アート』北海道大学アイヌ・先住民研究センター（先住民族アート・プロジェクト報告書）

■国際シンポジウム『アイヌ・アートが担う新たな役割—米国先住民アートショーに学ぶ—』

2014年1月26日（日）13:00～17:30（於：北海道大学学術交流会館 小講堂）

主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（先住民族アート・プロジェクト）

共催：国立民族学博物館

関連企画1：ミニ展示『アメリカ先住民アート展』

関連企画2：映像作品上映『インディアン・ジュエリーの現在』（国立民族学博物館ビデオテーク，番組番号1706，27分，2010年撮影，2011年製作，2013年公開）

報告者：

ロバート・ブルーニグ〔北アリゾナ博物館 館長〕

ジム・イノーテ〔アシウィ・アワン博物館・遺産センター（ズニ博物館）館長〕

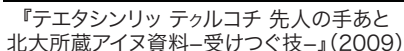
オクティビアス・シオウテワ〔ズニ宝飾品作家・宗教的指導者〕

貝澤和明〔公益社団法人北海道アイヌ協会 主事，民・工芸品担当〕

オーガナイザー：

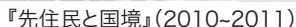
山崎幸治〔北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授〕

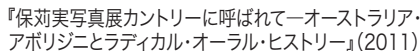
伊藤敦規〔国立民族学博物館 研究戦略センター 助教〕



共催：北海道大学 アイス・先住民研究センター

世界の様々な地域に居住する先住民の人々の中には、国家によって引かれた国境、さらには、社会的、文化的な「境界」の狭間で生活する人々が多く存在します。本展示では、地理的、そして概念的な「境界」と先住民の関わりについて、北米大陸のヤキと日本のアイヌの事例を通じてご紹介いたします。



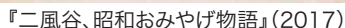
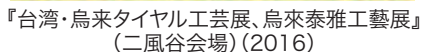
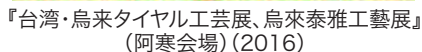


Curator: **Michael Schuster**  
Guest Curator, Photographer: **Koji Yamasaki**  
Additional research: **Masaru Kato, Nanako Iwasa, Vincent Mitsuharu Okada**  
Exhibit design: **Lynne Najita, Michael Schuster**

Guest visual artists and lecturers: **Toru Kaizawa, Jirota Kitahara**  
Guest performers: **Oki, Marewrew, Shussei Toko, Ikuyo Yamamaru**



175



## 4. センターの出版物

### ○センター叢書

北海道大学アイヌ・先住民研究センター叢書1

アイヌ・先住民研究センター編『アイヌ研究の現在と未来』（北海道大学出版会）2009年3月31日

北海道大学アイヌ・先住民研究センター叢書2

水谷裕佳『先住民パスクア・ヤキの米国編入―越境と認定』（北海道大学出版会）2011年3月30日

北海道大学アイヌ・先住民研究センター叢書3

佐々木利和『アイヌ史の時代へ―余瀝抄―』（北海道大学出版会）2013年6月25日

### ○ブックレット

第1号 佐藤幸治「日本国憲法と先住民族であるアイヌの人びと」2012年2月15日

第2号 富田友子『トンコリの世界』2013年3月20日

第3号 スチュアート ヘンリ編“The Ainu： Indigenous People in Japan”2014年

第4号 今石みぎわ・北原次郎太『花とイナウー世界の中のアイヌ文化―』2014年

第5号 常本照樹・落合研一編『台湾の原住民族政策―民族認定と博物館―』2014年

第6号 狩野義美『古川アシンノカルの生涯―新冠地方の故事と伝承』2015年

第7号 Tomoko TOMITA “The World of Tonkori” 2016年

第8号 Cais(ed.) “An Introduction to Ainu Studies” 2018年

第9号 Migiwa IMAISHI, Jirota KITAHARA “Flowers and Inau -Ainu Culture in the World-” 2018年

### ○プロジェクト報告書

#### ■平成23年度

##### ・アイヌ史プロジェクト

『新しいアイヌ史の構築 先史編 古代編 中世編』

##### ・ヘリテージツーリズム・プロジェクト

『先住民文化遺産とツーリズム』および『音声ガイドシステム試行版ガイダンスビデオ』，別冊『アイヌヘリテージトレイル ガイドブック』（北大キャンパス編，札幌駅周辺編，登別・虎杖浜編，知床ウトロ編 計4冊）

##### ・アイヌ語データベース・プロジェクト

『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』

『西平ウメ伝承 トンコリ楽曲集』

・社会調査プロジェクト

『現代アイヌの生活の歩みと意識の変容』

・先住民文化アート・プロジェクト

『世界のなかのアイヌ・アート』

・博物館プロジェクト

『アイヌと境界Ainu and Boundaries』

『北米先住民ヤキの世界 World of the Yaqi People』

“teetasinrit tekrukoci The Handprints of our Ancestors”

『先住民と国境』DVD（企画・監修 GCOEプログラム、アイヌ・先住民研究センター）

“Indigenous Peoples and Borders DVD”（企画・監修 GCOEプログラム、アイヌ・先住民研究センター）

■平成24年度

・言語アーカイヴ・プロジェクト

『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究(2)』

『樺太アイヌ語例文集（1）』

『和田文治郎 樺太アイヌ説話集1』

・古文書プロジェクト

『にかほ市象潟郷土資料館所蔵 森家旧蔵「蝦夷方言藻汐草 全」翻刻・解題』

■平成25年度

・先住民文化遺産・ツーリズム・プロジェクト

“Indigenous Heritage and Tourism; Theories and Practices on Utilizing the Ainu Heritage”

・言語アーカイヴ・プロジェクト

『タチヤナ・ウリタ伝承集』

『ニヅフ語サハリン方言語彙集』

『アイヌ語十勝方言例文集1』

『和田文治郎 樺太アイヌ説話集2』

『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究（3）』

- ・社会調査プロジェクト

『現代アイヌの生活と意識の多様性』

- ・古文書プロジェクト

『ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所所蔵 田藩文庫旧蔵「東蝦夷彙考」翻刻・解題』

■平成26年度

- ・言語アーカイヴ・プロジェクト

『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究（4）』

『アイヌ語厚別方言語彙集』

- ・先住民族アート・プロジェクト

『アイヌ・アートが担う新たな役割—米国先住民アートショーに学ぶ』

■平成27年度

- ・言語アーカイヴ・プロジェクト

『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究（5）』

『和田文治郎 樺太アイヌ説話集3』

『樺太アイヌ語例文集（2）』

『アイヌ語十勝方言會話小辞典』

- ・博物館プロジェクト / 言語アーカイヴ・プロジェクト

『北海道新冠地方におけるアイヌ語地名の調査と分析』

■平成28年度

- ・言語アーカイヴ・プロジェクト

『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究（6）』

『和田文治郎 樺太アイヌ言語・文化誌 出産・育児・通過儀礼』

『ニヴフ言語文化資料集3：「パル・ニヴゲン」（タチヤナ・ウリタ伝承集ロシア語版）：CD付』

『ニヴフ言語文化資料集4：ナジェジダ・タンジナ伝承集：CD付』

『アイヌ語厚別方言語彙集』

- ・古文書プロジェクト

『国立公文書館内閣文庫所蔵 昌平坂学問所旧蔵「蝦夷語集」元・亨 影印・翻刻』

## ■平成29年度

### ・言語アーカイヴ・プロジェクト

『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究（7）』

『アイヌ語十勝方言文法概説』

### ・古文書プロジェクト

『国立公文書館内閣文庫所蔵 昌平坂学問所旧蔵「蝦夷語集」利・貞 影印・翻刻』

## ○その他出版物

ニューズレター第1号 2011年9月30日発行

ニューズレター第2号 2012年5月30日発行

## 5. 授業提供

### ■平成19年度

- ・大学院共通科目「先住民族をめぐる法と政治」

担当者：常本照樹（アイヌ・先住民研究センター），阿部ユボ（北海道ウタリ協会副理事長），長谷川晃（法学研究科），辻 康夫（法学研究科），吉原秀喜（二風谷アイヌ文化博物館学芸員），平村 正（前・平取町教育長），西島達夫（北海道ウタリ協会平取支部副支部長）・常本照樹，吉田邦彦（法学研究科），山崎幸治（アイヌ・先住民研究センター）

### ■平成20年度

- 全学教育科目（総合科目）「アイヌ・先住民の現在」

担当者：常本照樹，川上将史，横山英介，桑山敬己，清水裕二，ジェフ・ゲーマン，吉原秀喜，天野哲也，佐藤知己，阿部一司，辻康夫，小坂博宣，萱野志朗，中村康利，山崎幸治

### ■平成22年度

- 全学教育科目（総合科目）「アイヌ・先住民研究の現在」

担当者：小内透，谷本晃久，北村嘉恵，山崎幸治

- 大学院文学研究科授業

- ・佐々木利和「北方文化論特殊講義・アイヌ絵論」
- ・北原次郎太「民族言語学特別演習・アイヌ語口承文芸論」

### ■平成23年度

- 全学教育科目（総合科目・主題別科目）

- ・北原次郎太「アイヌ語を通じて文化を学ぶ」
- ・佐々木利和，加藤博文，北原次郎太，山崎幸治，丹菊逸治，落合研一「アイヌ・先住民研究の現在」
- ・加藤博文「歴史の視座 ヒトとは何か：進化・歴史・文化」

- 大学院文学研究科授業

- ・佐々木利和「日本史学特殊講義」

- ・加藤博文「北方文化論特殊講義：先住民考古学とアイヌ民族史（11）」
- ・北原次郎太「言語文化比較論特殊講義」
- ・佐々木利和「日本史学特殊講義」
- ・山崎幸治「歴史文化学特殊講義」

## ■平成24年度

### ○全学教育科目（総合科目・主題別科目）

- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（1）」
- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（2）」
- ・加藤博文「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）」
- ・加藤博文「歴史の視座 ヒトとは何か：進化・歴史・文化」
- ・山崎幸治ほか「人間と文化 アイヌ・先住民研究の現在」

### ○大学院文学研究科

- ・丹菊逸治「言語文化比較論特殊講義」
- ・北原次郎太「言語文化比較論特殊講義」
- ・山崎幸治「歴史文化学特殊講義」
- ・加藤博文「北方文化論特殊講義：先住民考古学とアイヌ民族史（12）」

### ○文学部専門科目

- ・山崎幸治，北原次郎太ほか「博物館展示論」

## ■平成25年度

### ○全学教育科目（総合科目・主題別科目）

- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（1）」
- ・加藤博文「一般教育演習（フレッシュマンセミナー） 遺跡を探そう」
- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（2）」
- ・加藤博文「歴史の視座 ヒトとは何か：進化・歴史・文化」
- ・山崎幸治ほか「人間と文化 アイヌ・先住民研究の現在」

### ○大学院文学研究科

- ・丹菊逸治「言語文化比較論特殊講義 北方諸民族の口承文芸論」
- ・北原次郎太「言語文化比較論特殊講義 アイヌ語口承文芸を読む」

- ・山崎幸治「歴史文化学特殊講義 先住民族と文化資源」
- ・加藤博文「北方文化論特殊講義 先住民考古学とアイヌ民族史（13）」

○文学部専門科目

- ・山崎幸治，北原次郎太「博物館展示論」

■平成26年度

○全学教育科目（総合科目・主題別科目）

- ・加藤博文，蓑島栄紀「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）遺跡を探そう」
- ・加藤博文，蓑島栄紀「一般教育演習（フレッシュマンセミナー） International Anthropological Field School in Rebun Island」
- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（1）」
- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（2）」
- ・加藤博文「歴史の視座 ヒトとは何か：人類史入門」
- ・山崎幸治ほか「人間と文化 アイヌ・先住民研究の現在」

○大学院文学研究科

- ・丹菊逸治「言語文化比較論特殊講義 北方諸民族の口承文芸論」
- ・北原次郎太「言語文化比較論特殊講義 アイヌ語口承文芸を読む」
- ・山崎幸治「歴史文化学特殊講義 先住民族と文化資源」
- ・蓑島栄紀「日本史学特殊講義 古代日本・北東アジア史と『交流』研究」
- ・加藤博文「北方文化論特殊講義 先住民考古学とアイヌ民族史（14）」

○文学部専門科目

- ・山崎幸治，北原次郎太「博物館展示論」

■平成27年度

○全学教育科目（総合科目・主題別科目）

- ・加藤博文，蓑島栄紀，長沼正樹「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）遺跡を探そう」
- ・加藤博文，蓑島栄紀，長沼正樹「一般教育演習（フレッシュマンセミナー） International Archaeological Field School in Rebun Island Aプログラム」
- ・加藤博文，蓑島栄紀，長沼正樹「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）」

## International Archaeological Field School in Rebun Island Bプログラム」

- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（１）」
- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（２）」
- ・加藤博文「歴史の視座 ヒトとは何か：人類史入門」
- ・センター専任教員「人間と文化 アイヌ・先住民研究の現在」

## ○大学院文学研究科

- ・丹菊逸治「言語文化比較論特殊講義 北方諸民族の口承文芸論」
- ・北原次郎太「言語文化比較論特殊講義 アイヌ語口承文芸を読む」
- ・山崎幸治「歴史文化学特殊講義 先住民族と文化資源」
- ・蓼島栄紀「日本史学特殊講義 古代日本・北東アジア史と『交流』研究」
- ・加藤博文「北方文化論特殊講義 先住民考古学とアイヌ民族史（15）」
- ・加藤博文「スラブ地域文化論特別演習 シベリア民族史：民族起源論の系譜」

## ○文学部専門科目

- ・山崎幸治，北原次郎太「博物館展示論」

## ○大学院共通科目

- ・加藤博文，丹菊逸治ほか「極東・北極圏の環境・文化・開発—RJE3概論」
- ・加藤博文ほか「極東・北極圏の環境・文化・開発—RJE3特別実習」
- ・丹菊逸治，落合研一，蓼島栄紀「アイヌ・先住民研究特別講義Ⅰ」

## ○国際交流科目

- ・加藤博文「2016年春季短期留学スペシャル・プログラム」～オックスフォード大学
- ・加藤博文「RJE3準備科目短期留学」～極東連邦大学・北東連邦大学

## ■平成28年度

## ○全学教育科目

- ・加藤博文，蓼島栄紀「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）遺跡を探そう」
- ・加藤博文，蓼島栄紀「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）International Archaeological Field School in Rebun Island」
- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（１）」

- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ(2)」
- ・センター専任教員「人間と文化 アイヌ・先住民研究の現在」
- ・加藤博文「歴史の視座 ヒトとは何か：人類史入門～導入編」
- ・加藤博文「歴史の視座 ヒトとは何か：人類史入門～発展編」

#### ○大学院文学研究科

- ・丹菊逸治「言語文化比較論特殊講義 北方諸民族の口承文芸論」
- ・北原次郎太「言語文化比較論特殊講義 アイヌ民族の祭祀と文学」
- ・山崎幸治「歴史文化学特殊講義 先住民族と文化資源」
- ・蓑島栄紀「日本史学特殊講義 古代日本・北東アジア史と『交流』研究」
- ・加藤博文「北方文化論特殊講義 先住民考古学とアイヌ民族史(16)」
- ・加藤博文「スラブ地域文化論特別演習 シベリア民族史：民族起源論の系譜(16)」

#### ○学部科目

- ・落合研一「特殊講義Ⅱ 現代法制論/先住民法(学部・大学院併合授業)」
- ・山崎幸治, 北原次郎太「博物館展示論」

#### ○大学院共通科目

- ・加藤博文ほか「極東・北極圏の環境・文化・開発－RJE3概論」
- ・加藤博文ほか「極東・北極圏の環境・文化・開発－RJE3演習Ⅰ・Ⅱ」
- ・加藤博文ほか「極東・北極圏の環境・文化・開発－RJE3演習 特別演習」
- ・センター専任教員「アイヌ・先住民研究特別講義Ⅰ」

#### ○国際交流科目

- ・加藤博文・山内太郎「2017年春季短期留学スペシャル・プログラム」～オックスフォード大学
- ・近藤祉秋・加藤博文「2017年春季短期留学スペシャル・プログラム」～ブリティッシュ・コロンビア大学
- ・加藤博文「RJE3準備科目短期留学」～極東連邦大学・イルクーツク国立大学

#### ■平成29年度

#### ○全学教育科目(総合科目・主題別科目)

- ・加藤博文，蓑島栄紀「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）アイヌの歴史と文化を歩く」
- ・加藤博文，蓑島栄紀「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）International Archaeological Field School in Rebun Island」（SI科目）
- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（1）」
- ・北原次郎太「思索と言語 アイヌ語を通して文化を学ぶ（2）」
- ・センター専任教員「人間と文化 アイヌ・先住民研究の現在」
- ・加藤博文「歴史の視座 ヒトとは何か：人類史入門～入門編」
- ・加藤博文「歴史の視座 ヒトとは何か：人類史入門～発展編」

#### ○大学院文学研究科

- ・丹菊逸治「言語文化比較論特殊講義 北方諸民族文学論」
- ・北原次郎太「言語文化比較論特殊講義 アイヌ民族の祭祀と文学」
- ・山崎幸治「歴史文化学特殊講義 先住民族と文化資源」
- ・蓑島栄紀「日本史学特殊講義 古代日本・北東アジア史と『交流』研究」
- ・加藤博文「北方文化論特殊講義 先住民考古学とアイヌ民族史（17）」
- ・加藤博文「スラブ地域文化論特別演習 シベリア民族史：民族起源論の系譜（17）」

#### ○学部科目

- ・丹菊逸治「民族言語学 北方諸民族と言語学」
- ・落合研一「特殊講義Ⅱ 現代法政論/先住民法（学部・大学院併合授業）」
- ・山崎幸治，北原次郎太「博物館展示論」

#### ○大学院共通科目

- ・加藤博文ほか「RJE3極東・北極圏研究概論－日露交流プログラム：環境・文化・開発－」
- ・加藤博文，近藤祉秋「RJE3礼文国際フィールドスクール－日露交流プログラム：環境・文化・開発－」
- ・加藤博文ほか「RJE3シベリア学実習：歴史・文化・民族極東・北極圏の環境・文化・民族」
- ・加藤博文ほか「RJE3極東・北極圏研究特別演習」
- ・専任教員「アイヌ・先住民研究特別講義Ⅰ」

○国際交流科目

- ・加藤博文・山内太郎「2018年春季短期留学スペシャル・プログラム」～オックスフォード大学
- ・近藤祉秋「2018年春季短期留学スペシャル・プログラム」～ブリティシュ・コロンビア大学
- ・加藤博文「RJE3準備科目短期留学」～極東連邦大学・イルクーツク国立大学

## 6. 海外学術交流協定の状況

### ■平成19年度

- ・台湾・国立政治大学原住民族研究中心との部局間交流協定を2007年10月18日に締結

### ■平成20年度

- ・ハワイ大学マノア校との大学間学術交流に関する協定及び学生交流に関する覚書を2008年6月30日に更新（当センターが責任部局）

### ■平成21年度

- ・オクラホマ大学との大学間交流協定を2009年3月25日に締結（当センターが責任部局）

### ■平成22年度

- ・トロムソ大学サーミ研究センターとの部局間交流協定を2010年8月5日に調印
- ・ヘルシンキ大学との大学間交流協定を2011年3月11日に締結（当センターが責任部局）

### ■平成23年度

- ・ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所との「「東蝦夷彙考」写本と「蝦夷生計図説」写本に関する国際共同研究計画（覚書）」（研究期間：2011年度～2014年度）を2011年12月28日に調印

### ■平成25年度

- ・オックスフォード大学東アジア考古学・芸術・文化センターとの部局間交流協定を2013年10月18日に締結

### ■平成26年度

- ・英国アバディーン大学と北海道大学との学術交流協定を2014年5月21日に調印（当センターが責任部局）
- ・ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所との「サンクトペテルブルク市所在アイヌ関連古文書に関する国際共同研究覚書」（研究期間：2015年度～2018年

度)を2014年12月1日に調印

■平成28年度

- ・国立台湾原住民族研究センターとの部局間交流協定を2017年3月17日に調印

## 執 筆 者

- |                          |                                |
|--------------------------|--------------------------------|
| 常本 照樹（つねもと・てるき）          | 北海道大学アイヌ・先住民研究センター長・大学院法学研究科教授 |
| 中村 睦男（なかむら・むつお）          | 北海道大学名誉教授・元総長                  |
| 北原次郎太（きたはら・じろうた・モコットウナシ） | 北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授          |
| 丹菊 逸治（たんぎく・いつじ）          | 北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授          |
| 谷本 晃久（たにもと・あきひさ）         | 北海道大学大学院文学研究科教授・センター兼務教員       |
| 佐々木利和（ささき・としかず）          | 北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員教授         |
| 山崎 幸治（やまさき・こうじ）          | 北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授          |
| 小内 透（おない・とおる）            | 北海道大学大学院教育学研究科教授・センター兼務教員      |
| 加藤 博文（かとう・ひろふみ）          | 北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授           |
| 長谷川 晃（はせがわ・こう）           | 北海道大学理事・副学長・大学院法学研究科教授         |

---

## アイヌ・先住民研究センターの10年—2007～2017

北海道大学アイヌ・先住民研究センター（編集）

2018年9月20日 発行

発行者 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

〒060-0808 北海道札幌市北区北八条西六丁目 Tel. 011-706-2859（代表）

<http://www.cais.hokudai.ac.jp/>

柏楊印刷株式会社（印刷）

ISBN 978-4-907256-09-8